山口県埋蔵文化財センター調査報告　第107集

田布施町埋蔵文化財調査報告　第９集

見　用　遺　跡

２０２０

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

田布施町教育委員会

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第107集

田布施町埋蔵文化財調査報告　第９集

見用遺跡（みよういせき）

２０２０

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

田布施町教育委員会

序

本書は、熊毛郡田布施町麻郷奥に所在する見用遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、国営緊急農地再編整備事業「南周防地区」の工事に先立ち、中国四国農政局南周防農地整備事業所から委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団と田布施町教育委員会が実施しました。

今回の調査では、弥生時代の竪穴建物・土坑や中世の井戸・掘立柱建物などを検出し、多数の弥生土器や中世の土器や陶磁器などが出土しました。

とりわけ、１区で検出した井戸に投棄された多量の土師器の皿・杯・椀や中国製の青白磁などは、県東部地域の中世前期の指標となる重要な資料と考えられます。

今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただければ幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

令和２年３月

公益財団法人山口県ひとづくり財団
理事長　原　田　尚

序

本書は、熊毛郡田布施町麻郷奥に所在する見用遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。

この発掘調査は、国営農地再編整備事業の実施に先立ち、中国四国農政局南周防農地整備事業所の委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化センターが田布施町教育委員会と共同で実施したものであり、農地再編整備事業に伴ってやむを得ず消失することになる部分について記録保存をするためです。

調査した結果、見用遺跡では、弥生時代から室町時代の遺構が見つかっており、遺物としては縄文時代の土器片や弥生時代の勾玉・管玉、平安・鎌倉時代の青磁・白磁椀などが見つかっています。

この見用遺跡の周辺には、弥生時代～古墳時代のものと思われる奈良二ツ池遺跡があり、守吉遺跡、神過原遺跡や山崎原遺跡などでは縄文時代から中世までの遺物等も発見されていることから、この周辺（奈良台川沿いやその丘陵地）には縄文、弥生、古墳時代から現在に至るまで人々が継続して生活し続けていることがわかります。

本書が、郷土の歴史や文化財保護への理解を深める資料として、さらには教育や郷土の歴史資料として活用されることを願っています。

最後に、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたってご指導・ご協力をいただいた関係者の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

令和２年３月

田布施町教育委員会
教育長　尾　﨑　龍　彦

例　言

1　本書は、平成31（令和元）年度に実施した見用遺跡（山口県熊毛郡田布施町麻郷奥地内）の発掘調査報告書である。

2　調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が農林水産省中国四国農政局南周防農地整備事業所の委託〔契約名：南周防農地整備事業　麻郷奥団地埋蔵文化財発掘調査委託業務〕を受けて、田布施町教育委員会と共同で実施した。

3　調査組織は、次のとおりである。

調査主体　公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター
田布施町教育員会

調査担当　次　　長　　石　井　龍　彦
調査第一課主任　　宮　下　孝　優
文化財専門員　　磯　村　義　信
調　　査　　員　　岩　﨑　麻衣子
文化財専門員　　荒　蒔　周　平（田布施町教育委員会）

4　本書の第１図は、南周防農地整備事業所提供の地図を元に作成した。第２図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「柳井」を複製使用した。

5　本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北、標高は海抜高度（m）で示している。

6　本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell 方式による。

7　図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

8　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＡ：柵列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＩ：竪穴建物　ＳＫ：土坑
ＳＰ：柱穴

9　出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。

10　報告書作成の過程で、石製品の石材については赤﨑英里氏（山口県立山口博物館学芸課主任）にご教示を頂いた。

11　資料の鑑定･分析に関して、放射性炭素年代測定（AMS 測定）、樹種同定分析を業者に委託した。成果は第Ⅳ章に掲載した。

12　本書の作成・執筆は、石井・宮下・磯村・岩﨑が共同で行い、編集は宮下が行った。なお、本書の執筆分担は、次のとおりである。

Ⅰ　宮下　　Ⅱ　岩﨑　　Ⅲ　石井（1 区井戸、同遺物）宮下（概要、弥生時代の竪穴建物・土坑）磯村（掘立柱建物、柵列、古代・中世の遺物）岩﨑（古代・中世の土坑、古墳時代以前・古代・中世の遺物）　　Ⅳ　業者委託　　Ⅴ　宮下

本文目次

Ⅰ　調査の経緯と概要 …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の概要 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査成果 …… 7
　1　１区 …… 7
　（１）調査区の概要 …… 7
　（２）遺構 …… 9
　（３）遺物 …… 20
　2　２区 …… 31
　（１）調査区の概要 …… 31
　（２）遺構 …… 31
　（３）遺物 …… 41

Ⅳ　自然科学分析 …… 50
　1　はじめに …… 50
　2　試料 …… 50
　3　分析方法 …… 50
　4　結果 …… 51
　5　考察 …… 53

Ⅴ　総　括 …… 55

挿図目次

第 1 図　見用遺跡の調査範囲 …… 1
第 2 図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 4
第 3 図　1 区基本土層図 …… 7
第 4 図　1 区遺構配置図 …… 8
第 5 図　1 区 SK 6 実測図 …… 9
第 6 図　1 区 SB 1 ・ 2 実測図 …… 11
第 7 図　1 区 SB 3 ～ 5 実測図 …… 13
第 8 図　1 区 SB 6 ～ 8 実測図 …… 14
第 9 図　1 区 SB 9 ～ 11 実測図 …… 15
第 10 図　1 区 SA 1 ・ 2 実測図 …… 16
第 11 図　1 区 SE 1 実測図 …… 18
第 12 図　1 区 SK 8 ・ 11 ・ 13 ・ 22 実測図 …… 19
第 13 図　1 区出土遺物実測図（1） …… 21
第 14 図　1 区出土遺物実測図（2） …… 22
第 15 図　1 区出土遺物実測図（3） …… 23
第 16 図　1 区出土遺物実測図（4） …… 24
第 17 図　1 区出土遺物実測図（5） …… 25
第 18 図　2 区基本土層図 …… 31
第 19 図　2 区遺構配置図 …… 32
第 20 図　2 区 SI 1 実測図 …… 33
第 21 図　2 区 SK17 ・ SP 1 実測図 …… 34
第 22 図　2 区 SK16 ・ 28 実測図 …… 35
第 23 図　2 区 SB 1 ・ 2 実測図 …… 37
第 24 図　2 区 SB 3 ・ 4 実測図 …… 38
第 25 図　2 区 SA 1 ～ 4 実測図 …… 39
第 26 図　2 区出土遺物実測図（1） …… 42
第 27 図　2 区出土遺物実測図（2） …… 43
第 28 図　2 区出土遺物実測図（3） …… 44
第 29 図　2 区出土遺物実測図（4） …… 45
第 30 図　2 区出土遺物実測図（5） …… 46
第 31 図　2 区出土遺物実測図（6） …… 47

第 32 図　暦年較正結果 …… 52
第 33 図　炭化材顕微鏡写真 …… 54
第 34 図　見用遺跡の中世遺構配置図 …… 56
第 35 図　見用遺跡と周防国府・水奥遺跡の出土土器比較図 …… 57

写真目次

重機による表土除去（１区）…… 2
遺構検出（２区）…… 2
井戸の掘り込み作業…… 2
竪穴建物の掘り込み作業…… 2

表目次

第 1 表　１区掘立柱建物・柵列一覧表 …… 16
第 2 表　１区土坑一覧表 …… 20
第 3 表　１区出土土器・土製品観察一覧表 …… 27
第 4 表　１区出土石器・石製品観察一覧表 …… 30
第 5 表　１区出土鉄製品観察一覧表 …… 30
第 6 表　２区土坑一覧表 …… 36
第 7 表　２区掘立柱建物・柵列一覧表 …… 40
第 8 表　２区出土土器・土製品観察一覧表 …… 46
第 9 表　２区出土石器・石製品観察一覧表 …… 49
第 10 表　放射性炭素年代測定・樹種同定結果 …… 52

図版目次

図版 1　遺跡遠景（南東上空から）
図版 2　遺跡遠景（北西上空から）
遺跡遠景（南上空から）
図版 3　遺跡遠景（北東から）
調査区全景（東上空から）
図版 4　調査区全景（東から）
1区全景（北から）
図版 5　1区全景（東上空から）
1区掘立柱建物・柵列全景（東上空から）
図版 6　1区SK 6完掘（東から）
1区SK 6土器出土状況（東から）
図版 7　1区SK 6土層断面（南東から）
1区SK 8完掘（北西から）
1区SK13土層断面（東から）
1区SK22完掘（西から）
1区SK22土器出土状況（南東から）
図版 8　1区SE 1上面土器出土状況（南東から）
1区SE 1上面土器出土状況（西から）
図版 9　1区SE 1土層断面（上層・南東から）
1区SE 1完掘（南東から）
図版10　1区SP16土器出土状況（東から）
1区SP26土器出土状況（東から）
1区SP28土器出土状況（北から）
1区SP33土器出土状況（東から）
図版11　西壁南側断面（東から）
西壁北側断面（東から）
北壁断面（南から）
南壁断面（北から）
図版12　1区出土遺物（1）
図版13　1区出土遺物（2）
図版14　1区出土遺物（3）
図版15　1区出土遺物（4）
図版16　1区出土遺物（5）
図版17　1区出土遺物（6）
図版18　1区出土遺物（7）
図版19　1区出土遺物（8）

図版目次

図版 20　２区全景（東上空から）
２区掘立柱建物・柵列全景（東上空から）
図版 21　２区全景（南から）
２区 SI １全景（東上空から）
図版 22　２区 SI １完掘（東から）
２区 SI １炭化材出土状況（東から）
図版 23　２区 SI １炭化材出土状況（部分・東から）
２区 SI １炭化材出土状況（部分・北東から）
図版 24　２区 SI １炭化材出土状況（部分・南から）
２区 SI １P14 土器出土状況 (北西から）
図版 25　２区 SI １P ２完掘（南から）
２区 SI １P ８完掘（北西から）
２区 SI １P ９完掘（北から）
２区 SI １P15 完掘（西から）
図版 26　２区 SK17 土器出土状況（南から）
２区 SK17 土器出土状況（東から）
２区 SK17 土器出土状況（北西から）
２区 SK17 完掘（東から）
図版 27　２区 SP １土器出土状況（南から）
２区 SP １土器出土状況（西から）
２区 SK28 土器出土状況（北東から）
２区 SK28 土器出土状況（南東から）
図版 28　２区 SK16 完掘（西から）
２区 SK16 土器出土状況（北東から）
２区 SK16 土器出土状況（北から）
２区 SK16 白磁出土状況（北から）
図版 29　２区 SP ４土器出土状況（南東から）
２区 SP ６土器出土状況（北西から）
２区南壁断面（北から）
２区西壁断面（東から）
図版 30　２区出土遺物（１）
図版 31　２区出土遺物（２）
図版 32　２区出土遺物（３）
図版 33　２区出土遺物（４）
図版 34　２区出土遺物（５）

Ⅰ　調査の経緯と概要

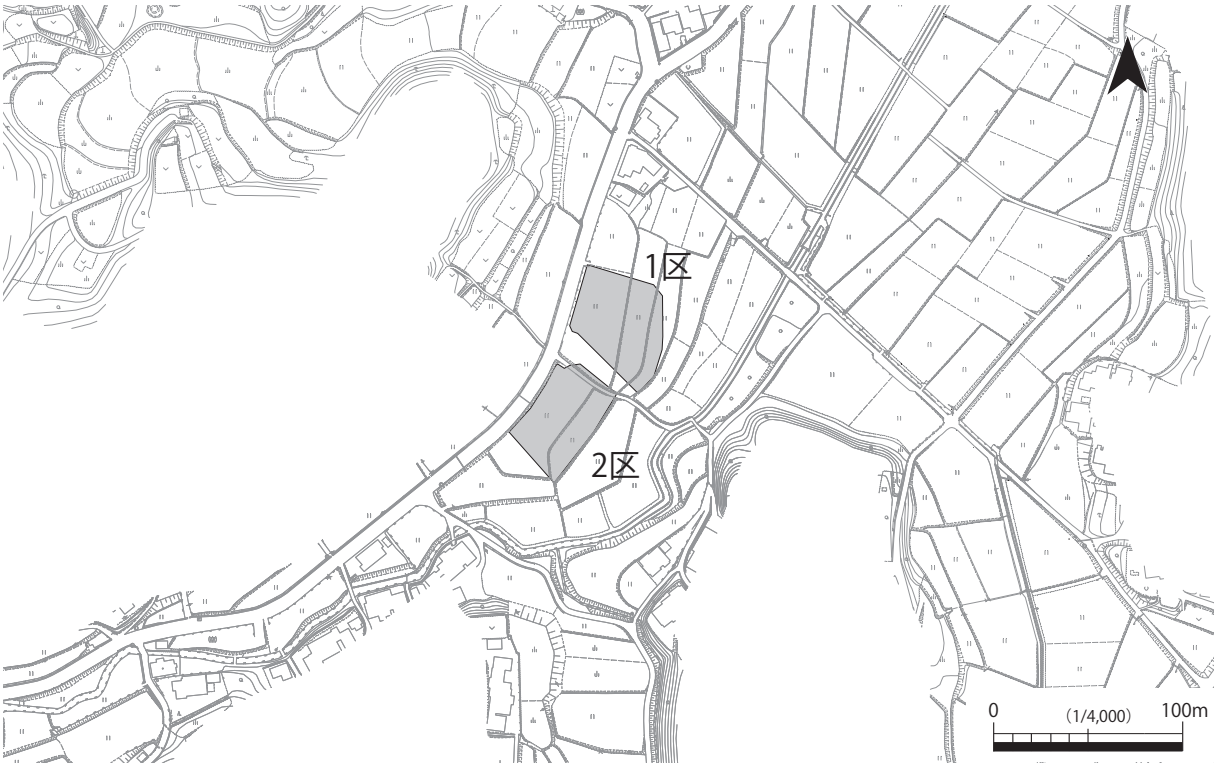
1　調査に至る経緯

農林水産省中国四国農政局南周防農地整備事業所は、田布施町麻郷奥における農村の活性化や農業の競争力強化を図る目的で、緊急農地整備事業「南周防地区」を進めている。田布施町教育委員会は、事業の実施に先立ち、対象地内の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成30年度に麻郷奥地区の試掘調査を行った。その結果、土坑や柱穴等の遺構のほか、弥生土器、土師器や瓦質土器等の弥生時代から中世の遺物を確認し、弥生時代から中世を中心とする広範囲におよぶ集落跡の存在が推定されるに至った。これを受けて、山口県教育委員会と事業主体である南周防農地整備事業所は遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事により遺構が削平される約4,107㎡について、平成31年度から記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

南周防農地整備事業所の委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターと、田布施町教育委員会が合同で発掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代中期から中世にかけての集落跡の様相が明らかとなった。なお、調査区が２地区に分かれることから、北側から１区、２区と呼称している。

2　調査の概要

現場準備として、４月15日から委託契約等事務や資料収集等を進め、５月22日には作業員説明会を開催し、５月31日から重機による表土除去作業を開始し、耕作土・盤土以下の排土移動につい



第１図　見用遺跡の調査範囲

ては、７月 23 日に完了した。

６月６日には仮設事務所等・器材庫・仮設トイレを設置し、６月 10 日に作業員の稼働を開始し、同日に発掘機材を搬入し、環境整備に取りかかり、電気配線工事を行った。６月 20 日には水道工事を行い、７月８日からは発掘作業員の稼動を本格的に開始し、遺構検出作業を開始した。その後、７月 23 日には、国土座標杭設置を行った。遺構検出と並行して、1・2 区の測量、略測図の作成を行い、９月３日からは遺構の掘り込みを行い、11 月 12 日まで調査を実施した。

10 月 31 日には、空中写真撮影と空中写真測量を実施した。11 月２日には地元住民向けの現地説明会を開催し、約 70 人の参加者があった。その後は、11 月 18 日に器材搬出作業を行い、発掘作業員の稼動を終了した。11 月 20 日に仮設事務所・器材庫・仮設トイレ、事務所等物品を撤去し、記録関係については、随時、担当職員による各遺構の実測図作成のほか、写真撮影等を実施し、11 月 22 日にすべての現地作業を終了した。

出土遺物は、随時、山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の整理作業を行い、炭化材から良好な試料を抽出し、業者委託による自然科学分析を実施した。11 月 25 日からは復元・接合作業、報告書作成のための資料調査、土器実測などを実施した。12 月 16 日からは実測遺物のデジタルトレース、報告書レイアウト、原稿の執筆を開始し、２月 10 日に印刷業者と契約、データ入稿を行った。２月は原稿の校正、出土遺物の整理作業、遺構図面や写真等の記録類の収納整理を進め、３月 19 日に報告書を刊行した。

重機による表土除去（１区）

遺構検出（２区）

井戸の掘り込み作業

竪穴建物の掘り込み作業

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

見用遺跡は山口県熊毛郡田布施町麻郷奥に所在する。県の南東部に位置する田布施町は、北側は神籠石で有名な石城山（362m）、西側は呉麓山（293.8m）・千坊山（298.7m）などとを境に光市に接し、東側は平生町・柳井市街地に向かって開けている。田布施川が町のほぼ中央を貫流し、やがて平生湾、瀬戸内海に達する。町は山地帯と、その山々から派生する丘陵、そして点在する独立丘陵、さらにその隙間を縫うように広がる谷底平野から成り立っている。

見用遺跡の所在する麻郷奥地区は、田布施川より南側、海に面する麻郷地区の内陸にある。遺跡は点在する小丘陵に囲まれた標高約 15m 前後の微高地にあり、すぐそばには田布施川支流の奈良台川が流れる。ところで古墳時代または古代以前の田布施川下流域及び平生湾付近の標高 10 m以下の低地は、海が入り込んで古柳井水道と呼ばれており、現在の田布施町中心部は海底であったと考えられている。このことを照らし合わせてみると、本遺跡の 1 km ほど先は入江であった可能性があり、かつては水辺をもっと身近に感じる場所であったと推測される。

2　歴史的環境

縄文時代の遺跡は、熊毛半島沿岸部に多く点在するが、田布施町内では集落跡などの形跡は乏しく、遺物散布地が多少見られる程度である。

町内に遺跡が多く見られるのは弥生時代に移ってからである。人々は生活の場に低丘陵地や低地を選んだ。弥生時代中期から人々が営みを続けた明地遺跡や開明遺跡は標高 13 ～ 21m に位置する集落跡で、船の描かれた絵画土器・土錘・石錘など海に関する遺物のほか、吉備・伊予・山陰など様々な地域の土器も出土している。古柳井水道の存在と出土遺物から見ても、両遺跡は海岸付近にあり、外部との交流が活発であったことがわかる。一方で、海から離れた場所にも、同時期の遺跡として奈良二ツ池遺跡がある。標高 40 m程の、麻郷丘陵の奥まった谷頭に位置し、その名の通り遺跡の麓に溜池が二つある。周防型と呼ばれる器形や文様に特徴のある壺などがまとまって出土しており、集落が形成されていたことを物語る。土器以外にも炭化梅の核が見られ、当時の食生活を垣間見ることができる。ほかにも、山崎原遺跡や神過原遺跡、平井遺跡や上時貞遺跡など、町内の各地に分散して暮らしていたことが見て取れる。弥生時代後期になると、先に述べた明地遺跡では、これまで集落内で行われていた埋葬が、集落外で行われるようになった。石走山遺跡でも、集落消失後は同じ場所に、方形台状墓をはじめとする墳墓群が形成されるなど、地域をまとめる権力者の出現を匂わせる。集落から独立した埋葬地を持つといった、古墳のはしりである墳墓形態は、方形台状墓のように地域色の濃いものから、やがて全国的な地域統合過程で生まれる、もっと強大な首長の眠る古墳へと移っていった。

田布施町は県内有数の古墳密集地として周知されており、そのほとんどが田布施川中・下流域の古柳井水道沿岸部に集中している。当時交通・交易の要衝であったこの近辺を押さえることが、権

第２図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

※網かけは標高 10m 以下の範囲（古柳井水道）

1 見用遺跡　2 警固屋遺跡　3 三坪遺跡　4 奈良二ツ池遺跡　5 伊幸田遺跡　6 守吉遺跡　7 助政遺跡　8 八頭遺跡　9 山崎原遺跡　10 三宅遺跡　11 神過原遺跡　12 明地遺跡　13 納蔵原古墳群　14 堀川遺跡　15 平井遺跡　16 三反地遺跡　17 水奥遺跡　18 西河内遺跡　19 中屋 B 遺跡　20 森国遺跡　21 下小田遺跡　22 宮田古墳群　23 京城古墳群　24 友兼古墳群　25 上時貞遺跡　26 尾尻遺跡　27 開明遺跡　28 相ヶ迫古墳　29 木ノ井山古墳　30 石走山遺跡　31 国森古墳　32 後井古墳群　33 稲荷山古墳　34 深田古墳　35 御蔵戸古墳　36 波野市遺跡　37 高塔古墳群　38 上八海古墳群　39 下八海古墳群　40 麻郷塩田源治郎浜跡　41 麻郷塩田鳥越浜跡　42 麻郷塩田御開作浜跡　43 麻郷塩田長田屋浜跡　44 麻郷塩田菊屋浜跡

力者にとっていかに大切であったかがわかる。数ある著名な古墳のうちの一つが、４世紀前半築造の国森古墳である。県内最古の方墳で、豊かな副葬品の大半は鉄製の武器・工具が占めることから、地域首長墓とみることができる。続く５世紀中頃の木ノ井山古墳は、県内では珍しい粘土槨をもつ円墳で、このタイプの墳墓は畿内を中心に分布しており、畿内政権等との関わりが窺える。ところが６世紀に入り、畿内政権の衰退がはじまると、前方後円墳の政治的権威の象徴としての意味が薄らいでいく。その中で築造された納蔵原１号墳はこの地域最後の前方後円墳といわれている。当時の前方後円墳は、熊毛半島沿岸部など田布施町外に多く分布しており、納蔵原１号墳はその西端にあたる。そしてこれ以降、田布施町の古墳は円墳が主体となり、小型化していく。６世紀後半になると、田布施川の両岸に相次いで古墳が出現する。川の北岸には須恵器が出土した御蔵戸古墳、稲荷山古墳、深田古墳と並び、対岸に相ヶ迫古墳、少し離れて下八海古墳群、高塔古墳群と小円墳が群を成す。その中で例外は、県内最大かつ中国地方有数の石室規模といわれる後井１号墳である。１号墳出土の耳環・勾玉といった副葬品や、築造時期、県内最大級の石室規模などからみて、周防国造の系譜の墓ともいわれる。しかしこれ以降には、大型の古墳は見られず、やがて古墳の築造は終わりを迎えた。

古墳時代までの遺跡密集地として知られる田布施町には、古代以降を中心時期とする遺跡は多くない。しかし三宅遺跡は、その名が朝廷直轄地の「屯倉（みやけ）」の管理にあたった氏に由来していると考えられており、関連性が注目されている。大化の改新に伴い屯倉が廃止されると、律令体制下で周防国が成立し、田布施町域は熊毛郡に属した。『和名抄』によると、熊毛郡には７つの「郷」が置かれ、平安時代前期頃の見用遺跡周辺は多仁郷に属したと考えられる。８世紀以降に公印制度が始まり、官衙など公的施設や有力者による公印、私印の使用が地方にも広がった。その歴史を裏付けるように、尾尻遺跡で県内初の銅印が見つかった。遺物は他にも、緑釉陶器や青磁、白磁など高価なものがあり、また、遺跡が居住に適さない大型建物を有することから、官衙関連施設など、通常の集落とは異なる特殊な性格が窺える。

中世の田布施町は大内氏の勢力下に置かれ、平野部には波野殿と呼ばれた大内弘直の居館（波野市遺跡）があった。その周囲に街並が広がっていたかどうかは、今のところ判然としないが、館から少し離れた複数の遺跡で、人々の痕跡を見ることができる。水奥遺跡は、狭小な谷奥といった不利な立地条件にあり、長期的・安定的な生活の場とは言い難いが、宴会や何か特別な儀式が行われた可能性が考えられる。それは、検出された一括廃棄土坑から、青磁、刀子などを含む 200 枚を超える膨大な土師器の皿や多数の杯などが見つかったためである。さらに神過原遺跡や山崎原遺跡、そして三坪遺跡のように、遺跡の中心時期は弥生時代頃だが、中世の遺構や遺物も発見された遺跡も存在している。見用遺跡の近隣では、平成 30 年度に調査が行われた守吉遺跡で、足鍋などの調理器具が出土した。上記の遺跡以外にも、町内各所で中世土器片が見つかっており、鎌倉～室町時代も人々の拠点が、この地域に点在していたことがわかる。

大内氏滅亡後、毛利氏の支配下になり近世を迎えた田布施町は、慶安３（1650）年、上関宰判の管轄下に置かれた。当時奨励されていた政策として、防長四白（米・紙・塩・蝋）の生産があったが、

見用遺跡周辺の海浜では、温暖な気候を生かして製塩業が盛んになり、麻郷塩田源治郎浜跡をはじめ、その後も次々と塩田が開発されていった。その後近代になると、明治 22（1889）年に遺跡のある麻郷奥地区は、隣接する麻郷地区と共に麻郷村として歩みはじめ、昭和 30（1955）年の町村合併により田布施町となった。時代の移り変わりとともに製塩業が衰退すると、その跡地を工業用地として使用し、現在は多くの企業が町の発展の一翼を担っている。

引用・参考文献

角川日本姓氏歴史人物大辞典編纂委員会　1991 『角川日本姓氏歴史人物大辞典　35 山口県』
角川日本地名大辞典編纂委員会　1988 『角川日本地名大辞典　35 山口』
田布施町教育委員会　1988 『国森古墳』
田布施町教育委員会　1996 『納蔵原古墳』
田布施町教育委員会　2018　広報たぶせ 6/8 号
田布施町教育委員会　2019　広報たぶせ 8/9 号
田布施町史編纂委員会　1990 『田布施町史』
山口県　2000 『山口県史　資料編　考古 1 』
山口県教育委員会　1993 『石走山遺跡』
山口県教育委員会　1994 『木ノ井山古墳』
山口県教育財団・山口県教育委員会　1993 『明地遺跡』
財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター　2006 『石走山遺跡Ⅱ』
公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター・田布施町教育委員会　2013 『開明遺跡・尾尻遺跡』
公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター・田布施町教育委員会　2014 『堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡・水奥遺跡・西河内遺跡・中屋Ｂ遺跡』

Ⅲ　調査成果

見用遺跡は奈良台川の開析した丘陵の先端部、標高約 14.0 ～ 16.0 mの台地縁辺部と斜面地に位置する。調査区は西から東へ緩やかに傾斜し、その比高差は調査区内の遺構検出面では約 2.0 mを測る。調査区は里道を境に南北に二分され、北を１区、南を２区と呼称している。

調査では、弥生時代の竪穴建物、土坑、古代から中世の掘立柱建物、柵列、井戸、土坑、柱穴など多くの遺構が検出された。弥生時代以降の遺構や包含層から縄文時代から弥生時代の遺物が出土し、古代・中世の遺構や包含層からは古墳時代後期、平安時代から中世にかけての遺物が出土している。

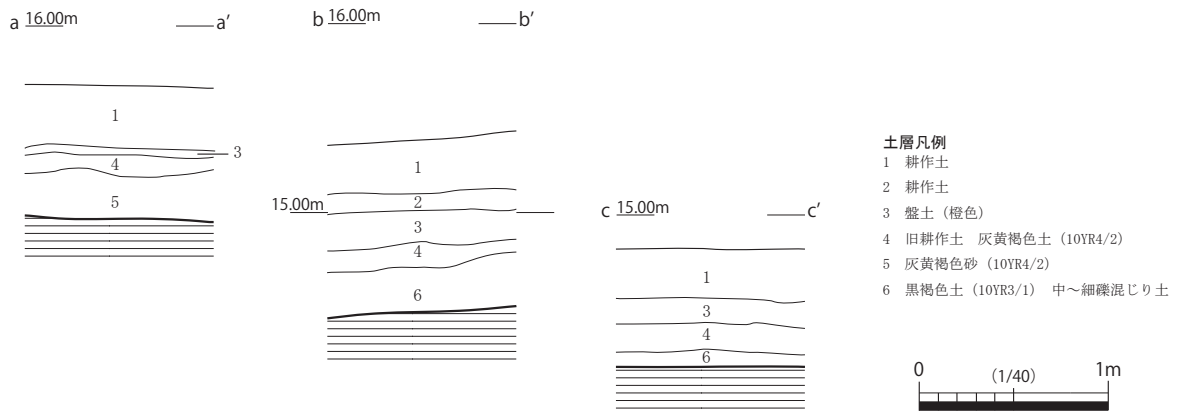
遺構の分布からは、集落は各時代を通じて１・２区の広い範囲に渡って展開していたことが明らかであるが、弥生時代中期の遺構は２区に多く、また東側に偏る。平安時代後期から鎌倉時代には、遺跡全域が集落域であったことが想定される。それらの出土遺物から、見用遺跡は弥生時代中期、古代から中世の集落であることが明らかとなった。

１　１区

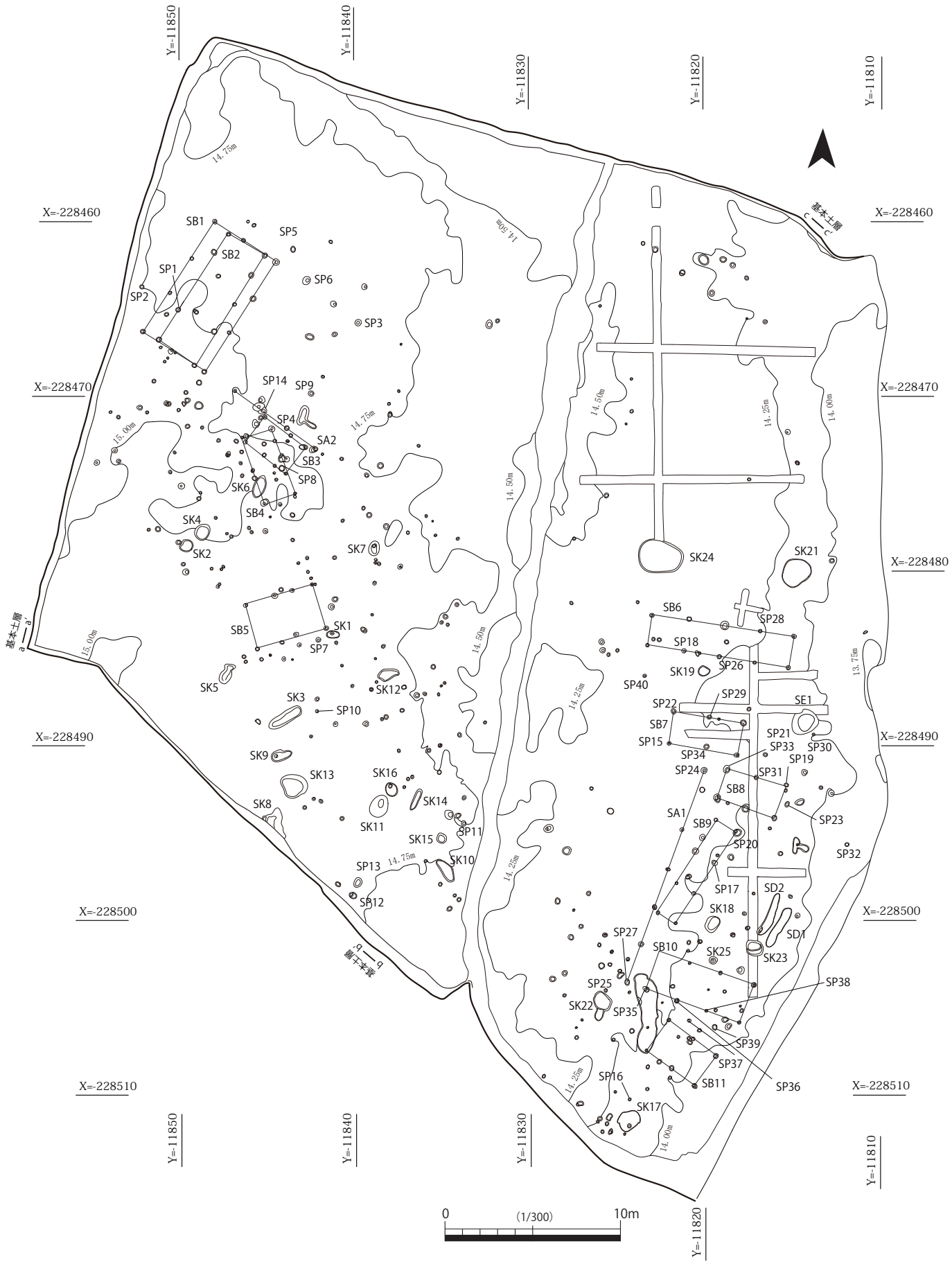
（１）調査区の概要

北側の１区では、弥生時代の土坑１基、中世の掘立柱建物 11 棟、柵列２条、時期不明の土坑 23 基、井戸１基、柱穴約 405 個などの遺構が検出された。出土遺物も遺構の時期とほぼ重なるが、縄文時代の土器・石器などが出土していることから、縄文時代の集落は検出されなかったが、狩猟採集などの活動の場であったことが明らかとなった。弥生時代中期には集落の一部であったと推定され、平安時代後期から鎌倉時代には遺構が増えることから集落活動が活発であったことが推測される。また、調査区を大きく東西に分け、東側を上段、西側を下段としている。

出土遺物の多くは、遺構と包含層から出土しており、縄文時代から中世までの幅広い時期にわたる。弥生時代中期の弥生土器や石器を中心に、古墳時代後期、奈良・平安時代から中世にかけての幅広



第３図　１区基本土層図


Y=-11850
Y=-11840
Y=-11830
Y=-11820
Y=-11810
X=-228460
X=-228470
X=-228480
X=-228490
X=-228500
X=-228510
基本土層
a—a'
b—b'
c—c'
SB1
SB2
SP1
SP2
SP5
SP6
SP3
SP14
SP9
SP4
SA2
SB3
SP8
SK6
SB4
SK4
SK2
SK7
SB5
SK1
SP7
SK5
SK12
SK3
SP10
SK9
SK13
SK16
SK14
SK8
SK11
SP11
SK15
SK10
SP13
SB12
SK24
SK21
SB6
SP28
SP18
SP26
SK19
SP40
SP29
SP22
SE1
SB7
SP21
SP15
SP33
SP30
SP34
SP19
SP24
SP31
SB8
SP23
SA1
SB9
SP20
SP32
SP17
SD2
SK18
SD1
SP27
SB10
SK25
SK23
SP38
SP25
SK22
SP35
SP39
SP37
SP16
SB11
SP36
SK17
14.75m
14.50m
14.25m
14.00m
13.75m
15.00m
0
(1/300)
10m

第４図　１区遺構配置図

い時期のものが出土している。

1区では、各壁面による土層観察を行った。その結果、基本層序は耕作土（現代）下に盤土（現代）、地山（粘質土、一部砂質土）となることが明らかとなった（第3図）。奈良台川へ向かって東側へ傾斜し、東側の層厚が比例して厚くなる傾向にあり、上段の西側での検出面の標高は約 14.5 ～ 15.0 m、層厚 80cm を測り、東側での検出面の標高は 13.75 ～ 14.25m、層厚 80 ～ 100cm を測る。1区では西側に平坦面が残り、東側が一段低くなり平坦面が残るが、両者の比高差は大きくなく、比較的平らな検出面である。旧地形を反映して、遺構は東・西に分かれて分布しており、旧地形ではそれなりの傾斜があったものと想定されるが、後世の水田開発により平坦化されたと推定される。

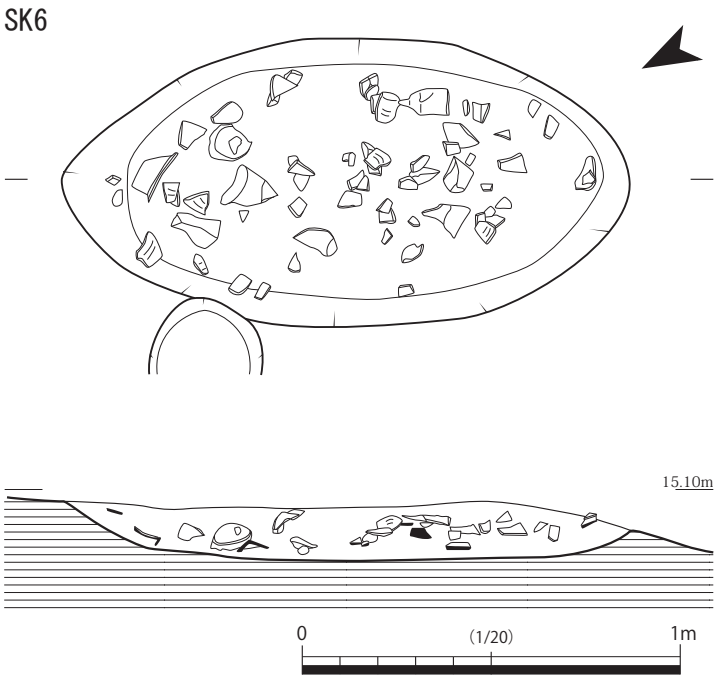
（2） 遺構

1区は遺跡の北側に位置し、弥生時代の土坑1基、中世の掘立柱建物 11 棟、柵列2条、溝2条、時期不明の土坑 23 基、井戸1基、柱穴約 405 個などの遺構が検出された。遺物は縄文時代から中世に至る幅広い時期のものが出土している。

［1］土坑

SK 6（第5図　図版6・7） 調査区上段中央東部に位置する。規模は長軸 150cm、短軸 76cm、深さ 17cm を測る楕円形で、断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色土を基調とし、多くの弥生土器片が含まれている。出土遺物から弥生時代中期の遺構と判断される。

その他にも、1区では全体で 24 基の土坑が検出されており、遺物が出土しないため、時期不明のものも多い。それらの土坑は、埋土の色調からみて、弥生時代から平安時代後期のものと推定される。



第5図　1区 SK 6実測図

［２］**掘立柱建物・柵列（第６～10図　図版５）**

１区で復元できた掘立柱建物は11棟、確認した柵状に並ぶ柱穴列は２列である。床面積30㎡を超える大型の建物SB １の周辺の建物と、柵列SA １に関係する建物とに分けることができる。

SB １・２（第６図）　SB １は調査区上段の北西部に位置する総柱の建物で、桁行３間（7.52 m）×梁行２間（4.12 m）、床面積30.98㎡を測る。柱穴間の平均は桁行方向2.51 m、梁行方向2.02 m、柱穴規模は直径22～39㎝、深さ12～33㎝。棟方向はN28° Eである。SP ５を含め各柱穴から土師器片が出土したが、小片のため図化には至らなかった。

SB ２はSB １と棟方向及び桁行の長さがほぼ一致し、同じ場所に重なるように立地する建物である。桁行４間（7.48 m）×梁行１間（2.52 m）、床面積18.85㎡を測る。梁行方向の柱穴間の平均は1.87 m、柱穴規模は直径24～33㎝、深さ９～37㎝、棟方向はN31° Eである。SP1から土師器皿（102）が出土した。２つの建物の関連を考慮すると、大きな時期差はなく、共に平安時代末～鎌倉時代前半の建物と考えられる。

SB ３（第７図）　SB ３は調査区上段の北西部、SB ５と重複する建物で、桁行２間（2.94 m）×梁行１間（1.88 m）、床面積5.53㎡を測る。梁行方向の柱穴間の平均は1.47 m、柱穴規模は直径22～24㎝、深さ18～42㎝、棟方向はN51° Wである。SP ８出土の土師器甕片や各柱穴の出土遺物から、平安時代末～鎌倉時代前半の建物と考えられる。

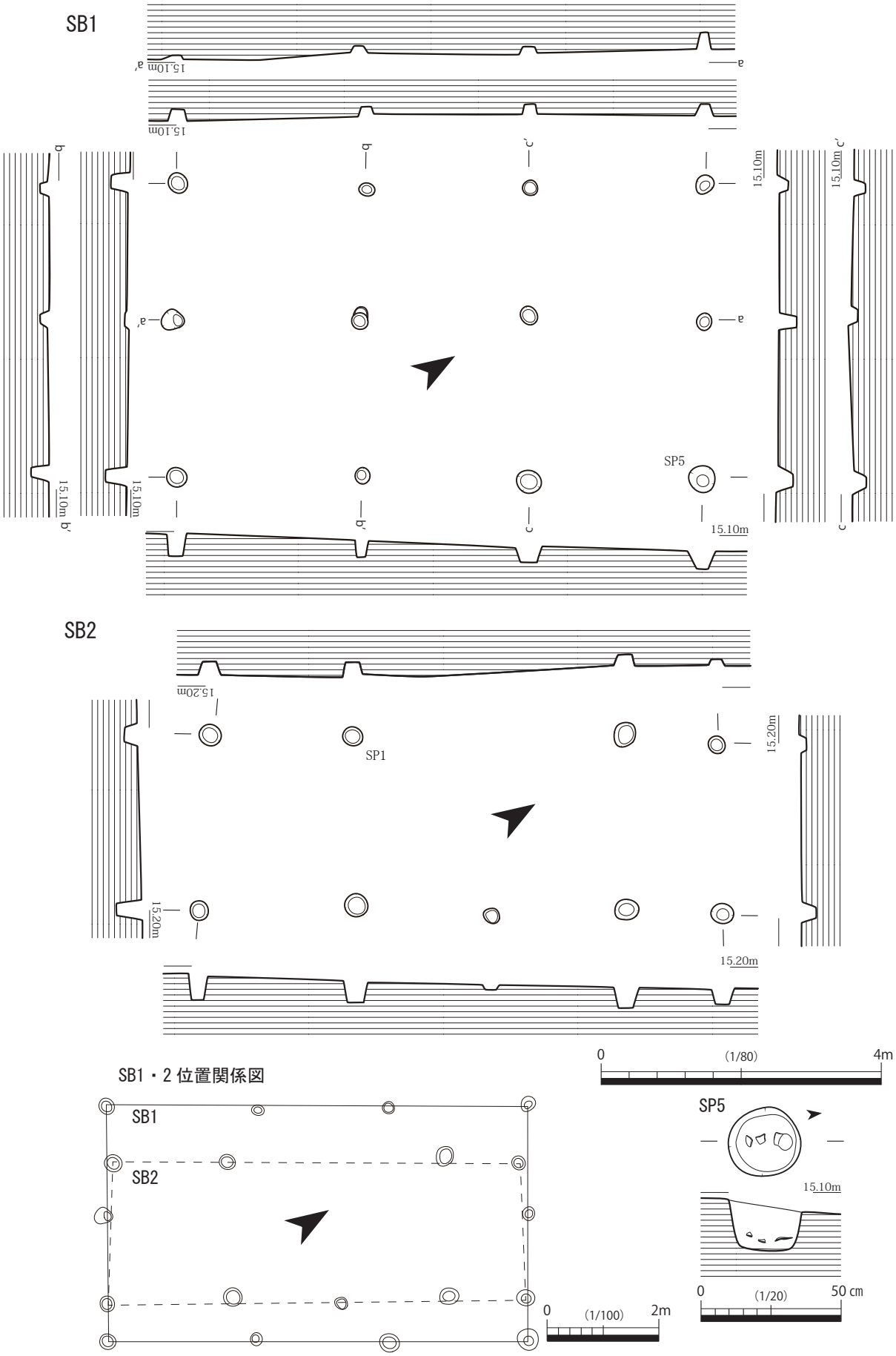
SB ４（第７図）　調査区上段の中央部、SB ３と重複する建物で、桁行２間（3.94 m）×梁行１間（1.88 m）、床面積7.41㎡を測る。梁行方向の柱穴間の平均は1.97 m、柱穴規模は直径18～41㎝、深さ９～37㎝。棟方向はN20° Wであり、SB ３と異なる。柱穴から土師器の小片などが出土しているが、これらによって建物の時期を判断するのは難しい。

SB ５（第７図）　調査区上段の南西部に位置する建物で、桁行３間（4.12 m）×梁行１間（2.64 m）、床面積10.88㎡を測る。梁行方向の柱穴間の平均は1.37 m、柱穴規模は直径20～35㎝、深さ15～32㎝、棟方向はN72° Eである。柱穴から土師器の小片などが出土しているが、これらによって建物の時期を判断するのは難しい。

SB ６（第８図）　調査区下段の中央部に位置する建物で、桁行４間（8.14 m）×梁行１間（1.84 m）、床面積14.98㎡を測る。梁行方向の柱穴間の平均は2.04 m、柱穴規模は直径20～49㎝、深さ24～40㎝、棟方向はN81° Wである。SP26から土師器皿（112）、SP18からは土師器杯（109）、SP28からは土師器皿（113、115）が出土した。SP28出土遺物は建物廃絶に伴うものであることが、出土状況より推定できる。平安時代末から鎌倉時代前半の時期の建物と考えられる。

SB ７（第８図）　調査区下段の中央部、SB ６の南側に位置する建物で、桁行２間（3.96 m）×梁行１間（1.88 m）、床面積7.44㎡を測る。棟方向はN82° Wで、SB ６とほぼ一致する。６個の柱穴により構成されており、梁行方向の柱穴間の平均は1.98 m、柱穴規模は直径25～37㎝、深さ19～42㎝。SP15・21・29・34から土師器の皿・甕片が出土し、これらの遺物から、平安時代末から鎌倉時代前半の時期の建物と推測される。なおSP22から須恵器甕（12）が出土している。

SB ８（第８図）　調査区下段の中央より南、SB ７に近接した建物で、桁行２間（3.48 m）×梁行１間（2.02 m）、床面積7.03㎡を測る。棟方向はN72° Wである。梁行方向の柱穴間の平均は1.74 m、



第６図　１区 SB １・２実測図

柱穴規模は直径 24 ～ 51㎝、深さ 15 ～ 36㎝。この建物の北東の隅柱にあたる SP33 から、土師器皿（116、118、119）土師器椀（114）、瓦器椀（120）が、SP31・19 からは土師器片や炭が出土した。SP33 出土遺物は建物廃絶に伴うものであることが、出土状況より推定できる。平安時代末から鎌倉時代前半の建物と考えられる。

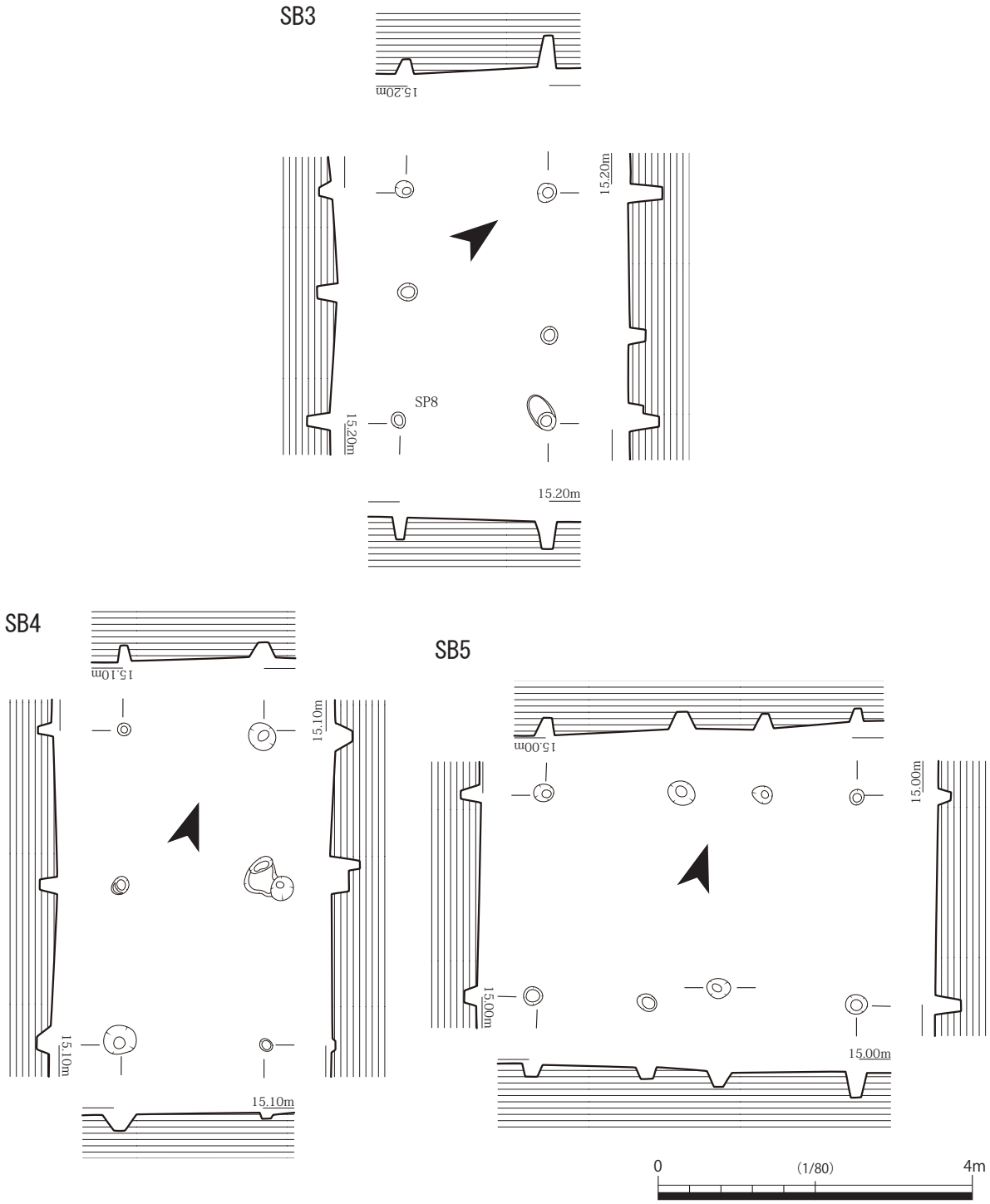
SB ９（第９図）　調査区下段の中央南よりに位置する建物で、桁行３間（6.26 m）×梁行１間（1.18 m）、床面積7.39㎡を測る。梁行方向の柱穴間の平均は2.09 m、柱穴規模は直径17 ～ 48㎝、深さ９～ 39㎝。棟方向は N31° E であり、南東部に位置する他の建物と棟方向が異なる。SP20 からは土師器皿・杯、鉄製品、炭、焼土塊などが、SP17 からは土師器皿（107）が出土。共に建物廃絶に伴う土器と推測され、平安時代末から鎌倉時代前半の建物と考えられる。

SB10（第９図）　調査区下段の南東部に位置する建物で、桁行３間（5.68 m）×梁行１間（2.28 m）、床面積 12.95㎡を測る。梁行方向の柱穴間の平均は 1.89 m、柱穴規模は直径 15 ～ 37㎝、深さ10 ～ 36㎝。棟方向は N70° W であり、後述する SA １の主軸方向と直交する。SP35･36 から土師器片、SP38 から土師器椀（117）が出土。土器はいずれも破片で、柱を抜き取った後に投げ込まれたものであり、平安時代末から鎌倉時代前半の建物と考えられる。

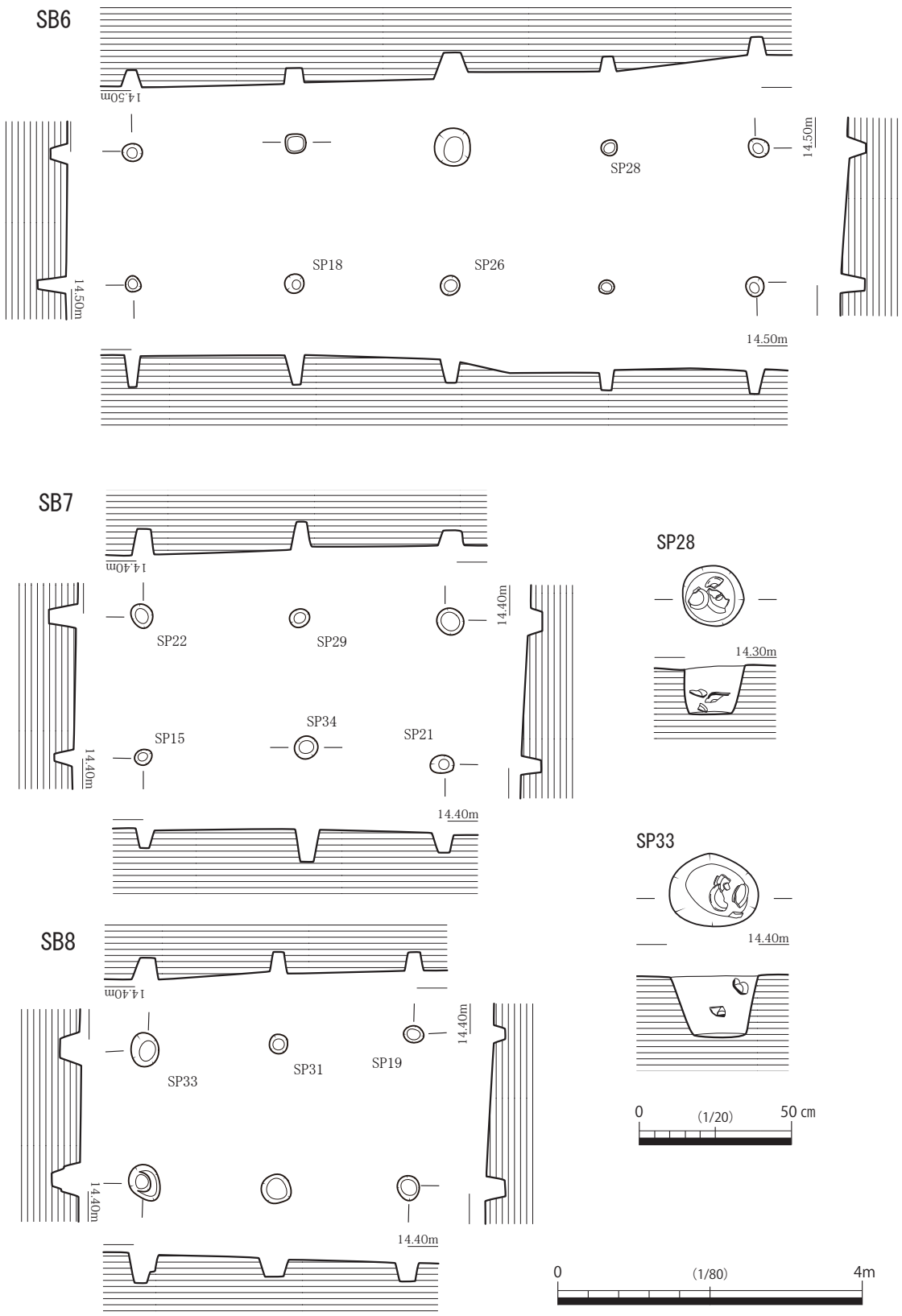
SB11（第９図）　調査区下段の南端に位置する建物で、桁行２間（3.36 m）×梁行１間（2.08 m）、床面積 6.99㎡を測る。梁行方向の柱穴間の平均は 1.68 m、柱穴規模は直径 15 ～ 28㎝、深さ９～ 22㎝、棟方向は N54° W である。構成柱穴から土師器の小片などが出土しているが、これらによって建物の時期を判断するのは難しい。

SA １（第 10 図）　調査区下段の南東側にあり、ほぼ南北に並ぶ柱穴列で、５間（12.96 m）の規模で復元できる。主軸方向（棟方向）は N20° E。SB ８・10 の棟方向に直交するよう配置されており、敷地境界に付属する柵列や建物の目隠し塀などが想定できる。SP27 から土師器片、SP24 からは土師器椀（111）が出土。SB ９・11 との関連や出土遺物からみて、平安時代末から鎌倉時代前半の柵列と考えられる。

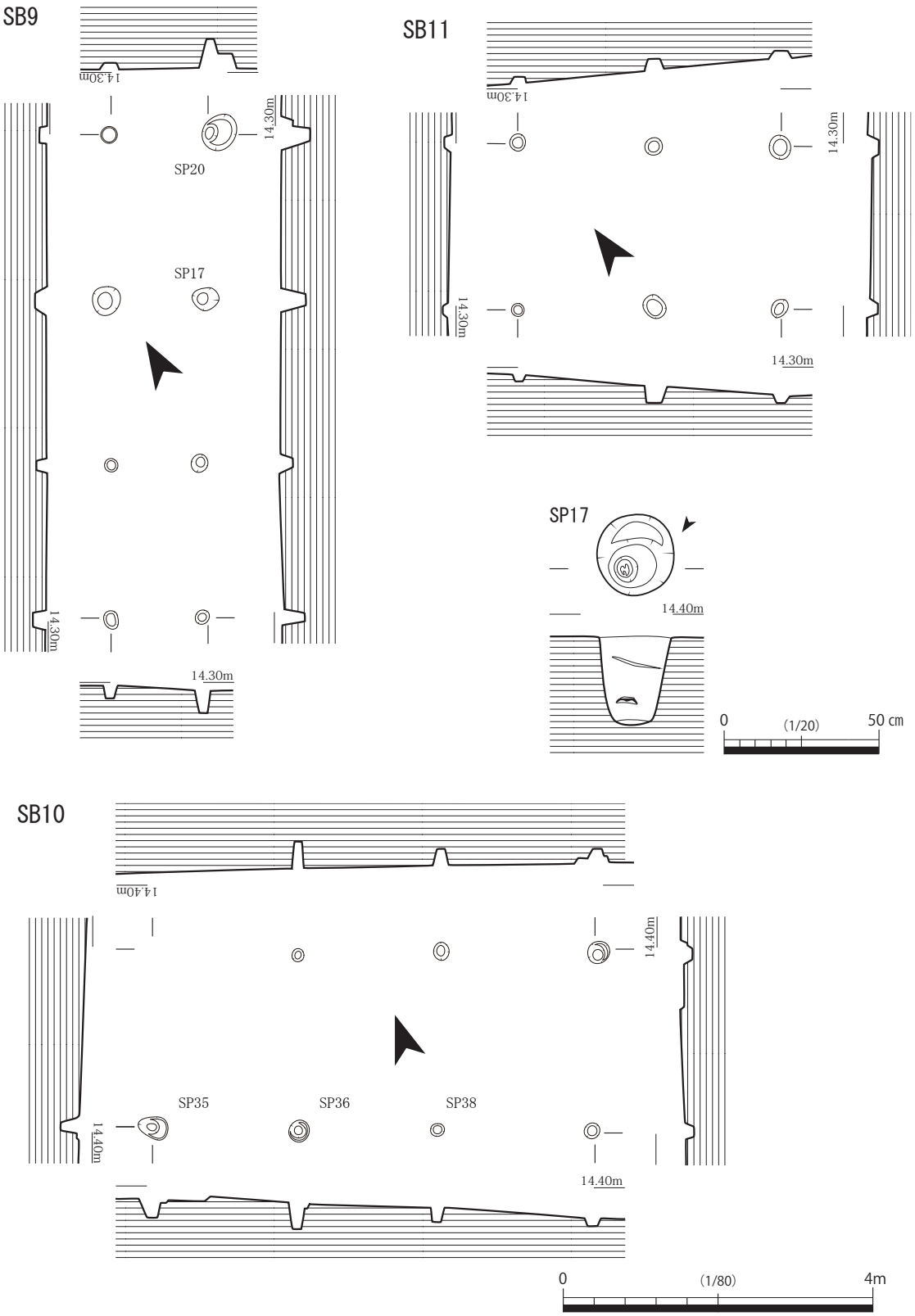
SA ２（第 10 図）　調査区上段の中央やや西より、SB ３に近接する柱穴列で、４間（5.72 m）の規模で復元できる。主軸方向（棟方向）は N51° W。敷地境界に付属する柵列や建物の目隠し塀などとも想定できるが、この柱穴列の北側には、SP ６と SP ３、そしてその間の３個の柱穴が対向して並ぶ。SP ４から SP ３を結ぶ直線の長さは約 7.5 m、向きは N35° E を測る。SB １の桁行、棟方向とほぼ一致することから、建物全ての構成柱穴の確認には至らなかったが、SB １の東側に同規模の建物が並立していた可能性があり、SA ２は建物南側の柱穴とも考えられる。SP ４から土師器皿（103）、SP14 からは土師器椀が出土しており、平安時代末から鎌倉時代前半の遺構である。



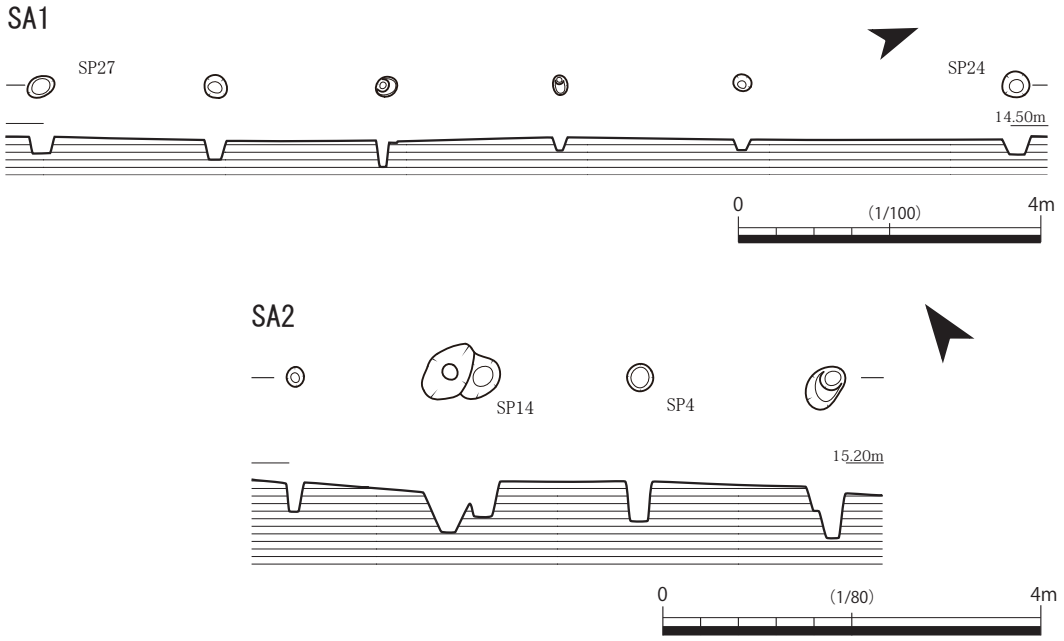
第７図　１区 SB ３～５実測図



第８図　１区 SB ６～８実測図



第９図　１区 SB ９～ 11 実測図



第 10 図　1 区 SA 1 ・ 2 実測図

第 1 表　1 区掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規模（間）	棟方向	桁行（m）建物の南東隅から	梁行（m）建物の南東隅から	床面積（㎡）	関連柱穴	出土遺物	時代	備考
SB 1	3 × 2	N 28° E	7.52（2.66・2.42・2.44）	4.12（2.22・1.90）	30.98	SP5	土師器	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 12 個
SB 2	4 × 1	N 31° E	7.48（2.08・1.92・1.94・1.54）	2.52	18.85	SP1	土師器皿	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 9 個
SB 3	2 × 1	N 51° W	2.94（1.08・1.86）	1.88	5.53	SP8	土師器甕	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 6 個
SB 4	2 × 1	N 20° W	3.94（2.28・1.66）	1.88	7.41	—	—	—	構成柱穴 6 個
SB 5	3 × 1	N 72° E	4.12（1.72・0.94・1.46）	2.64	10.88	—	—	—	構成柱穴 8 個
SB 6	4 × 1	N 81° W	8.14（1.92・2.04・2.04・2.14）	1.84	14.98	SP18、SP26、SP28	土師器皿・杯	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 10 個
SB 7	2 × 1	N 82° W	3.96（1.86・2.10）	1.88	7.44	SP15、SP21、SP22、SP29、SP34	土師器	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 6 個、須恵器甕（流込）
SB 8	2 × 1	N 72° W	3.48（1.74・1.74）	2.02	7.03	SP19、SP31、SP33	土師器皿・杯・椀、瓦器椀	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 6 個
SB 9	3 × 1	N 31° E	6.26（1.98・2.08・2.20）	1.18	7.39	SP17、SP20	土師器、鉄製品	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 8 個、焼土・炭出土
SB10	3 × 1	N 70° W	5.68（1.96・1.76・1.96）	2.28	12.95	SP35、SP36、SP38	土師器、土師器杯	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 7 個
SB11	2 × 1	N 54° W	3.36（1.62・1.74）	2.08	6.99	—	—	—	構成柱穴 6 個
SA1	5	N 20° E	12.96（2.32・2.24・2.32・2.44・3.64）	—	—	SP24、SP27	土師器	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 6 個
SA2	4	N 51° W	5.72（2.06・1.62・0.36・1.68）	—	—	SP4、SP14	土師器皿、土師器椀	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 5 個

［3］井戸

SE 1（第 11 図　図版８・９）

１区の下段中央部の東端付近にある井戸である。周辺の柱穴の多くが深さ 20cm 未満であることから、検出面はかなり削平を受けているとみられる。

掘方は上面が卵形を呈し、最大長 167cm、最大幅 138cm を測る。検出面より約 40cm 下で屈曲し、屈曲部以下の平面形は隅丸方形である。隅丸方形部分は上面で最大長 112cm、最大幅 102cm、底面は最大長 89cm、最大幅 69cm で、屈曲部以下の深さは約 60cm である。

検出面から底面までの深さは１m弱で、下面は透水層である小石や砂利を多量に含む黄褐色の粗砂層に到達しており、調査時点でも激しい湧水が認められた。井戸枠材とみられるものは出土しなかったが、壁面の所々に木質由来とみられる濃褐色の粘土塊が認められ、素掘りの井戸ではなく、廃絶時に井戸枠が全て抜き取られたものと考えられる。底面に敷かれた石や集水施設は検出されなかった。

土層の堆積状況は、人為的に埋められた状況を示している。３～７層は短時間に埋め戻されたものとみられる。５・６・７層は細砂中に灰オリーブ色等の粘土ブロックが含まれていた。４層は灰色の粗砂で、下部に少量の土師器片や炭を含んでいる。３層は暗灰黄色粘質土中に複数の色・質の粘質土ブロックを含み、下部に少量の土師器片が含まれていた。１・２層は意図的な投棄層で、中央部に向かって層厚を増し、230 個体以上の土師器皿や 30 個体以上の杯、椀や青磁・白磁の破片、瓦器の椀・皿、鉄刀子や鉄滓、木片等多様な遺物が折り重なって検出された。特に土師器の皿や杯は完形品も多く、儀礼等に使用された器類とみられる。しかし、詳細に観察すると、土師器の細片が多数含まれるほか、青磁・白磁の小片や折れた刀子、鉄滓・炭等も混入しており、儀礼等で使用された器類に加えて、日常廃棄物も同時に投棄されたものとみられる。

出土遺物からみて、井戸の上部まで埋められた時期は、平安時代末～鎌倉時代前半と考えられる。

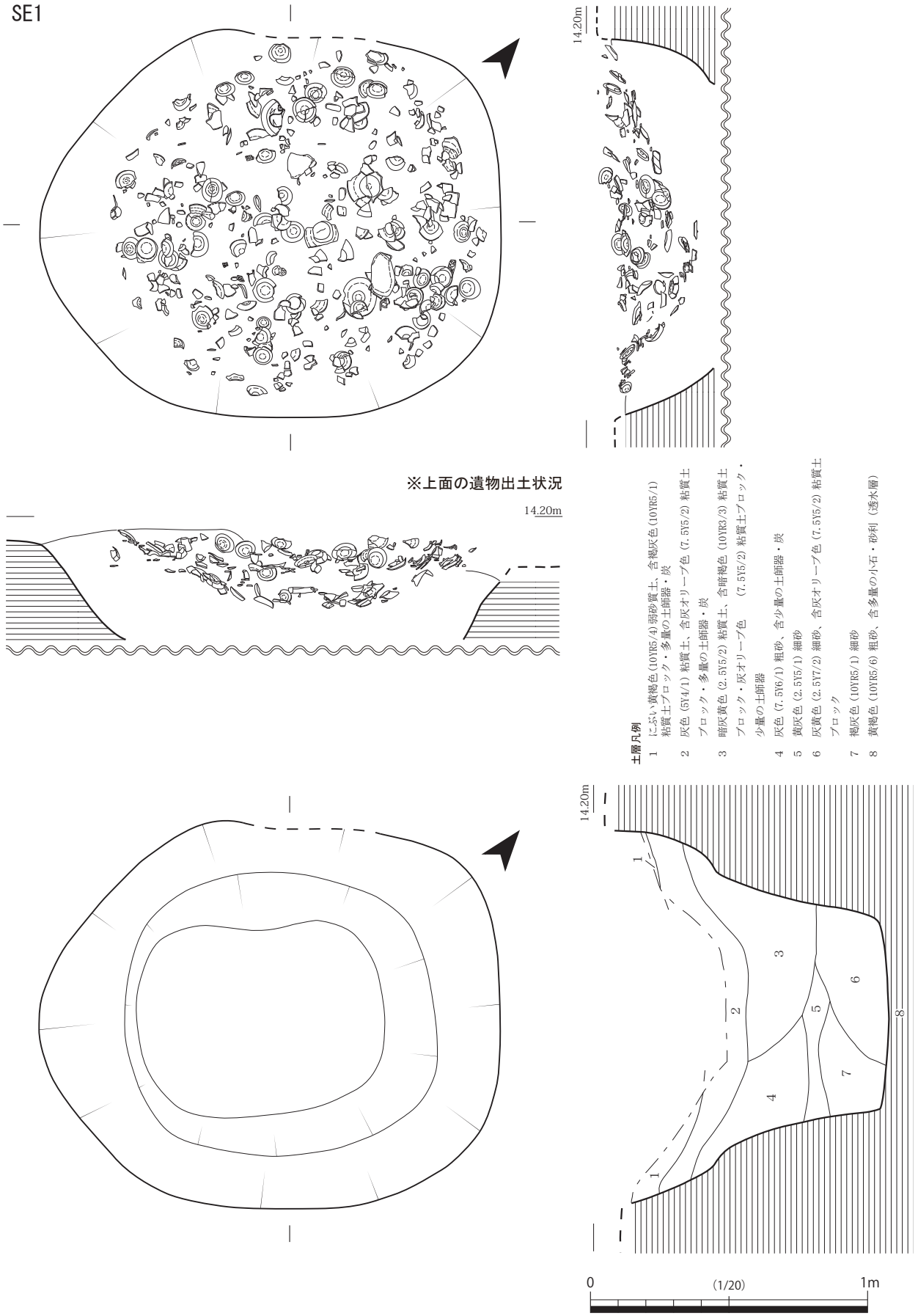
［4］時代不明土坑

SK ８（第 12 図　図版７）

調査区上段の南端部に位置する。規模は長軸 176cm、短軸 116cm 以上、深さ 36cm を測る不整楕円形で、南側は調査区外へ至るため、全容は不明である。断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色土を基調とし、出土遺物は少なく、姫島産黒曜石の剥片が出土している。

SK 11（第 12 図）

調査区上段の南部に位置する。規模は長軸 132cm、短軸 101cm、深さ 41cm を測る楕円形で、断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は上層がにぶい黄褐色、下層は褐色土を基調とし、出土遺物は少なく、土師器片、陶器片が出土している。



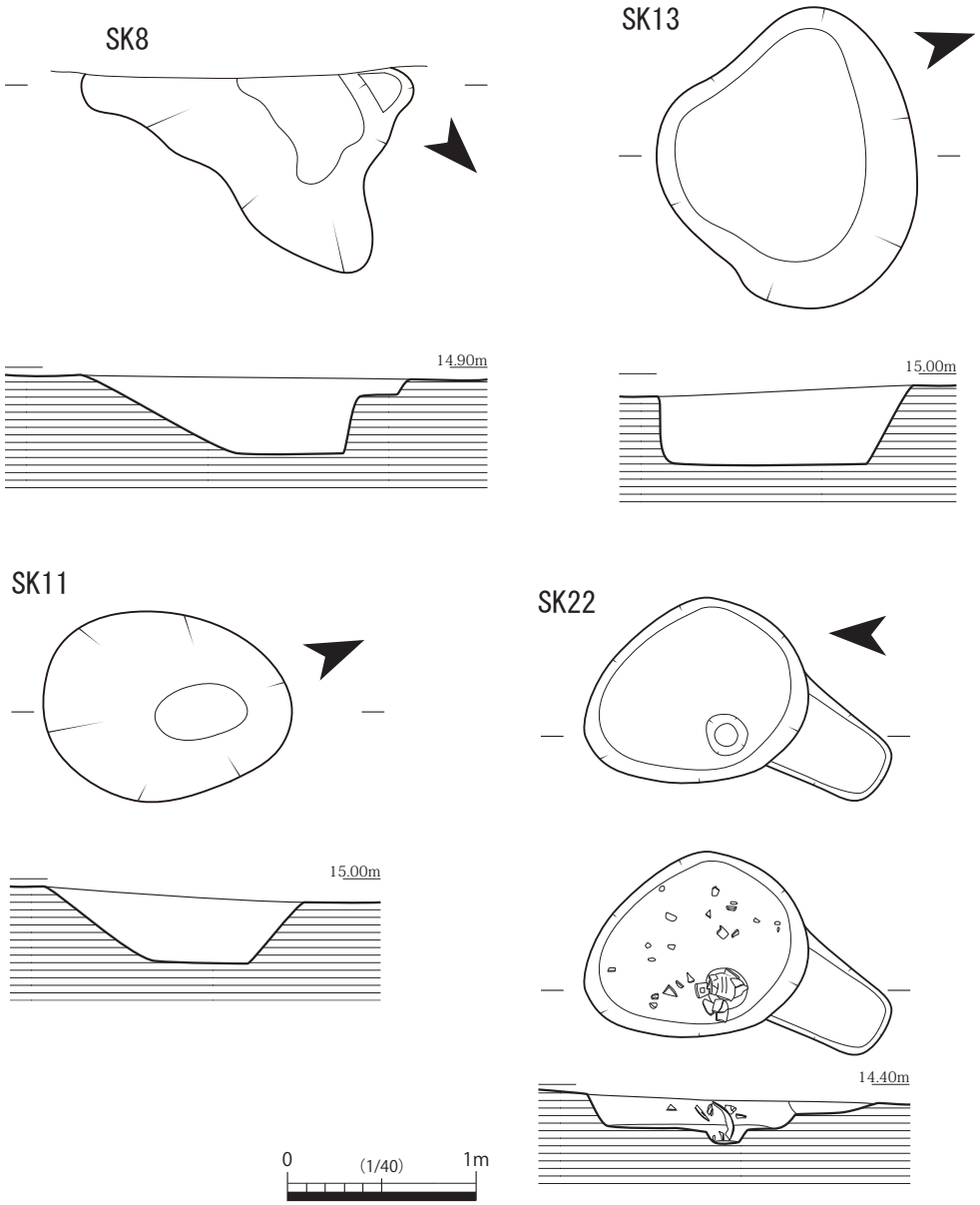
第11図　1区SE 1実測図

SK 13（第 12 図　図版７）

調査区上段の南部に位置する。規模は長軸 160cm、短軸 138cm、深さ 35cm を測る楕円形で、断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色土を基調とし、遺物はほとんど出土していない。

SK 22（第 12 図　図版７）

調査区下段の南東部に位置する。規模は長軸 121cm、短軸 99cm、深さ 19cm を測る楕円形で、断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色土を基調とし、弥生土器、古墳時代の土師器が出土している。



第 12 図　1 区 SK 8・11・13・22 実測図

第２表　１区土坑一覧表

遺構番号	平面形	規模（ｃｍ）			出土遺物	時代	備　　考
		長軸	短軸	深さ			
SK 1	楕円形	75	43	13			
SK 2	円形	72	67	12	弥生土器片		
SK 3	楕円形	211	64	22			
SK 4	楕円形	96	83	28	弥生土器片		
SK 5	不整形	119	39	30			
SK 6	楕円形	150	76	17	弥生土器	弥生	
SK 7	楕円形	85	60	29			
SK 8	不整楕円形	176	最大 115	36	黒曜石剥片		南端調査区外へ伸びる
SK 9	不整形	122	50	26			
SK10	楕円形	149	67	27	弥生土器片		
SK11	楕円形	132	101	41	土師器片、陶器片		
SK12	楕円形	125	69	17			
SK13	楕円形	160	138	35			
SK14	楕円形	132	35	14	土師器片		
SK15	円形	62	58	26			
SK16	円形	83	67	36			
SK17	不整円形	128	107	11	弥生土器片、土師器片		
SK18	楕円形	96	75	9	弥生土器片、須恵器片、土師器片		
SK19	円形	69	61	16	土師器片		
SK21	円形	176	149	12	土師器、瓦器、瓦質土器片、炭		
SK22	楕円形	121	99	19	弥生土器、土師器片	弥生	
SK23	円形	110	96	52	弥生土器片、土師器片、石製品		
SK24	楕円形	257	182	26	土師器、石製品、鉱滓、炭		
SK25	円形	56	54	42	弥生土器片、土師器片、炭		

（３）遺物

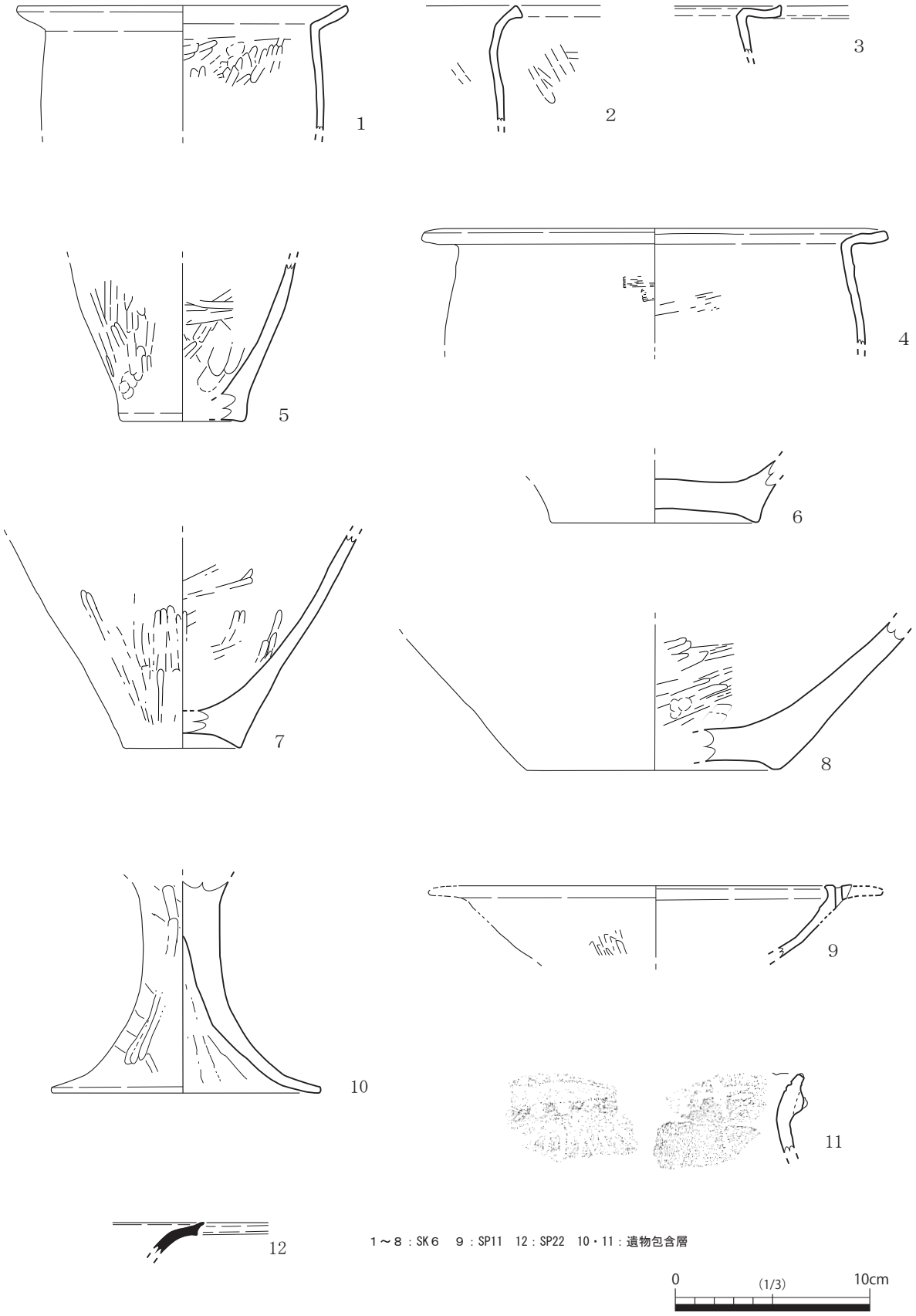
調査の結果、１区からはSE １の土師器を中心に、縄文土器・弥生土器・須恵器・瓦器・青磁・石器・石製品・土製品・鉄製品が出土した。

［１］土器（第 13 ～ 16 図・図版 12 ～ 18）

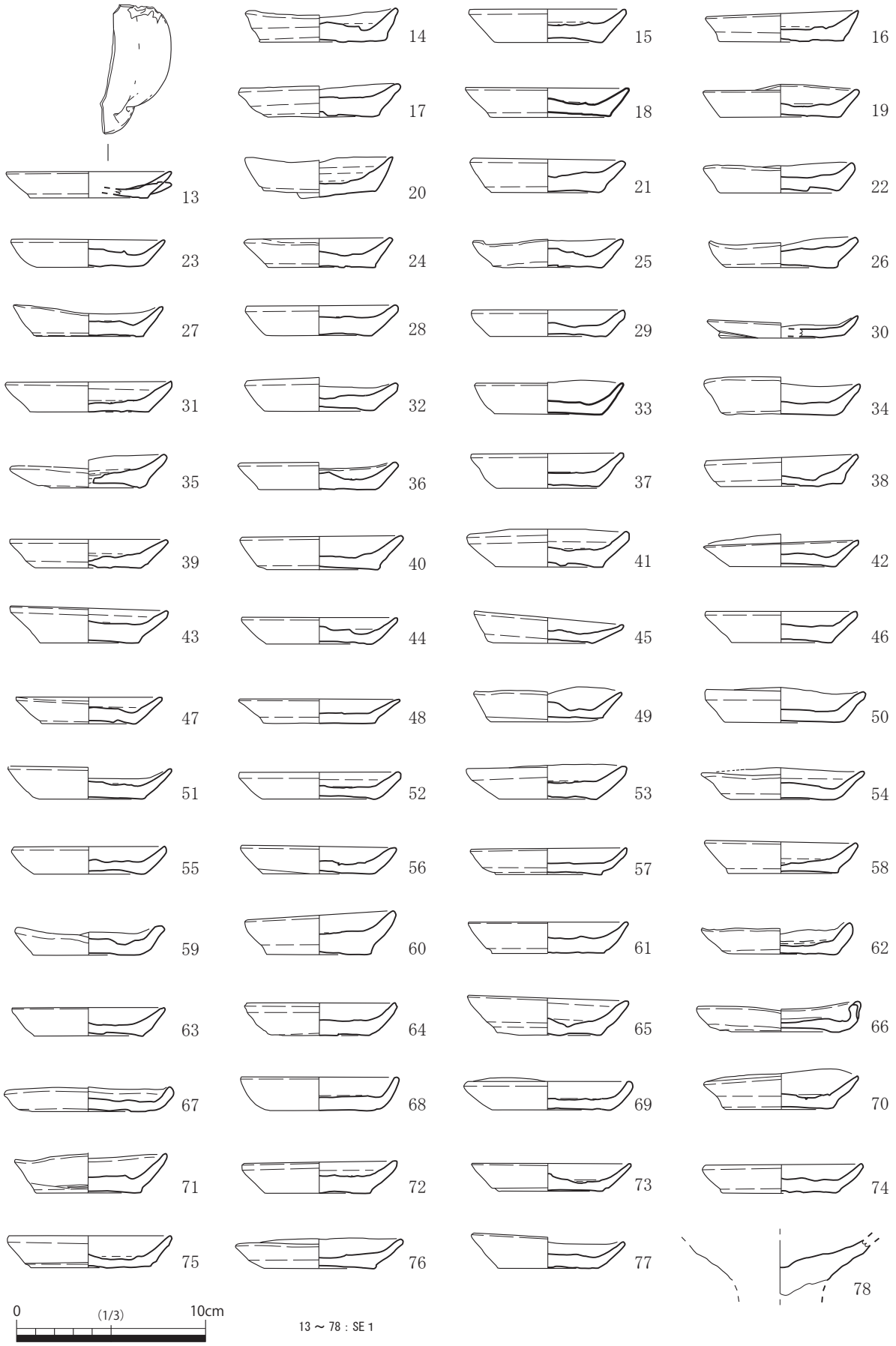
１～９は弥生時代中期の土器で、１～８はSK ６出土。１～５・７は甕、６・８は壺。９はSP11出土の須玖式の高杯。鋤先形口縁に穿孔を施す。10 は土師器の高杯。11 は遺物包含層出土の縄文土器の深鉢。12 はSP22 出土の須恵器甕か。内面に自然釉が見られる。

SE11・２層からは、土師器皿 234、杯 34、椀３、青磁椀６、青磁皿１、白磁椀１、瓦器椀１、瓦器皿１等多量の遺物がまとまって出土した。第 13・14 図に掲載した 13 ～ 96 は、その一部である。SE １出土の皿･杯は、いずれも胎土に多量の雲母を含み、橙色系に焼成されている。胎土･焼成･製作技法は、約３km 北の水奥遺跡（田布施町波野）SX １出土品と酷似している。

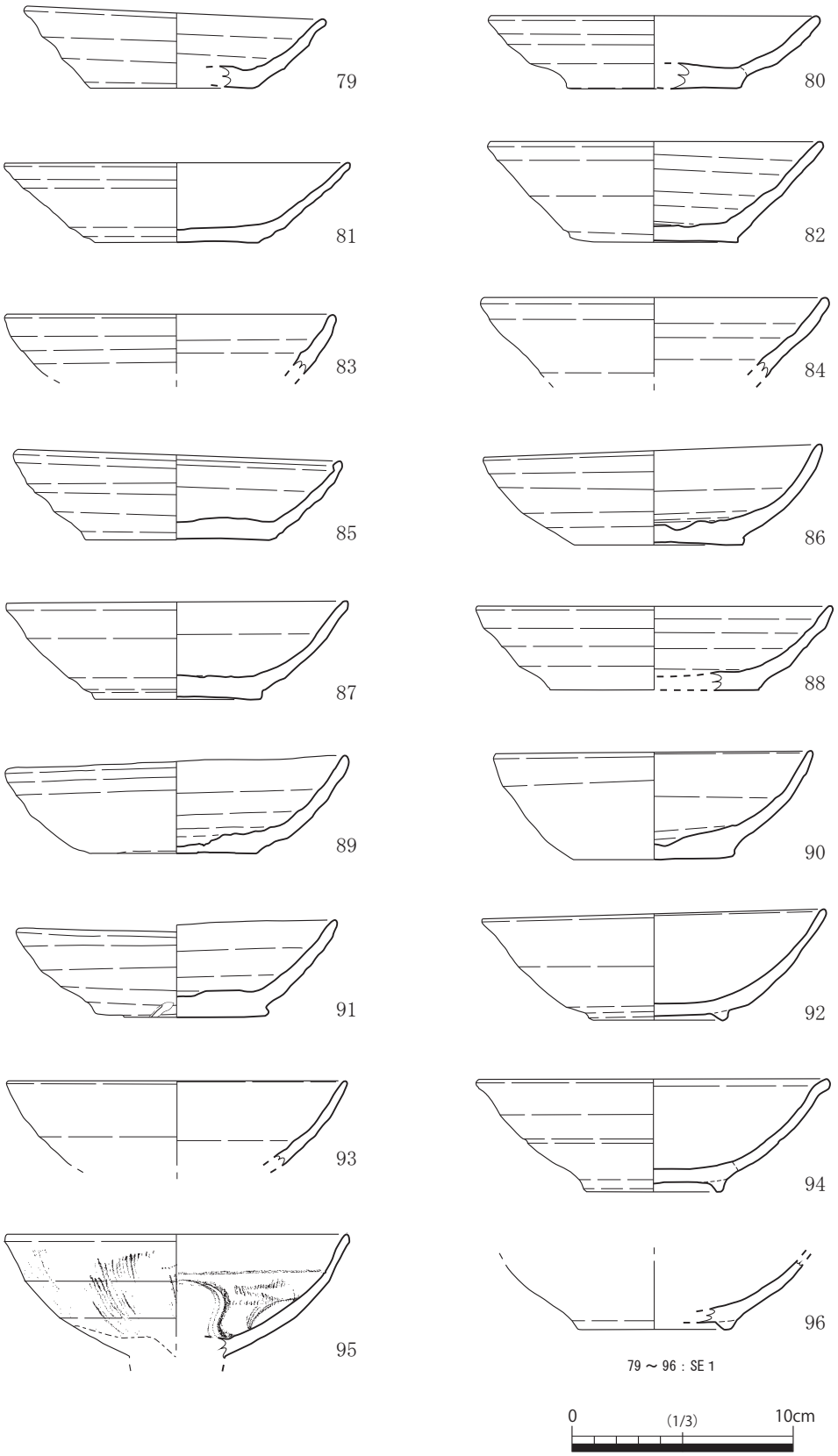
13 ～ 77 は土師器の皿である。皿は口径 7.5 ～ 8.8cm、器高 1.3 ～ 2.3cm で底部切り離しは、基本的に回転ヘラ切りで、確認できるものではロクロの回転方向は時計回りである。体部が直線的なものと内湾するものがあり、体部外面は丁寧にナデるものがほとんどだが、内面はロクロナデを行うものの底面にロクロ目を残すものも多く、乾燥不十分な状態で焼成を行ったためか、歪んだもの



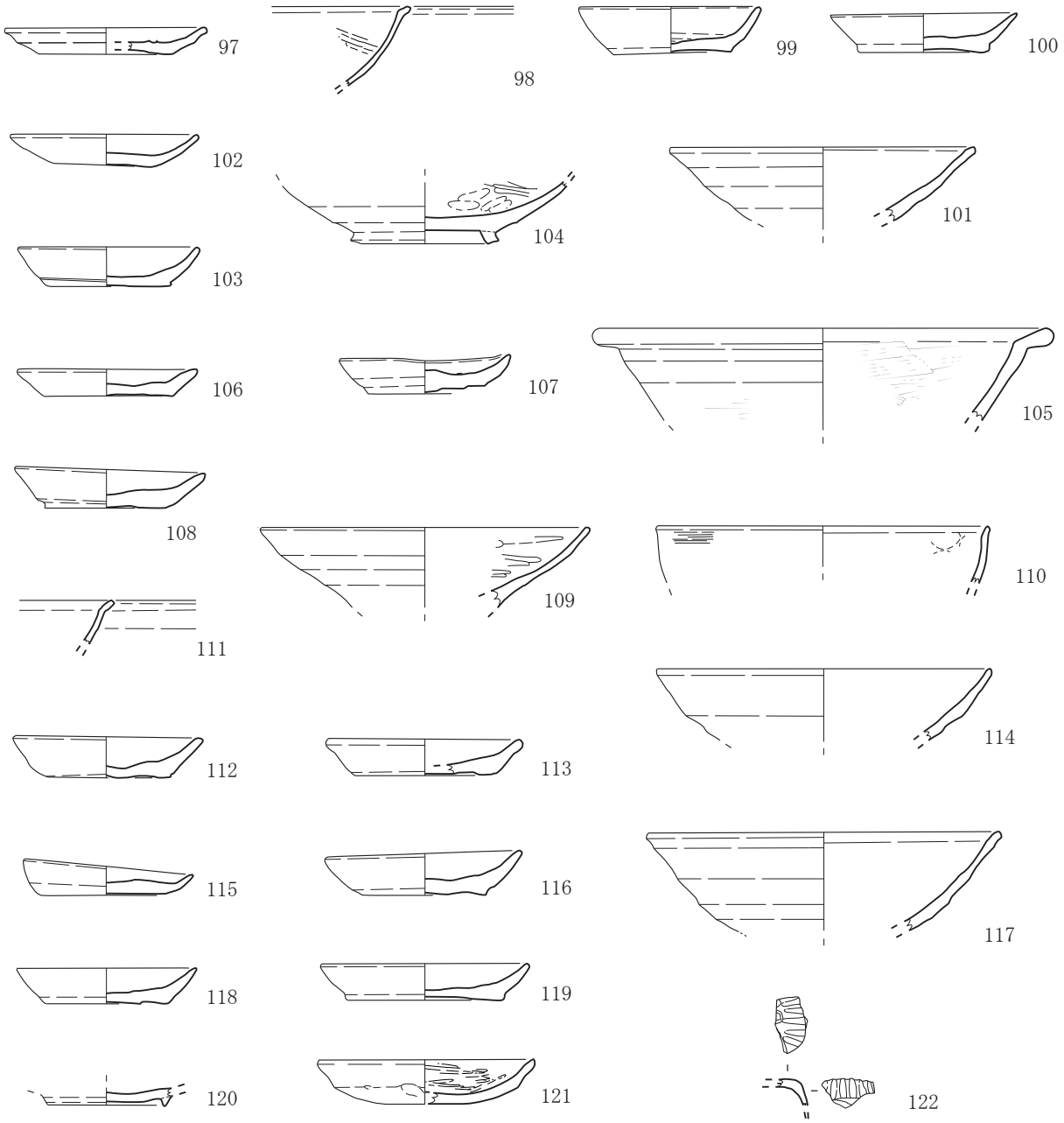
第 13 図　1 区出土遺物実測図（1）



第 14 図　1 区出土遺物実測図（2）



第 15 図　1 区出土遺物実測図（3）

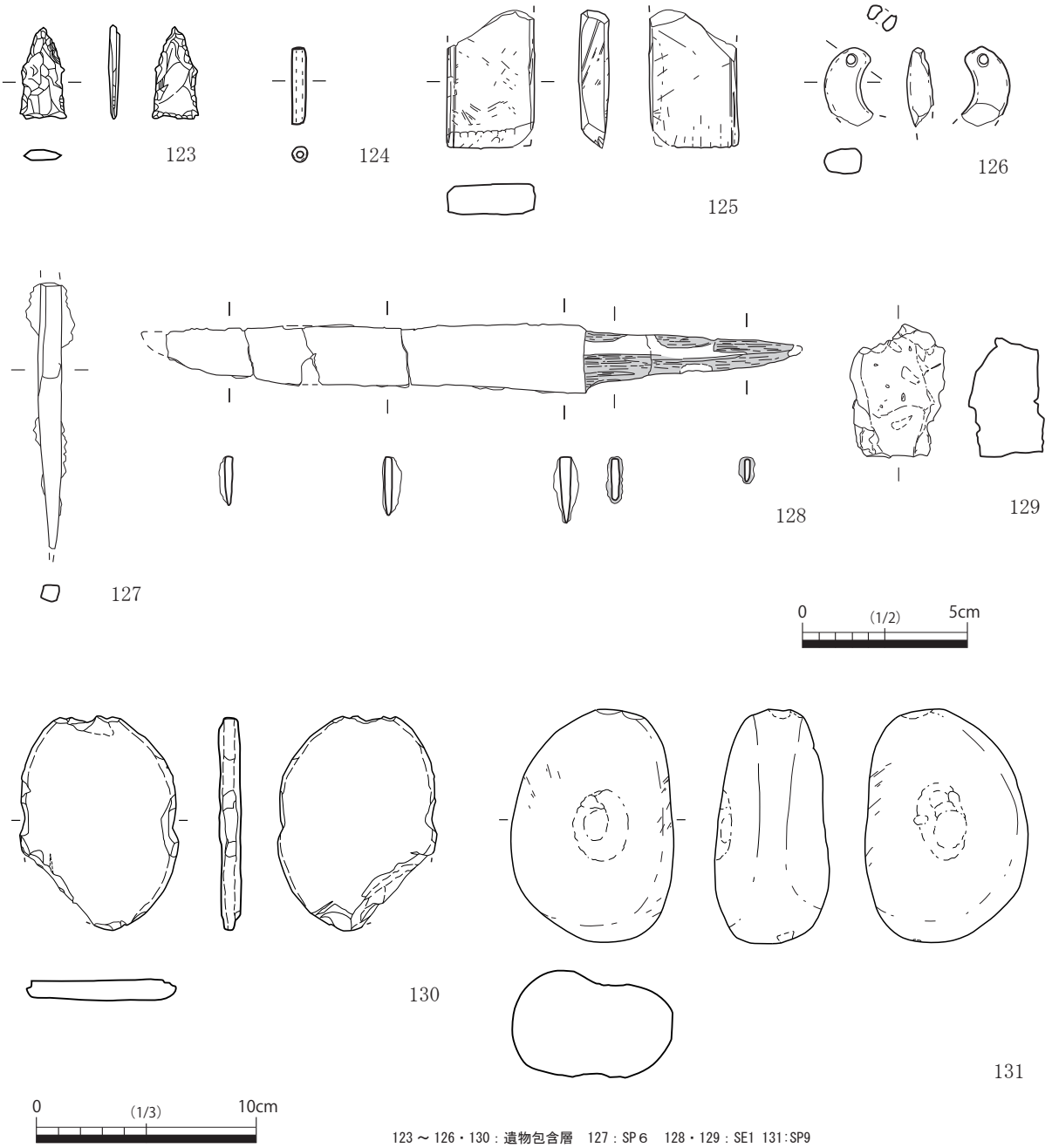


97・98：SK21　99～101：SK24　102：SP 1　103：SP 4　104：SP14　105：SP10　106：SP16　107：SP17
108・110：SP23　109：SP18　111：SP24　112：SP26　113・115：SP28　114・116・118～120：SP33
117：SP38　121：遺物包含層　122：表面採集

第 16 図　1 区出土遺物実測図（4）

も多くみられる。13 は体部を途中で折り込み、先方を底部内面と水平になるまで外方へ折り曲げている。1 / 2 以上を欠失するため全形は不明。78 は土師器の柱状高台皿で、口縁部と高台部を欠失する。胎土には多量の雲母を含み、黄橙色に焼成されている。内面は明瞭なロクロ目を残す。

79 ～ 91・93 は土師器の杯である。杯は口径 13.5 ～ 15.6cm、3.3 ～ 4.9cm で、底部切り離しは、全て糸切りである。体部が直線的なものと内湾気味のものがあり、口縁部を丸くおさめるものと、



第 17 図　１区出土遺物実測図（５）

窄まるものがある。

92・94・96 は土師器の椀で、92・94 は周防国府周辺等からの搬入品とみられる。胎土は精良で白色に焼成されている。92 は口径 15.5cm、器高 5.0cm で、口縁部は真直ぐに伸びる。94 は口縁部が外反する。両者とも内面は工具で擦り撫でて平滑に仕上げている。92 は断面が三角形状を呈する高台を貼付する。94 は底部には糸切り後乾燥させた際の板目圧痕がみられ、接地面が内径端にある高台を貼付し、見込みには重ね焼き痕跡が認められる。96 は在地系とみられ、胎土に多量の砂粒を混入しているが、皿や杯の胎土に普遍的にみられる雲母は認められない。焼成は甘く黄橙色系を

呈し、底部には接地面が内径端にある高台を貼付する。

95 は中国同安窯系の青磁椀Ⅰ - 1 b 類。外上方に内湾気味にのびる体部の上半に屈曲部を持つ。口縁部はわずかに外反し、屈曲部の内側には沈線を持ち、内面見込みと体部の境に輪状の段差がみられる。体部外面に櫛状工具による上下方向の放射状の条線、傍には口縁部下から短い条線を施す。釉色は灰オリーブ色で、体部下半外面は露胎、胎土は黄灰色を呈する。内面にヘラ状工具による片彫りで略化した花文と櫛状工具によるジグザグ状の文様を入れる。

97・98 は SK21 から出土。97 の土師器皿は灰褐色の色調を呈する。98 は瓦器椀の口縁部。体部は丸味を持って口縁部へ続き、端部はわずかに外反気味となる。内外面とも炭素が吸着。99・100・101 は SK24 から出土した土師器の皿、杯である。99 の皿は口径 8.1㎝、100 の皿の復元口径は 8.4㎝。共ににぶい橙色の色調を呈する。101 の杯の体部は斜め上方へ真っ直ぐと伸び、端部は丸く収まる。橙色系の色調を呈す。102 ～ 105 は 1 区西側の柱穴から出土した土師器皿・椀・鍋。102 は SP 1 から出土した皿。橙色系の色調を呈し、底部に板目圧痕あり。103 の皿は SP 4 出土。丁寧なナデで仕上げる。104 は椀の高台部。灰白色の色調を呈す。105 は土師器鍋。体部は斜め上方に伸び、ナデ・ハケで仕上げる。外面に多量の煤付着。106 ～ 120 は 1 区東側の柱穴からの出土遺物。106・107・108 は土師器皿。106 は SP16 から出土（図版 10）。底部回転ヘラ切り。板目圧痕あり。107 は SP17 出土。激しい歪みのため口縁が楕円形を呈する。108 は SP23 出土。にぶい橙色の色調を呈す。109 は SP18 出土の土師器杯。灰褐色の色調を呈し、器壁を薄く仕上げる。110 は SP23 出土の土師器椀。体部は斜め上方へ延び、端部はわずかに外反する。111 は SP24 出土の土師器椀。体部は立ち上がり、端部は外反する。112 は SP26 出土の土師器皿。にぶい橙色の色調を呈す。113・115 は SP28 出土（図版 10）の土師器皿。113 の復元口径 8.6㎝、器高 1.7㎝。115 の口径 7.6㎝、器高 1.7㎝。共に橙色系の色調を呈す。114、116、118 ～ 120 は SP33 から出土した一括資料である。114 は土師器椀である。緩やかに体部が立ち上がる。116 は土師器皿で、回転ナデを施し仕上げる。118 の土師器皿はにぶい褐色の色調を呈する。119 は復元口径 9.3㎝の土師器皿。底部ヘラ切りで板目圧痕あり。120 は瓦器椀の高台部。貼り付け高台で、底部外面に炭素吸着痕あり。117 は SP38 出土の土師器椀。内面は灰褐色、外面はにぶい橙色の色調を呈し、口縁部外面には黒斑あり。121 は包含層から出土した瓦器皿。復元口径 9.8㎝、器高 2.0㎝。暗灰色の色調を呈す。11 世紀中頃か。122 は表採の青白磁合子。灰白色の色調を呈し、菊花弁文様あり。景徳鎮窯産。

［2］石器・石製品・土製品・鉄製品（第 17 図・図版 19）

123 は砂質片岩製の石鏃。124 は管玉。弥生時代中期とみられる。125 は凝灰岩製の扁平片刃石斧。126 は土製勾玉。127 は SP 6 出土の鉄釘。128・129 は SE 1 出土。128 は鉄刀子で、茎部の大半を木質が覆う。129 は鉄滓。

第３表　１区出土土器・土製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm) 口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)	胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
1	13	12	SK6	弥生土器	甕	(16.8)	[6.4」	-	精良	良	灰褐色　7.5YR4/2 にぶい赤褐色　5YR5/4	ハケ目後ヘラミガキ ハケ目後ナデ	
2	13	12	SK6	弥生土器	甕	-	[5.9]	-	やや精良	良	にぶい黄橙色　10YR6/3 暗褐色　10YR3/4	ナデ、ミガキ ナデ、ヨコナデ、ミガキ、指オサエ	内面は剝落気味 一部ミガキ
3	13	12	SK6	弥生土器	甕	-	[2.4]	-	やや精良	やや良	明褐灰色　7.5YR7/2 明褐灰色　7.5YR7/2	ナデ ナデ、ヨコナデ	
4	13	12	SK6	弥生土器	甕	(23.6)	[6.0]	-	やや粗	やや良	にぶい黄橙色　10YR7/2 にぶい橙色　7.5YR6/4	ハケ目後ナデか？、摩滅 ハケ目後ナデ	
5	13	12	SK6	弥生土器	甕	-	[8.1]	(6.2)	精良	やや良	褐灰色　7.5YR4/1 にぶい橙色　2.5YR6/3	ヘラケズリ、ナデ、指オサエ、ミガキ ヘラケズリ、ミガキ、ナデ	
6	13	12	SK6	弥生土器	壺	-	[3.2]	10.6	やや粗	良	にぶい赤褐色　5YR5/4 にぶい橙色　5YR6/3	ヨコナデ？ ナデ？	器面剝落のため調整不明 底部ハケ目？
7	13	12	SK6	弥生土器	甕	-	[10.9]	5.8	やや粗	やや良	黒色　N2/0 にぶい黄橙色　10YR6/3	ナデ、ミガキ ヨコハケ後ミガキ	底部上げ底、弥生中期
8	13	12	SK6	弥生土器	壺	-	[7.6]	(12.8)	やや粗	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい褐色　7.5YR6/3	ハケ目、指オサエ、ミガキ 器面剝落のため調整不明 (ミガキ痕？)	
9	13	12	SP11	弥生土器	高杯	(20.4)	[3.7]	-	やや精良	やや良	暗褐色　7.5YR3/4 暗褐色　7.5YR3/4	ヨコナデ ヨコナデ後ミガキ	焼成前の穿孔 (1 ヶ所) 須玖式
10	13	12	遺物包含層	土師器	高杯	-	[10.8]	(13.8)	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/3 にぶい橙色　7.5YR7/4	ヘラケズリ ヘラケズリ後ヘラミガキ	器面摩滅
11	13	12	遺物包含層	縄文土器	深鉢	-	[4.1]	-	やや精良	不良	黄灰色　2.5Y4/1 にぶい黄橙色　10YR6/3	貝殻条痕後ナデ	縄文晩期、沈線文、刻目突帯貼付、口唇部刻目
12	13	12	SP22	須恵器	甕？	(29.2)	[1.6]	-	精良	良	暗灰黄色　2.5Y5/2 にぶい褐色　7.5YR5/3	ヨコナデ ヨコナデ	内面自然釉
13	14	13	SE1	土師器	皿	(8.7)	1.4	(6.2)	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/4 にぶい橙色　7.5YR7/4	器面摩滅 器面摩滅	口縁一部折り返し
14	14	13	SE1	土師器	皿	8.1	1.4	6.8	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り（右）、器形の歪み
15	14	13	SE1	土師器	皿	8.2	1.7	5.7	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
16	14	13	SE1	土師器	皿	8.1	1.6	6.1	精良	良	にぶい橙色　5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右） 内面 1/2 に黒斑
17	14	13	SE1	土師器	皿	8.4	1.6	6.2	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 灰黄褐色　10YR6/2	回転ナデ、底面静止ナデ 回転ナデ、底面静止ナデ	底部ヘラ切り
18	14	13	SE1	土師器	皿	8.6	1.6	6.3	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
19	14	13	SE1	土師器	皿	8.0	1.7	6.4	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
20	14	13	SE1	土師器	皿	7.8 (長径 8.7)	2.1	6.0	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/4 にぶい橙色　7.5YR7/4	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)、器形の歪み、板目圧痕
21	14	13	SE1	土師器	皿	8.3	1.8	5.8	精良	良	にぶい褐色　7.5YR5/4 にぶい褐色　7.5YR5/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)、焼き歪み大、板目圧痕
22	14	13	SE1	土師器	皿	7.8	1.4	6.3	精良	良	にぶい黄橙色　10YR6/4 にぶい褐色　7.5YR5/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)、外面の一部に赤色顔料付着、反対側に黒斑、板目圧痕
23	14	13	SE1	土師器	皿	(8.1)	1.5	5.9	精良	良	にぶい橙色　5YR6/4 にぶい橙色　5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
24	14	13	SE1	土師器	皿	7.5	1.5	5.7	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右） 口縁部に付着物
25	14	13	SE1	土師器	皿	7.8	1.5	5.8	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/4 にぶい黄橙色　10YR6/3	回転ナデ 回転ナデ、底部ナデ	口縁部に段差あり
26	14	13	SE1	土師器	皿	7.9	1.3	6.0	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）、器形に歪み大、体部に赤色顔料？
27	14	13	SE1	土師器	皿	7.9	1.6	7.8	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
28	14	13	SE1	土師器	皿	7.8	1.6	5.6	やや精良	良	橙色　7.5YR6/6 橙色　7.5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
29	14	13	SE1	土師器	皿	8.0	1.4	6.0	精良	良	にぶい褐色　7.5YR5/4 にぶい褐色　7.5YR5/4	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（右）
30	14	13	SE1	土師器	皿	8.0	1.2	6.7	やや精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 灰褐色　7.5YR6/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）内面の回転ナデの際に一部剝落
31	14	13	SE1	土師器	皿	8.6	1.6	6.3	やや精良	やや良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
32	14	13	SE1	土師器	皿	8.1	1.8	5.8	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
33	14	13	SE1	土師器	皿	8.0	1.8	5.8	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/3 にぶい橙色　7.5YR7/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
34	14	13	SE1	土師器	皿	8.3	2.0	5.8	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/4 にぶい黄橙色　10YR6/4	回転ナデ、底部静止ナデ 回転ナデ、底部静止ナデ	底部外面回転ヘラ切り後静止ナデ
35	14	14	SE1	土師器	皿	8.1	1.4	5.8	やや精良	やや良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい褐色　7.5YR6/3	静止ナデ 静止ナデ	底部糸切り、底部中央が陥没し穴が開く
36	14	14	SE1	土師器	皿	8.3	1.4	6.2	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
37	14	14	SE1	土師器	皿	7.9	1.8	5.4	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部摩滅

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (㎝)			胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
						口径（復元値）	器高［残存値］	底径（復元値）					
38	14	14	SE1	土師器	皿	8.1	1.5	6.5	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 灰褐色　7.5YR6/2	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
39	14	14	SE1	土師器	皿	8.3	1.5	5.6	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)
40	14	14	SE1	土師器	皿	8.7	1.7	5.9	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
41	14	14	SE1	土師器	皿	8.3	2.0	5.7	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
42	14	14	SE1	土師器	皿	8.2	1.7	5.6	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
43	14	14	SE1	土師器	皿	8.2	1.9	5.2	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
44	14	14	SE1	土師器	皿	8.2	1.4	5.6	精良	良	にぶい褐色　7.5YR5/4 にぶい褐色　7.5YR5/4	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（右）
45	14	14	SE1	土師器	皿	7.9	1.7	5.6	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右） 器形の歪み
46	14	14	SE1	土師器	皿	7.9	1.6	5.4	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/3 にぶい橙色　7.5YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
47	14	14	SE1	土師器	皿	(7.7)	1.4	5.0	精良	やや良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
48	14	14	SE1	土師器	皿	(8.6)	1.3	6.0	精良	やや良	灰褐色　7.5YR5/2 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)
49	14	14	SE1	土師器	皿	7.8	1.6	6.0	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り（右）、器形の歪み、内面一部に黒斑、板目圧痕
50	14	14	SE1	土師器	皿	8.4	1.8	6.4	精良	良	にぶい橙色　5YR6/4 にぶい橙色　5YR6/4	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底面回転ヘラ切り後ナデ(右)、丁寧なつくり、板目圧痕
51	14	14	SE1	土師器	皿	8.6	1.7	5.9	やや精良	良	にぶい黄橙色　10YR6/4 にぶい黄橙色　10YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
52	14	14	SE1	土師器	皿	8.4	1.4	6.0	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい黄橙色　10YR6/3	回転ナデ 回転ナデか？	底部摩滅
53	14	14	SE1	土師器	皿	8.3	1.8	5.2	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
54	14	14	SE1	土師器	皿	8.6	1.7	5.4	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/4 にぶい橙色　5YR6/4	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)
55	14	14	SE1	土師器	皿	8.0	1.4	6.0	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（右）
56	14	14	SE1	土師器	皿	8.1	1.5	5.9	精良	やや良	灰褐色　7.5YR6/2 灰褐色　7.5YR6/2	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底面回転ヘラ切り後ナデ(右)、内外面に黒斑
57	14	14	SE1	土師器	皿	8.2	1.4	5.8	精良	良	にぶい黄橙色　10YR7/2 にぶい橙色　7.5YR7/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底面回転ヘラ切り後ナデ(右)、外面にスス？付着
58	14	14	SE1	土師器	皿	8.1	1.7	5.8	精良	やや良	にぶい橙色　7.5YR7/4 灰褐色　7.5YR6/2	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)、内外面に赤色顔料・黒斑
59	14	15	SE1	土師器	皿	8.1	1.5	5.8	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 灰褐色　7.5YR6/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右) 器形に歪み
60	14	15	SE1	土師器	皿	7.8	2.3	5.5	やや精良	不良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR5/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
61	14	15	SE1	土師器	皿	8.4	1.6	6.0	精良	良	にぶい褐色　7.5YR5/4 にぶい褐色　7.5YR5/4	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（右）
62	14	15	SE1	土師器	皿	7.8	1.4	5.8	やや精良	やや良	灰黄褐色　10YR5/2 にぶい黄褐色　10YR5/3	体部回転ナデ、底部静止ナデ 回転ナデ、底部静止ナデ	底部糸切り、外面～内面の一部に黒斑、外形に歪み
63	14	15	SE1	土師器	皿	8.1	1.4	5.8	精良	良	にぶい褐色　7.5YR5/4 にぶい褐色　7.5YR5/4	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（右）
64	14	15	SE1	土師器	皿	7.9	1.7	5.4	やや精良	やや良	暗灰黄色　2.5Y5/2 黄灰色　2.5Y5/1	口縁部回転ナデ、底面静止ナデか？ 回転ナデ、底部静止ナデ	底部ヘラ切り
65	14	15	SE1	土師器	皿	8.5	2.1	5.5	精良	やや良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい黄橙色　10YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
66	14	15	SE1	土師器	皿	8.4	1.6	6.4	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい黄橙色　10YR6/4	回転ナデ?、底部静止ナデ 回転ナデ、底部静止ナデ	成形後乾燥段階に歪みが生じる、底部糸切り
67	14	15	SE1	土師器	皿	8.7	1.3	6.0	やや精良	良	にぶい褐色　7.5YR5/3 橙色　5YR6/6	回転ナデ、底部静止ナデ 回転ナデ、底部静止ナデ	
68	14	15	SE1	土師器	皿	8.2	1.8	6.1	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
69	14	15	SE1	土師器	皿	8.6	1.7	6.2	やや粗	やや良	橙色　5YR6/6 橙色　5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
70	14	15	SE1	土師器	皿	8.2	1.8	5.8	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい黄橙色　10YR6/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)、板目圧痕？
71	14	15	SE1	土師器	皿	8.1	2.0	5.5	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)
72	14	15	SE1	土師器	皿	8.1	1.7	5.6	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
73	14	15	SE1	土師器	皿	8.4	1.4	5.5	精良	やや良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ(右)
74	14	15	SE1	土師器	皿	8.4	1.5	6.1	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 灰褐色　7.5YR6/2	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り（右） 体部 1/3 黒斑

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調（内） （外）	主な調整（内） （外）	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
75	14	15	SE1	土師器	皿	8.5	1.7	6.3	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り（右）、板目圧痕、外面底部 (褐灰色 7.5YR6/1)
76	14	15	SE1	土師器	皿	8.8	1.5	6.0	精良	良	にぶい橙色　5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ（右）
77	14	15	SE1	土師器	皿	7.9	1.9	5.4	精良	やや良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
78	14	15	SE1	土師器	台付皿	-	[3.0]	-	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/4 にぶい橙色　7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	高台欠
79	15	16	SE1	土師器	杯	13.5	3.4	7.4	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り後ナデ（右）、復元された口縁の高さに違いがある（5mm 程度）
80	15	16	SE1	土師器	杯	(14.8)	3.3	-	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい黄橙色　10YR6/4	回転ナデ、底部静止ナデ 回転ナデ、体部下位静止ナデ？	底部糸切り
81	15	15	SE1	土師器	杯	15.6	3.6	7.4	精良	良	灰褐色　7.5YR4/2 灰褐色　7.5YR4/2	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り（右）
82	15	16	SE1	土師器	杯	(15.0)	4.5	7.6	精良	やや良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
83	15	16	SE1 下層 （砂層）	土師器	杯	14.8	[2.7]	-	精良	良	橙色　5YR7/6 にぶい橙色　7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	
84	15	16	SE1	土師器	杯	(15.6)	[3.6]	-	やや精良	良	橙色　5YR6/6 橙色　5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	
85	15	16	SE1	土師器	杯	14.8	4.8	8.5	精良	やや良	灰褐色　7.5YR5/2 灰褐色　7.5YR4/2	回転ナデ、指オサエ 回転ナデ	底部回転糸切り後ナデ（右）
86	15	16	SE1	土師器	杯	15.3	4.5	7.6	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
87	15	16	SE1	土師器	杯	(15.4)	4.4	7.5	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ
88	15	16	SE1	土師器	杯	(16.0)	3.7	9.4	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
89	15	16	SE1	土師器	杯	15.2	4.3	7.5	やや精良	良	にぶい黄橙色　10YR6/3 灰黄褐色　10YR5/2	回転ナデ、底部静止ナデ 回転ナデ	口縁部外面～内面に部分的黒斑あり、内外面とも水引き成形痕を残す
90	15	16	SE1	土師器	杯	14.3	4.9	7.2	やや精良	やや良	灰黄褐色　10YR6/2 にぶい黄橙色　10YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
91	15	17	SE1	土師器	杯	14.3	4.4	7.7	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 灰黄褐色　10YR4/2	回転ヘラケズリ後回転ナデ 回転ヘラケズリ後回転ナデ	底部糸切り、外面の一部にスス付着、底部外面 2 ヶ所に圧痕あり
92	15	17	SE1	土師器	椀	15.5	5.0	高台径 5.9	精良	良	灰白色　10YR8/2 灰白色　10YR8/2	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部貼り付け高台（断面台形）
93	15	17	SE1	土師器	杯	(15.4)	[3.8]	-	精良	良	にぶい褐色　7.5YR5/4 にぶい褐色　7.5YR5/4	回転ナデ 回転ナデ	
94	15	17	SE1	土師器	椀	(15.8)	5.1	6.2	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR7/3 浅黄橙色　10YR8/3	不明 回転ナデ	底面糸切り、底部外面に板目圧痕、底部内面に重ね焼き痕跡
95	15	17	SE1	青磁	椀	(15.4)	[5.5]	-	精良	良	釉：灰オリーブ色　5Y5/2 胎土：灰白色　2.5Y7/1	回転ナデ、櫛描文、施釉 回転ナデ、回転ヘラ削り、櫛描文、施釉	同安窯系 12 世紀中頃～後半
96	15	17	SE1	土師器	椀	-	[2.9]	6.8	精良	良	浅黄橙色　7.5YR8/3 浅黄橙色　7.5YR8/3	回転ナデ、不明 回転ナデ、不明、付高台	
97	16	17	SK21	土師器	皿	(8.8)	1.3	(6.0)	精良	良	灰褐色　7.5YR6/2 灰黄褐色　10YR6/2	回転ナデ、ハケ目 回転ヘラケズリ？後回転ナデ	底部ヘラ切り（右）
98	16	17	SK21	瓦器	椀	-	[3.6]	-	精良	良	黒色　10YR2/1 黒色　10YR2/1	ヨコナデ、ミガキ ヨコナデ	内外面に黒色炭素付着 素地 (にぶい黄橙色 10YR7/2)
99	16	17	SK24	土師器	皿	8.1	2.3	5.3	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
100	16	17	SK24	土師器	皿	(8.4)	1.8	(5.6)	精良	良	橙色　5YR7/6 にぶい橙色　7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右） 板目圧痕
101	16	17	SK24	土師器	杯	(11.6)	[3.3]	-	精良	良	にぶい黄橙色　10YR7/3 にぶい橙色　7.5YR7/4	回転ナデ 回転ナデ	
102	16	17	SP1	土師器	皿	8.4	1.6	4.4	精良	良	にぶい赤褐色　5YR5/4 にぶい橙色　5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（左） 板目圧痕
103	16	17	SP4	土師器	皿	8.0	1.8	5.5	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ、（丁寧な）ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ（右）、胎土が少し粗い
104	16	18	SP14	土師器	椀	-	[2.8]	(5.8)	精良	良	浅黄橙色　10YR8/3 灰白色　10YR8/2	回転ナデ、ミガキ、指オサエ 回転ヘラケズリ、ナデ	貼り付け高台
105	16	18	SP10	土師器	鍋	(20.5)	[4.2]	-	精良	良	にぶい橙色　5YR6/4 暗赤褐色　2.5YR3/4	回転ナデ、ハケ目 回転ナデ、下部にハケ目？	外面に多量のスス付着
106	16	18	SP16	土師器	皿	(8.2)	1.2	(5.8)	精良	良	にぶい黄橙色　10YR7/3 にぶい黄橙色　10YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右） 板目圧痕
107	16	18	SP17	土師器	皿	7.6	1.7	5.3	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 橙色　7.5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り、激しい歪み
108	16	18	SP23	土師器	皿	8.6	1.9	5.5	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ？

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
109	16	18	SP18	土師器	杯	(14.9)	[4.7]	-	精良	良	灰褐色　7.5YR6/2 灰褐色　7.5YR4/2	ヨコナデ後ミガキ ヨコナデ	
110	16	18	SP23	土師器	椀	(15.1)	[1.8]	-	精良	良	にぶい黄橙色　10YR7/2 灰黄褐色　10YR6/2	ヨコナデ、指オサエ ヘラケズリ、ヨコナデ	
111	16	18	SP24	土師器	椀	(18.6)	[2.0]	-	やや精良	良	灰白色　7.5YR8/2 浅黄橙色　7.5YR8/3	ヨコナデ ヨコナデ	
112	16	18	SP26	土師器	皿	8.4	1.9	5.5	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/3 にぶい橙色　7.5YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（右）
113	16	18	SP28	土師器	皿	(8.6)	[1.7]	(6.5)	精良	良	橙色　7.5YR6/6 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右） 板目圧痕、体部に歪み
114	16	18	SP33	土師器	椀	(15.1)	[3.3]	-	精良	良	にぶい黄橙色　10YR7/4 にぶい橙色　7.5YR7/4	ナデ ハケ目後ナデ	
115	16	18	SP28	土師器	皿	7.6	1.7	5.6	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/3 にぶい橙色　7.5YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（右） 板目圧痕
116	16	18	SP33	土師器	皿	8.7	2.0	5.6	精良	良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい褐色　7.5YR5/3	回転ナデ 回転ナデ	底部ヘラ切り（右） 板目圧痕
117	16	18	SP38	土師器	椀	(15.9)	[4.4]	-	精良	良	灰褐色　7.5YR5/2 にぶい橙色　7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ (一部ハケ目の痕跡が残る)	口縁部外面に黒斑
118	16	18	SP33	土師器	皿	(8.1)	1.6	(5.5)	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右）
119	16	18	SP33	土師器	皿	(9.3)	1.7	(7.1)	精良	良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り（右） 板目圧痕
120	16	18	SP33	瓦器	椀	-	[0.8]	(5.3)	精良	良	にぶい褐色　7.5YR5/3 にぶい黄橙色　10YR7/2	ナデ、指頭押圧痕？ ナデ	貼り付け高台 底部外面に炭素の吸着
121	16	18	遺物包含層	瓦器	皿	(9.8)	2.0	3.6	やや精良	やや良	暗灰色　N 3/0 暗灰色　N 3/0	回転ナデ後ミガキ 回転ナデ後指オサエ	
122	16	18	表面採集	青白磁	合子	-	[1.1]	-	精良	良	灰白色　10Y7/1 灰白色　2.5Y8/1	回転ナデ	景徳鎮窯産 施釉、菊花弁文様
126	17	19	遺物包含層	土製品	勾玉	長さ (2.3)	幅 1.1	厚さ 0.7	粗	不良	表：にぶい黄橙色 10YR6/3 裏：褐灰色　10YR5/1	器面摩滅	重さ 2.2g、穿孔

第４表　１区出土石器・石製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考
					長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
123	17	19	遺物包含層	打製石鏃	2.7	1.2	0.3	1.2	砂質片岩	
124	17	19	遺物包含層	管玉	最大径 0.5	孔径 0.2cm	器高 2.3	0.7	石材不明	内外面：灰オリーブ　5Y4/2
125	17	19	遺物包含層	扁平片刃石斧	[4.1]	[2.6]	[0.9]	17.6	凝灰岩	擦痕、刃部に擦痕
130	17	19	遺物包含層	石錘	9.7	7.2	1.0	120	砂質片岩	長軸、短軸共に打欠 (1 か所は欠損)
131	17	19	SP9	敲石	10.6	最大幅 7.4	4.8	590	花崗岩	細粒花崗岩、全面（敲打痕・擦痕）

第５表　１区出土鉄製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			重さ（g）	備考
						長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]		
127	17	19	SP6	鉄製品	釘	[8.0]	[0.7]	[0.5]	8.0	
128	17	19	SE1	鉄器	刀子	[19.0]	最大幅 2.1		26.4	茎部ほぼ全体に木質残存
129	17	19	SE1	鉄製品	鉄滓				50.6	鍛冶滓

2　2区

（1）調査区の概要

南側の２区では、弥生時代中期の竪穴建物１棟、土坑６基、古墳時代以降の土坑２基、中世の掘立柱建物４棟、柵列４条、土坑 22 基、柱穴約 429 個など多くの遺構が検出され、１区と同様に幅広い時代の集落であることが明らかとなった。

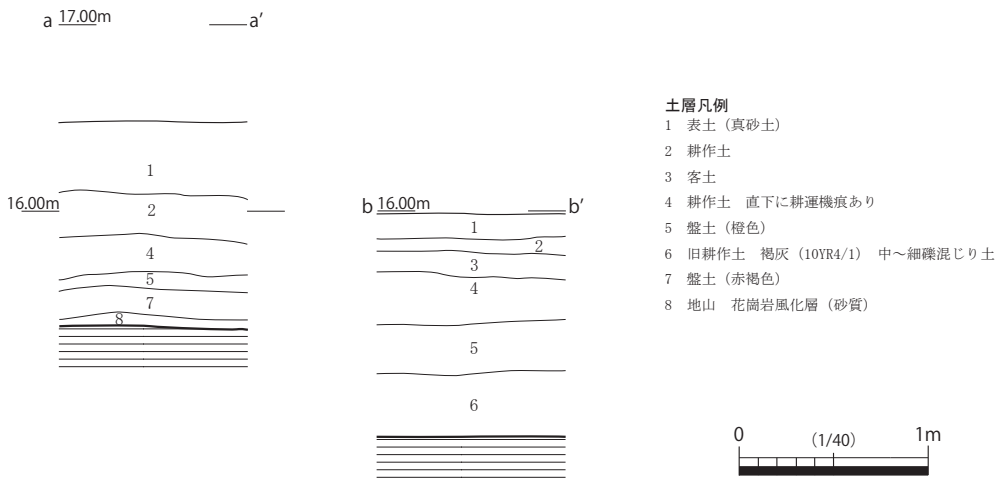
遺物は弥生時代中期の弥生土器や石器を中心に、古代から中世にかけての幅広い時期のものが出土している。

２区では壁面による土層観察を行った。その結果、１区と同様に基本層序は耕作土（現代）下に盤土（現代）、地山（粘質土、一部砂質土）となる。奈良台川へ向かって東側へ傾斜し、層厚も比例して厚くなる傾向にあり、最も表土の厚い南壁では地表から確認面までの深さ約 1.6 mを測る。西側に平坦面が残り、東側へ向かって傾斜し斜面地が広がる。２区では、西側に平坦面が存在し、弥生時代中期の竪穴建物、中世の掘立柱建物が分布する。調査区中央部は東西に傾斜地が広がり、傾斜地部分は遺構の分布が希薄である。

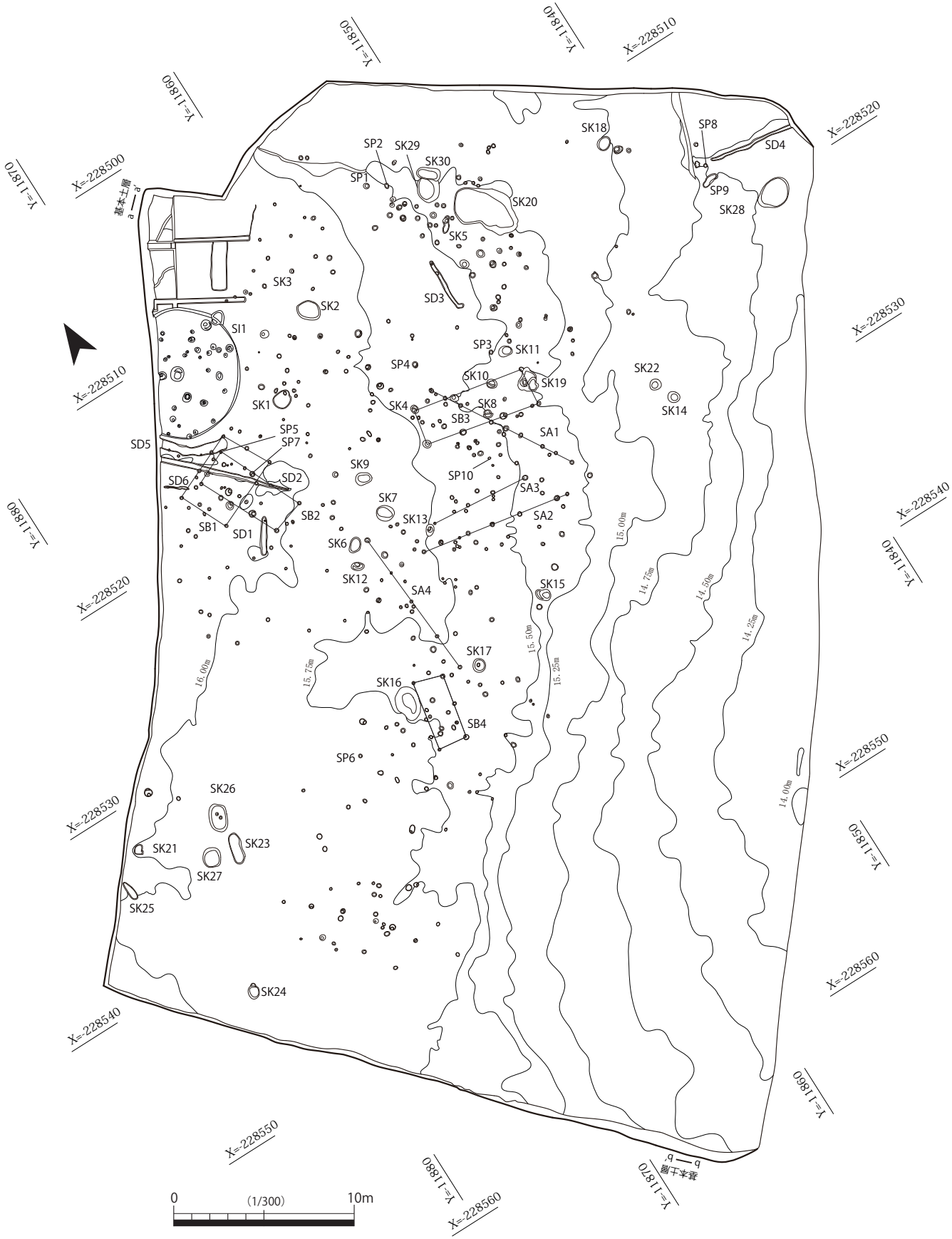
（2）遺構

［1］竪穴建物

SI 1（第 20 図　図版 21 ～ 25）　調査区の北西隅部に位置する円形の竪穴建物で、標高 16.0 mに位置し、西側約半分は調査区外に至る。規模は南北に 7.4 m、東西に 4.6 mを測る。確認された南北長から全容を推定すると、全長約 7.4 m、床面積約 43㎡となる。床面は平坦だが、外縁部はやや高

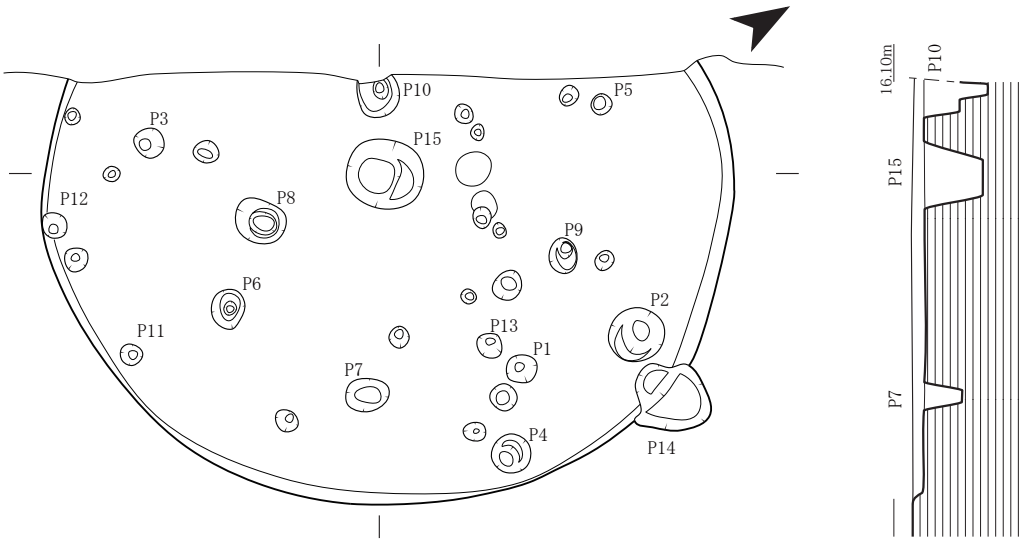


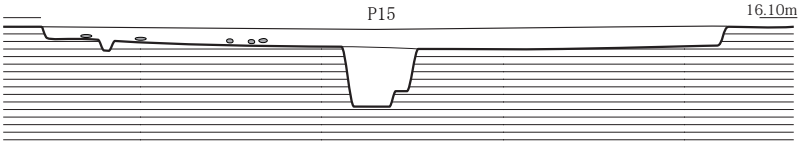
第 18 図　２区基本土層図



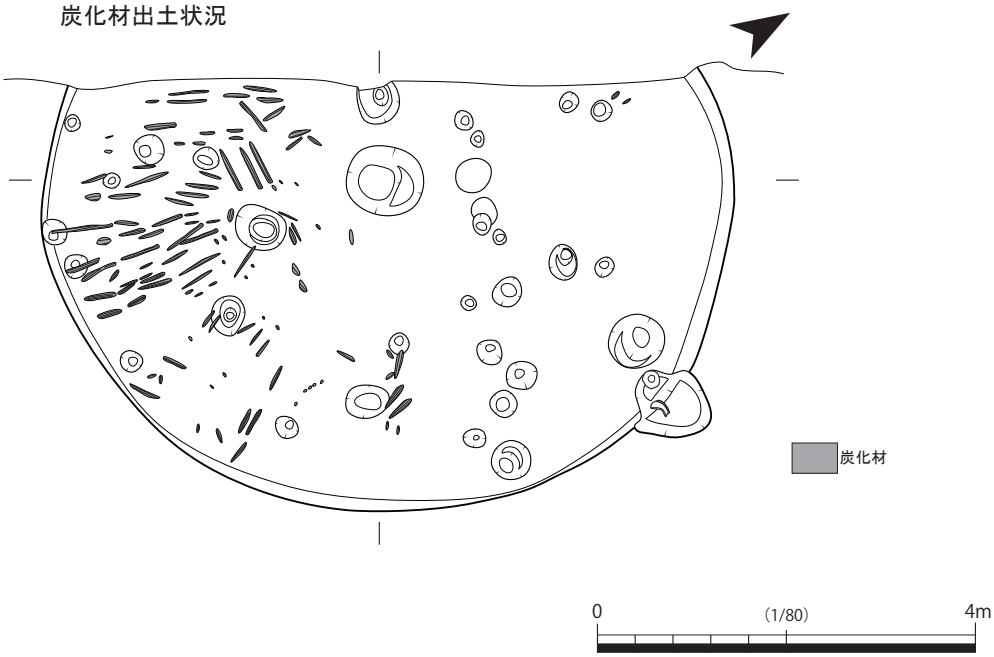
第 19 図　2 区遺構配置図

SI1





炭化材出土状況



第 20 図　2 区 SI 1 実測図

くなり、主柱穴外縁が一段高くなるベット状遺構を伴うなどの可能性が考えられる。柱穴は 30 本確認されたが、うち主柱穴は５本（北側から時計回りに P5・P9・P7・P6・P3）と推定される。規模は径 20 ～ 65cm、深さ 10 ～ 80cm である。南側床面直上には、炭化材が多量に出土しており、その放射状の出土状況から、建物上屋の部材と推定され、消失家屋であった可能性が高い。建物中央部の炉と推定される位置に、大型の柱穴（P15) が位置し、中央部に柱穴があったことが想定される。また P15 の北側に２箇所床面に赤化がみられ、炉跡の可能性があるが、被熱痕跡からは長期の使用は想定しがたい。

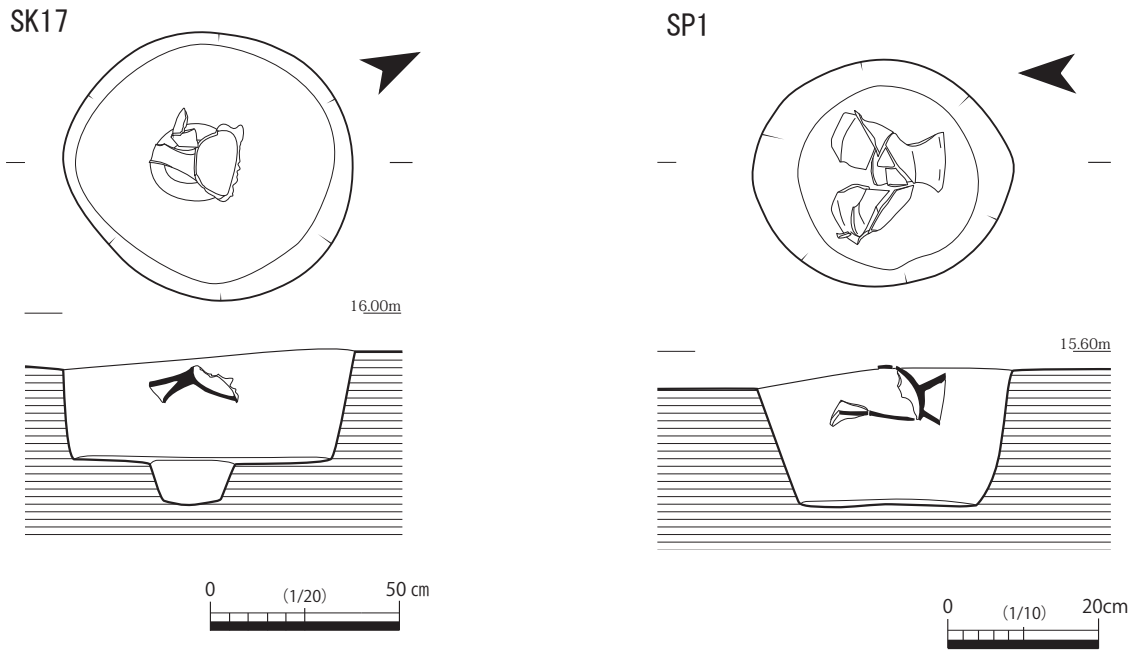
出土遺物は少なく、弥生土器を中心に古代・中世の遺物が若干含まれる。水田直下で検出されているため、後世の混入と推定される。床面からは弥生土器の壺、甕、石鏃などの石器、黒曜石やサヌカイトの剥片などが出土している。P14 内からは 139･142 が出土しており､床面から管玉（193）が出土している。

出土遺物から、弥生時代中期前半と推定される。炭化材の放射性炭素年代測定（AMS 法）を実施した結果、紀元前３～４世紀という結果を得た。

［２］弥生時代の土坑・柱穴

SK17（第 21 図　図版 26） 調査区中央部に位置する。規模は長軸 77cm、短軸 71cm、深さ 39cm を測る楕円形で、断面は皿状を呈し、底面は平坦で、中央部に柱穴をもつ。埋土は黒褐色・暗褐色土を基調とし、遺物は柱穴上面から弥生土器の高杯が２個体（154・157）出土している。

SP １（第 21 図　図版 27） 調査区中央北部に位置する。規模は長軸 35cm、短軸 30cm、深さ 18cm を測る楕円形で、断面は皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は暗褐色土を基調とし、遺物は弥生土器の高杯が１個体（166）出土している。

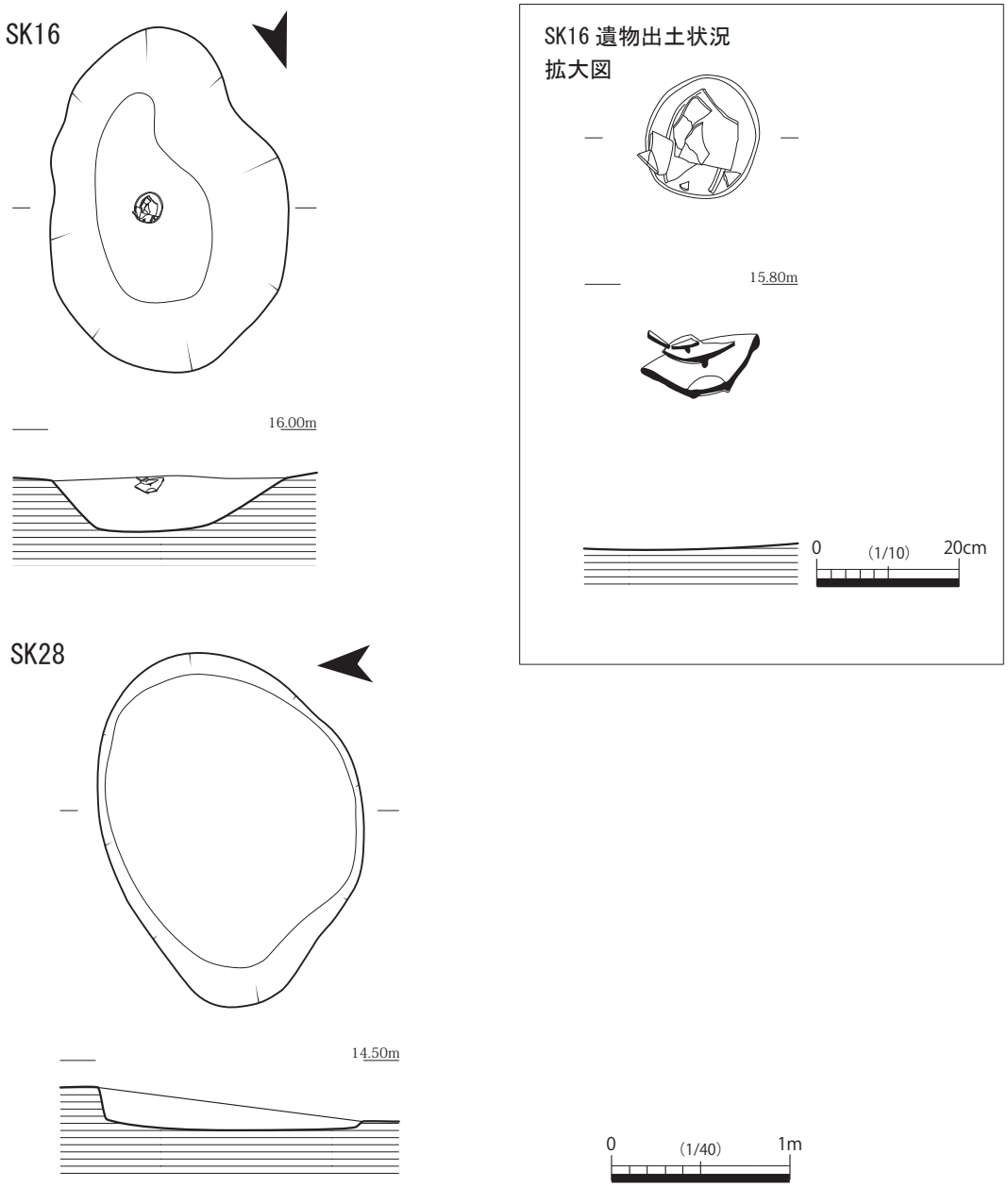


第 21 図　２区 SK17・SP １実測図

［3］古墳・古代の土坑

SK16（第 22 図　図版 28） 調査区中央南側、SB 4 の西側に隣接する、長軸 193cm、短軸 134cm、最深 31cm を測る楕円形の土坑である。遺物は、白磁椀（173）の中に破損した土師器椀（174・177・178）が詰まった状態で、遺構の中央部表層から出土した。埋土は２層で、遺物を包含する上層は黒褐色砂質土、下層が灰黄褐色砂質土である。出土遺物から、平安時代後半頃の土坑に比定される。

SK28（第 22 図　図版 27） 調査区北東端にある、長軸 200cm、短軸 150㎝、深さ 14㎝を測る楕円形の土坑である。埋土は単層で、黒褐色粘質土。出土遺物は土師器甕（162）・壺（163）・椀（164）が主だったもので、他に縄文土器浅鉢片（160）・弥生土器甕片（159・161）・石鏃（189）があるが、流れ込みによるものとみられ、遺構の時期としては古墳時代とみられる。



第 22 図　2 区 SK16・28 実測図

第６表　２区土坑一覧表

遺構番号	平面形	規模（ｃｍ）			出土遺物	時代	備考
		長軸	短軸	深さ			
SK 1	不整円形	110	94	8	弥生土器片		
SK 2	楕円形	133	105	13	弥生土器片、黒曜石石核		
SK 3	円形	26	23	33	弥生土器片		
SK 4	円形	48	41	53	縄文土器		SB ３構成柱穴
SK 5	楕円形	99	26	12			
SK 6	楕円形	90	59	31	縄文土器片		
SK 7	円形	98	85	38	弥生土器、黒曜石剥片	弥生中期	
SK 8	円形	46	42	15			
SK 9	楕円形	92	61	30	弥生土器	弥生中期	
SK10	円形	57	50	26	弥生土器片		SB ３構成柱穴
SK11	楕円形	77	54	37	弥生土器片、土師器片		
SK12	楕円形	72	46	58			
SK13	楕円形	66	44	59	弥生土器片	弥生中期	
SK14	円形	67	65	23	弥生土器片、須恵器片、土師器片		
SK15	楕円形	88	53	41	弥生土器片、陶器片		
SK16	楕円形	193	134	31	白磁、土師器	平安	
SK17	楕円形	77	71	39	弥生土器	弥生中期	
SK18	楕円形	83	68	26			
SK19	不整形	138	89	37	須恵器片、土師器片、炭		SB ３構成柱穴
SK20	楕円形	384	190	45	弥生土器片、須恵器片、土師器片、鉄滓		
SK21	不整形	61	42	20			
SK22	円形	66	63	24			
SK23	楕円形	176	62	36			
SK24	楕円形	74	60	17			
SK25	楕円形	118	40	12	土師器片		
SK26	楕円形	153	101	25	弥生土器、石製品	弥生中期	
SK27	円形	107	99	31	弥生土器	弥生中期	
SK28	楕円形	200	150	14	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、石製品	古墳	
SK29	楕円形	残存 130	121	43	弥生土器片、土師器片、瓦質土器片、鉄滓		SK30 に北端部切られる
SK30	楕円形	132	64	18	弥生土器片		SK29 を切る

［4］掘立柱建物・柵列（第 23 ～ 25 図　図版 20)

２区で復元された掘立柱建物は４棟、確認した柵状の柱穴列は４列である。それぞれの柱穴から出土した遺物は少なく、建物・柵列の時期を判断することは難しいが、出土遺物及び１区の建物の時期から推測すれば、平安時代末から鎌倉時代前半と考えられる。

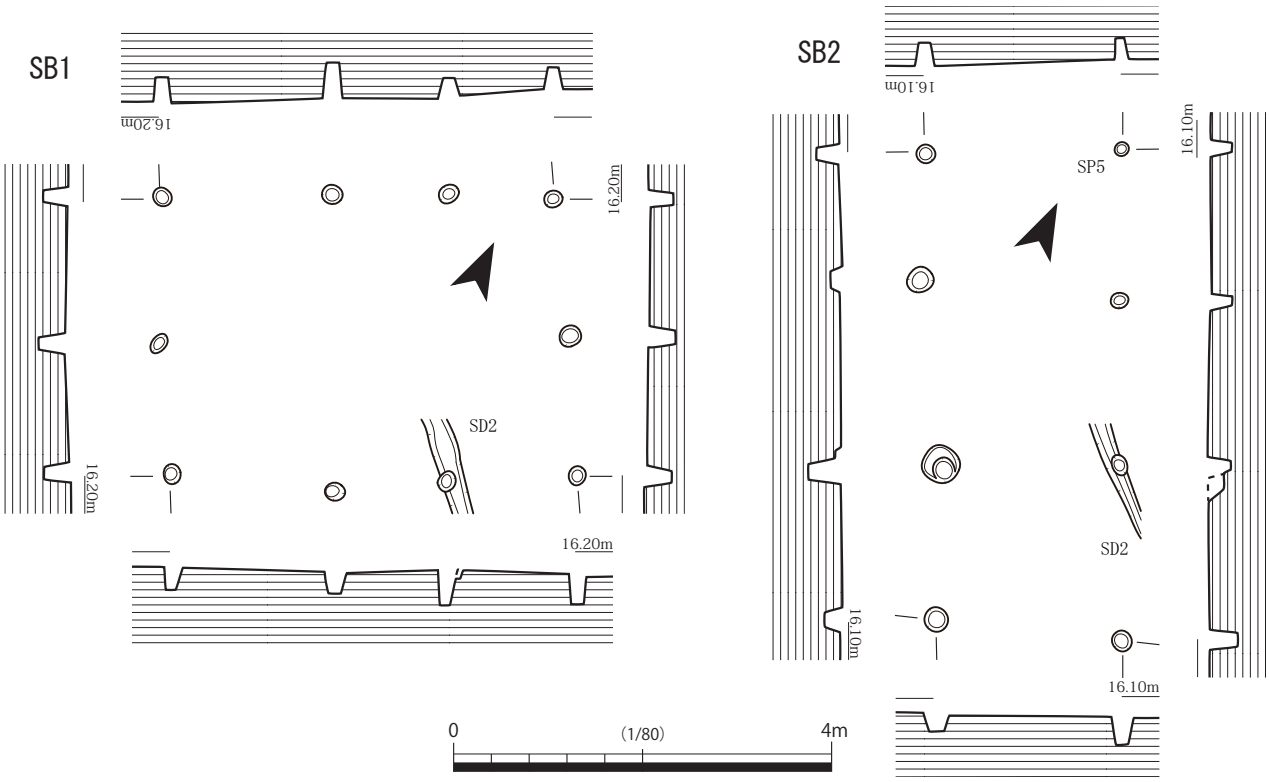
SB １・２（第 23 図）

SB １は調査区の北西部､SI １の南側に位置する３間×２間の建物と考えられる。棟方向は N65° E、桁行長 4.28 m、梁行長 2.92 m、床面積 12.50㎡。柱穴間の平均は桁行方向 1.43 m、梁行方向 1.46 m、柱穴規模は直径 20 ～ 24㎝、深さ 22 ～ 38㎝である。１区の SB ５の棟方向（N72° E）及び桁行長（4.12 m）、梁行長（2.86 m）と似通っていることから、同時期の建物の可能性がある。

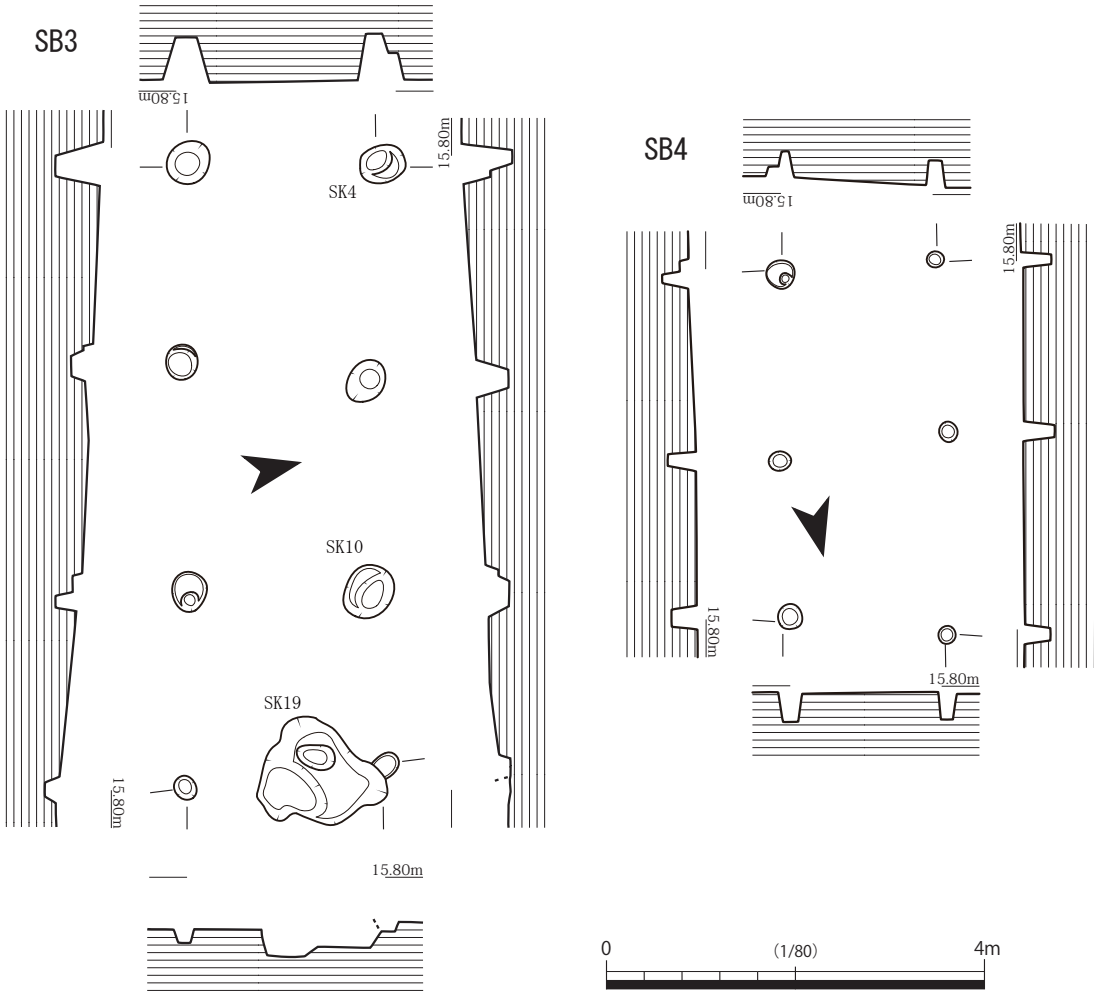
SB ２は SB １と重複する建物で、桁行３間（5.24 m）×梁行１間（1.98 m）、床面積 10.38㎡を測る。桁行方向の柱穴間の平均は 1.75 m、柱穴規模は直径 18 ～ 42㎝、深さ 15 ～ 32㎝。棟方向は N26° W であり、SB １とほぼ直交する。SP ５から土師器・瓦器椀（180）が出土した。

SB ３（第 24 図）

調査区中央部よりやや北側に位置する３間×１間の建物である。棟方向は N78° W、桁行長 6.58 m、梁行長 1.98 m、床面積 13.03㎡を測る。柱穴の規模は直径 25 ～ 54㎝、深さ 24 ～ 48㎝。構成柱穴８個中、北側４個の掘方は広くなっており（SK4･10･19)、建て替えの可能性も考えられる。SK ４から縄文土器浅鉢（143)、SK10・19 からは弥生土器片・須恵器片が出土するが流れ込みの遺物と考えられる。柱穴から出土している土師器の小片によって建物の時期を判断するのは難しいが、１区の SB ６（N81° W)、SB ７（N82° W）と棟方向がほぼ一致することなどから考えて、平



第 23 図　２区 SB １・２実測図



第 24 図　2 区 SB 3・4 実測図

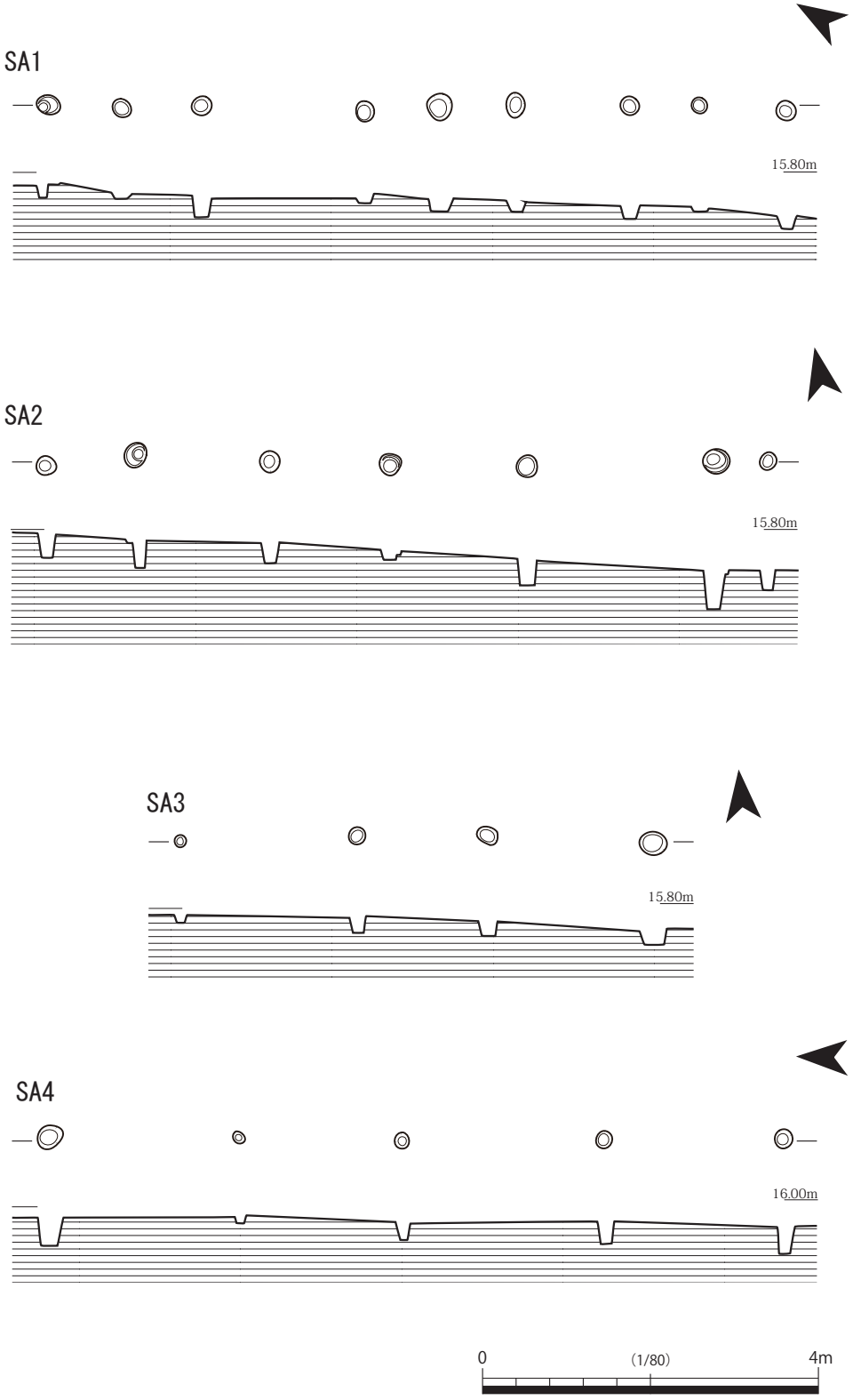
安時代末から鎌倉時代前半の建物と推定できる。

SB 4（第 24 図）

調査区中央部よりやや南側に位置する建物で、桁行方向は 2 間で 3.66 m、梁行方向は 1 間 1.66 m、床面積 6.08㎡を測る。棟方向は N13° E であり、SB 3 の棟方向とほぼ直交する。柱穴規模は直径 18 ～ 30㎝、深さ 26 ～ 34㎝である。

SA 1（第 25 図）

調査区中央部に位置し、9 個の柱穴で構成される柱穴列である。柵列の全長は 8.86 m（柱間は南方から 1.06 m・0.82 m・1.36 m・0.92 m・0.90 m・1.92 m・0.96 m・0.92 m）で、主軸方向（棟方向）は N32° W である。柱穴規模は直径 19 ～ 34㎝、深さ 8 ～ 26㎝。SB 2 と多少離れてはいるが、その棟方向とほぼ平行するような配置であり、敷地境界に付属する柵列や建物の目隠し塀など、建物との関連が想定できる。また、SB 3 と重複しており、棟方向の違いにより建物の設営時期が異なることを示している。



第 25 図　2 区 SA 1 ~ 4 実測図

SA ２（第 25 図）

調査区中央部、SB ３の南側に位置し、７個の柱穴で構成される柱穴列で、柵列の全長は 8.66 m（柱間は南方から 0.72 m・2.20 m・1.62 m・1.42 m・1.60 m・1.10 m）である。柱穴規模は直径 20 ～ 32㎝、深さ 12 ～ 46㎝。主軸方向（棟方向）は N79° W であり、SB ３の棟方向とほぼ同じであることから、少し距離はあるが、建物の目隠し塀として設置されたことも想定できる。

SA ３（第 25 図）

調査区の中央部、SA ２の北側に位置し、４個の柱穴で構成される柱穴列である。柵列の全長は 5.62 m（柱間は南方から 1.96 m・1.56 m・2.10 m）で、柱穴規模は直径 14 ～ 28㎝、深さ 10 ～ 19㎝。主軸方向（棟方向）は N86° W で、SA ２の主軸方向とほぼ平行であることから、SB ３の目隠し塀、あるいは敷地境界に付属する柵列の可能性がある。

SA ４（第 25 図）

調査区中央部に位置し、主軸方向（棟方向）N5° W でほぼ南北に並ぶ５個の柱穴で構成される柱穴列である。柵列の全長は 8.76 m（柱間は南方から 2.12 m・2.44 m・1.92 m・2.28 m）で、柱穴規模は直径 15 ～ 26㎝、深さ 10 ～ 30㎝。SB ４の西側に位置することから、建物に伴う塀としての関連も想定できる。しかし、柱間がやや広いため、今後の再検証が必要と考える。

第７表　２区掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規模（間）	棟方向	桁行（m）建物の南東隅から	梁行（m）建物の南東隅から	床面積（㎡）	関連柱穴	出土遺物	時代	備　考
SB1	3 × 2	N 65° E	4.28（1.68・1.23・1.37）	2.92（1.36・1.56）	12.50	－	－	平安末～鎌倉前半	構成柱穴 10 個
SB2	3 × 1	N 26° W	5.24（1.88・1.76・1.60）	1.98	10.38	SP5	土師器	平安末～鎌倉前半	構成柱穴８個、弥生土器片（流込）
SB3	3 × 1	N 78° W	6.58（1.98・2.48・2.12）	1.98	13.03	SK4、SK10、SK19	土師器	平安末～鎌倉前半	構成柱穴８個、縄文・弥生土器片、須恵器片（流込）
SB4	2 × 1	N 13° E	3.66（1.96・1.70）	1.66	6.08	－	－	－	構成柱穴６個
SA1	8	N 32° W	8.86（1.06・0.82・1.36・0.92・0.90・1.92・0.96・0.92）	－	－	－	－	－	構成柱穴９個
SA2	6	N 79° W	8.66（0.72・2.20・1.62・1.42・1.60・1.10）	－	－	－	－	－	構成柱穴７個
SA3	3	N 86° W	5.62（1.96・1.56・2.10）	－	－	－	－	－	構成柱穴４個
SA4	4	N 5° W	8.76（2.12・2.44・1.92・2.28）	－	－	－	－	－	構成柱穴５個

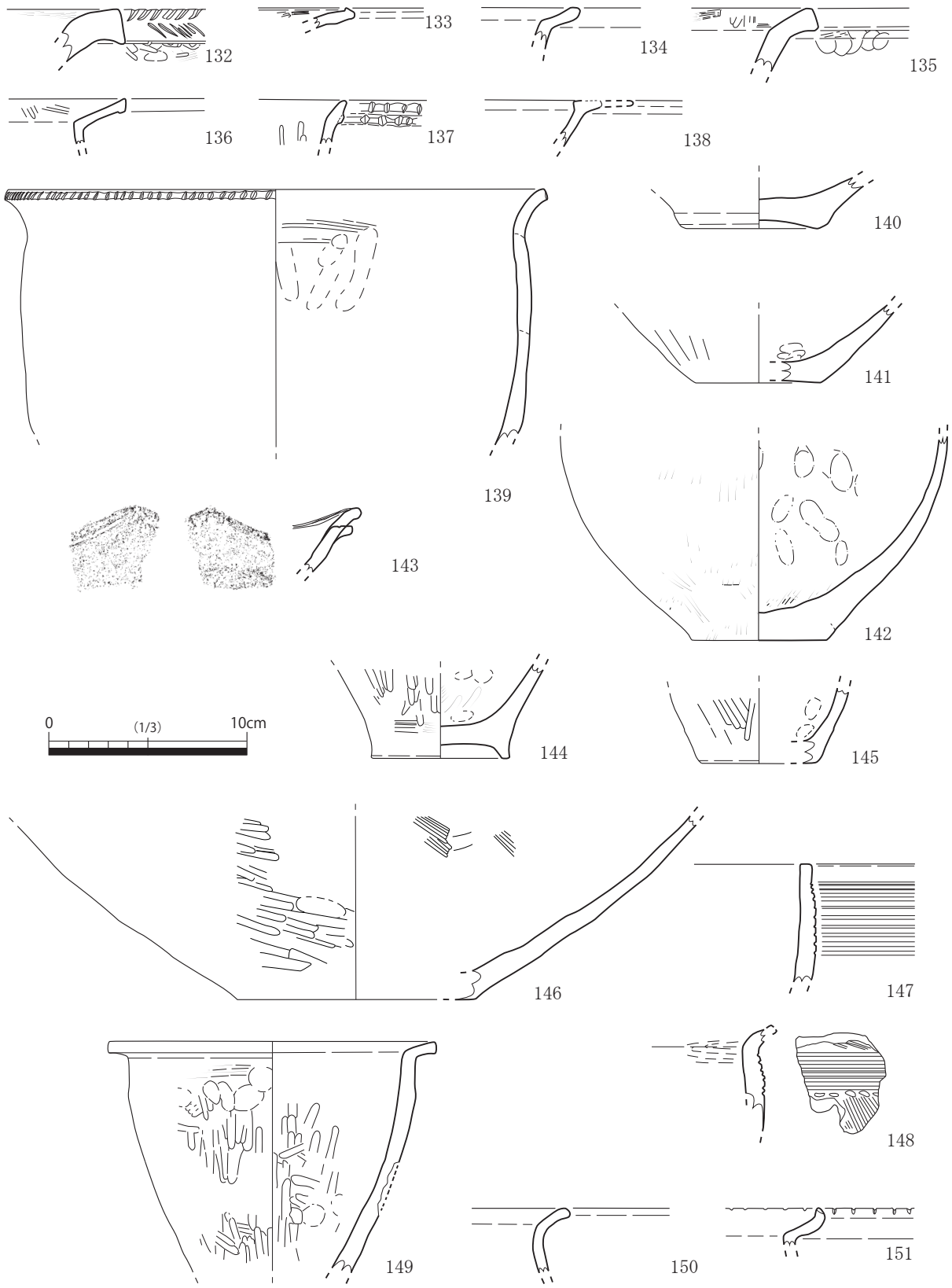
（３）遺物

調査の結果、２区からは主に、弥生時代中期の弥生土器と、平安時代･鎌倉時代の土師器が出土した。この他に、縄文土器・須恵器・白磁・瓦器・石器・石製品・土製品が見られる。

［１］土器（第 26 ～ 29 図　図版 30 ～ 33）

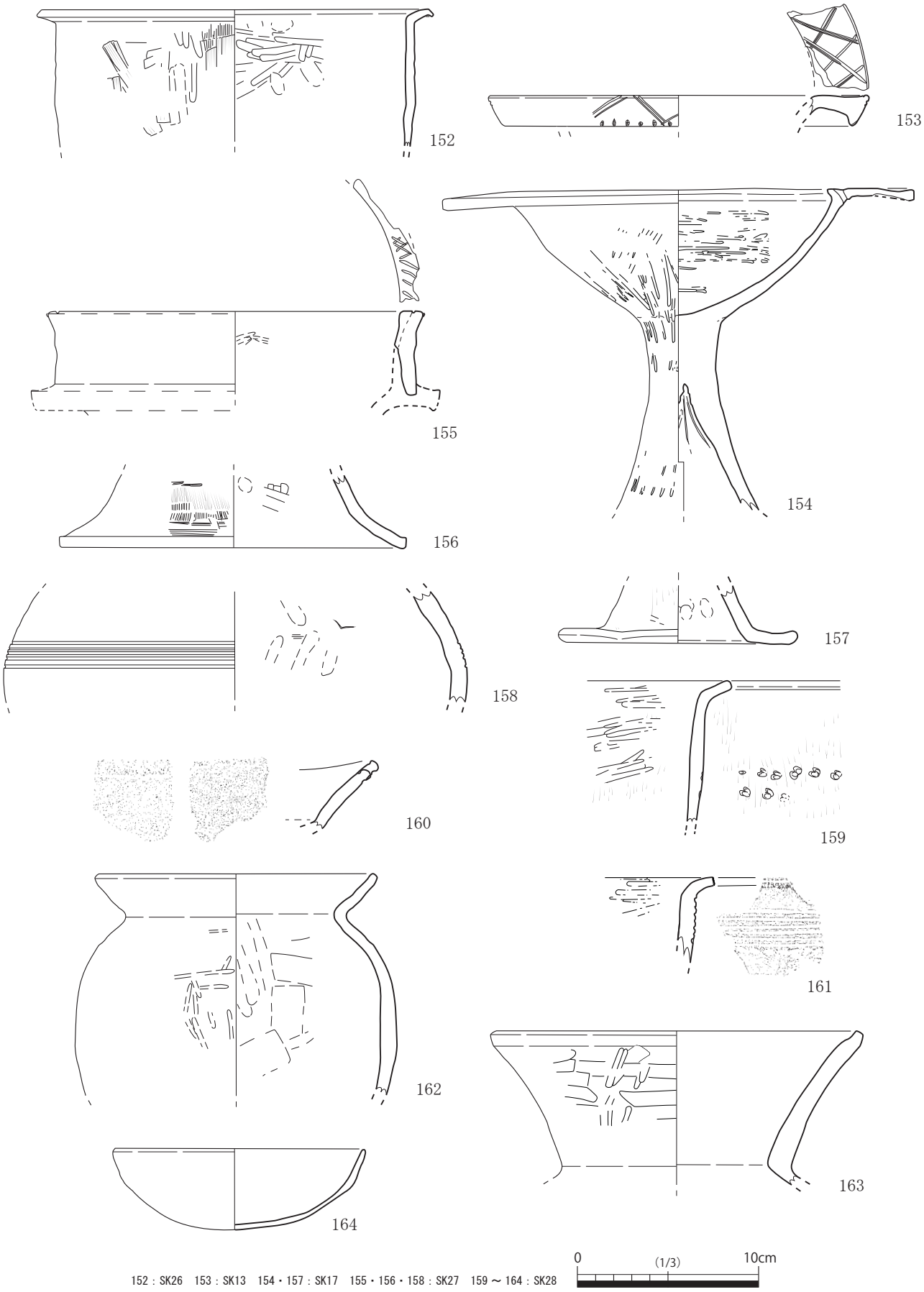
132 ～ 172 のうち約８割を弥生土器が占めるため、これらについては種別を省略し、他の土器について、明記することとする。132 ～ 142 は SI １出土。132 は壺の口縁部片。垂下口縁で、口唇部に羽状文を施し、外面に連続する指頭圧痕がみられる。133・134・136・137 は甕の口縁部片。133 は口端部を丁寧にヨコナデし、端部はやや丸味を持つ。136 は屈折部に明瞭な稜を持つ。内面は赤色顔料を塗布し、外面には煤が付着。137 は端部がやや薄く、口縁部外面と突帯部分に刻目を施す。135 は鉢口縁部片。在地系で器壁が厚く、内面に黒斑がみられる。138 は九州系の高杯。口縁部は鋤先状をなし、先端部を欠損。139 は甕。如意形口縁で、口唇部に刻目を施す。外面は縦方向のハケ目、内面はヘラミガキ調整。140・141 は甕底部で、140 はやや上げ底。142 は壺で、胴部下半は半球形を呈す。胴部最大径は 19.5 ｃｍを測り、底部外面から胴部下位に黒斑がみられる。

143 は SK ４出土の縄文土器の浅鉢。体部上位で屈折して立ち上がり、口縁部は三角形状に突出。口縁部内面に１条の沈線を施す。黒色磨研土器で、方形浅鉢になるとみられる。144 は SK ９出土、145 は SK ７出土の甕底部。144 は上げ底で端部をシャープに仕上げている。外面に縦方向の丁寧なヘラミガキがみられる。145 は小型で､外面に縦方向のヘラミガキを施す。外面に黒斑がみられる。146 は SK ９出土の壺で、胴部はやや内湾気味に大きく開く。外面に明瞭な斜位のヘラミガキがみられる。147 ～ 152 は甕で、151 以外は SK26 出土。147 は直口で端部は面を持つ。ヘラ状工具による 10 条の沈線を施す。148 は外面に無鋸歯の貝殻による６条の沈線の下に連続する刺突文を持つ。149 は短い口縁部が大きく外反。内外面とも縦方向のヘラミガキがみられる。151 は SK20 出土で、屈折部から内湾して立ち上がる口縁部の先端をつまみ上げ、口唇部に刻目を施す。152 は体部から屈折して短い口縁部が大きく外反。外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のヘラミガキ調整。外面に煤が付着し、内面に黒斑がみられる。153 は SK13 出土の壺で、垂下口縁の上面に斜格子文、口唇部に山形文､下端部に刻目を施す。器面の一部には赤色顔料痕が見られる。154･157 は SK17 出土。154 は９同様、鋤先形口縁を持つ須玖式の高杯。口縁部の対面する２か所に、蓋固定用とみられる穿孔を２個ずつ施す。杯部外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキを施す。157 は高杯脚部で、ハの字形に開いた脚部の下端で屈折し大きく外方へ開く。155・156・158 は SK27 出土。155 は壺。複合口縁の立ち上がり部で、口唇部にヘラ状工具による粗い斜格子文を施す。156 は高杯脚部。ハの字形に開き端部は面を持つ。外面は縦方向に細かいハケ目を施す。158 は壺。胴部最大径の上位に５条の沈線を施す。159 ～ 164 は SK28 出土。159 は甕で、口縁部はくの字状に外反し、外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のヘラミガキ調整。胴部上位外面に先端が分かれた刺突文を持つ。同様の文様は山陰地方に多く、山口市の下東遺跡でも出土している。160 は縄文土器の粗製浅鉢。内外面とも口縁直下に１条の沈線を持つ。161 は甕で、口縁部は大きく外反し、口唇部に１条の沈線と縦方向の刻目状の沈線を施す。縦方向の沈線は３本以上を１単位とし、間隔をあけて繰り返すものとみられる。外面には６条の沈線、直下に連続する刺突文を施す。162 は土師器の甕。胴部上

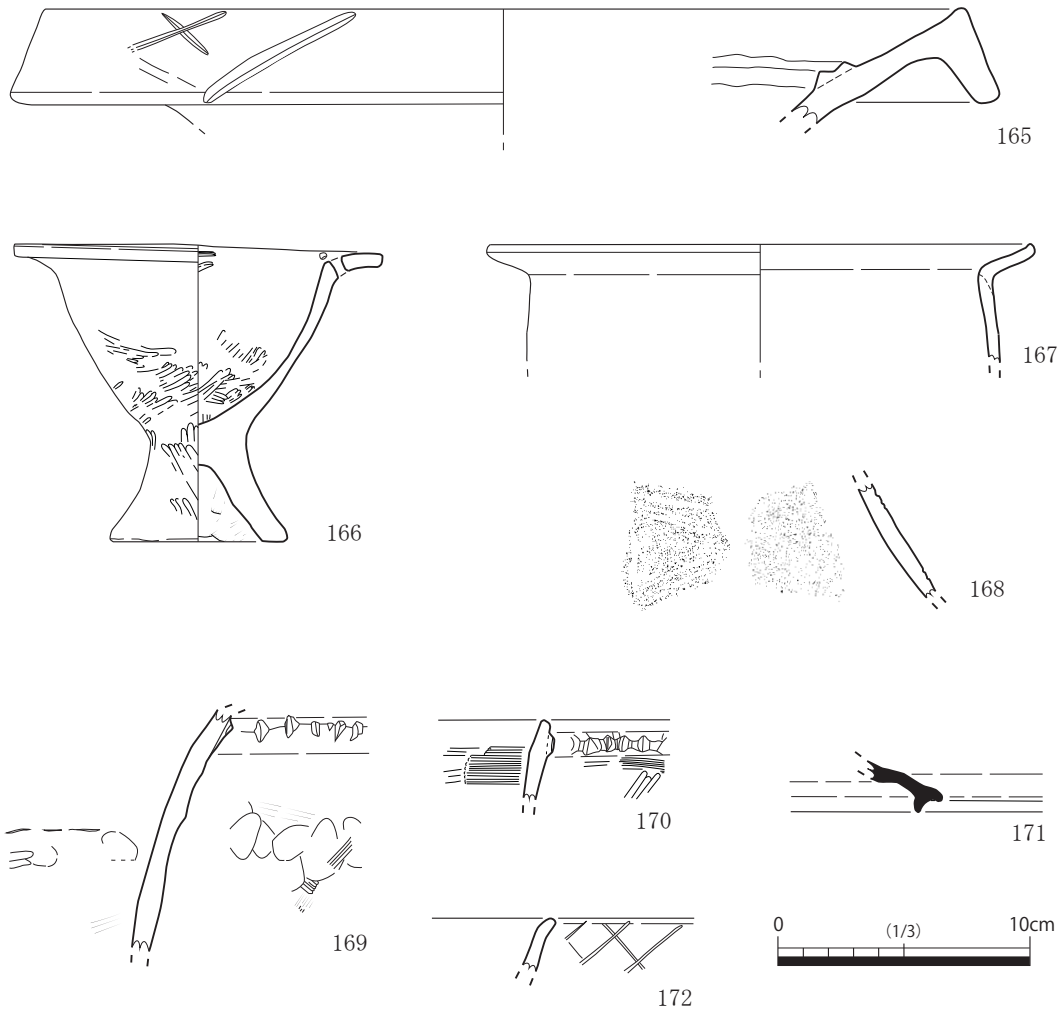


132～142：SI1　143：SK4　144・146：SK9　145：SK7　147～150：SK26　151：SK20

第 26 図　２区出土遺物実測図（１）



第 27 図　２区出土遺物実測図（２）



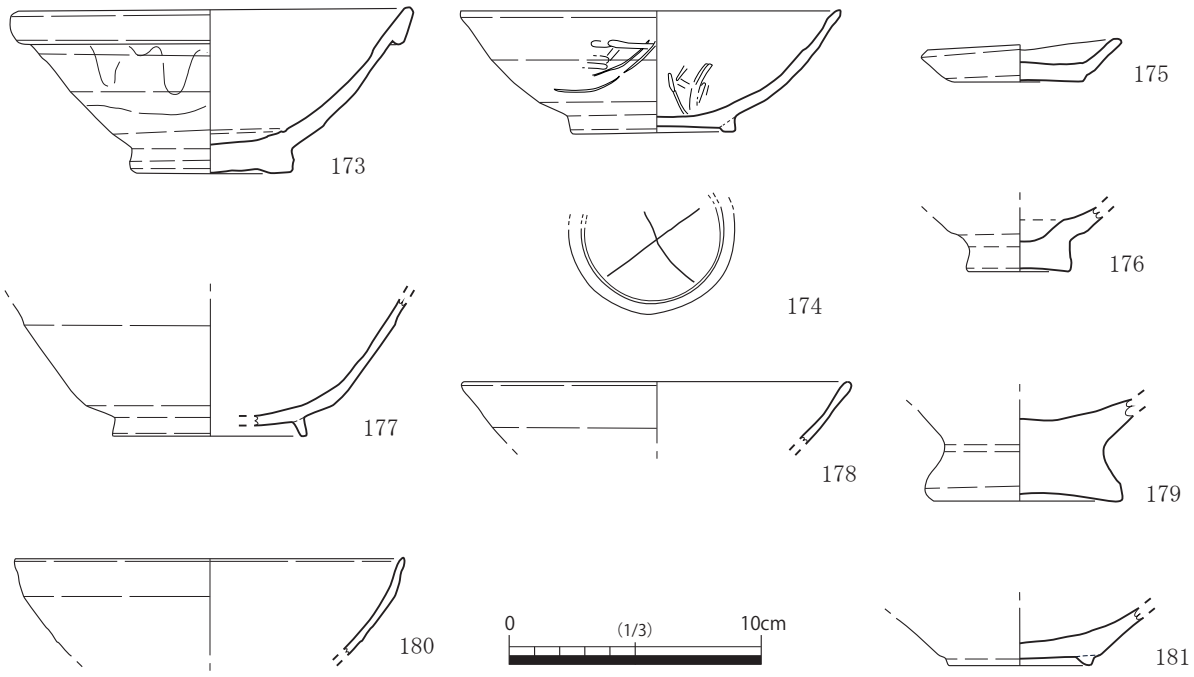
165：SP9　166：SP1　167：SP3　168～170・172：遺物包含層　171：表面採集

第 28 図　２区出土遺物実測図（３）

位は半球形を呈し、屈折して口縁部は内湾気味に立ち上がる。胴部最大径は 17.7cm を測り、外面に煤が付着する。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ後ナデ調整である。163 は土師器壺。体部から屈折し、長い口縁部がやや外湾気味にのびる。胎土は精良で、内外面とも横方向に丁寧にナデている。164 は土師器の椀で、器壁が薄く、底部は丸底で体部は内湾して立ち上がる。

165 は SP ９出土の大型壺。垂下口縁外面に幅広の工具で山形文を施し、口縁部内面にM字状の突帯を貼付する。県東部にみられる柳井田式と呼ばれる壺である。166 は SP １出土の在地系高杯。短い脚部に内湾気味に立ち上がる杯部が続き、口縁部は大きく外反する。９や 154 同様の蓋の固定用とみられる穿孔がある。内外面ともヘラミガキが施され、口縁部外面は丁寧なヨコナデ。内面に一部赤色顔料の痕跡がみられる。167 は SP ３出土の甕。器壁が薄く､口縁上端部をつまみ上げている。168 ～ 170 は SI １とその周辺包含層出土。168 は縄文土器深鉢で、胎土に多量の雲母を含み、外面にヘラ描きの沈線文を持つ。169 は甕の上胴部か。やや外湾気味に立ち上がり、上位に刻目突帯を持つ。突帯の上で器壁が薄くなり外反している。器面は条痕調整のようにみえ、縄文土器の可能性がある。170 は甕の口縁部。口縁部下に刻目突帯を持つ。171 は表面採集の須恵器杯蓋で７世紀代のものとみられる。口縁内面にかえりを持つ。172 は包含層出土の土師器壺。複合口縁の立ち上がり部とみられ、外面に斜格子文を施し、赤色顔料を塗布している。

173･174･177･178 は SK16 から出土した一括資料である。173 は白磁椀。灰白色の色調を呈し、



173・174・177・178：SK16　175：SP6　176・179・181：遺物包含層　180：SP5

第 29 図　２区出土遺物実測図（４）

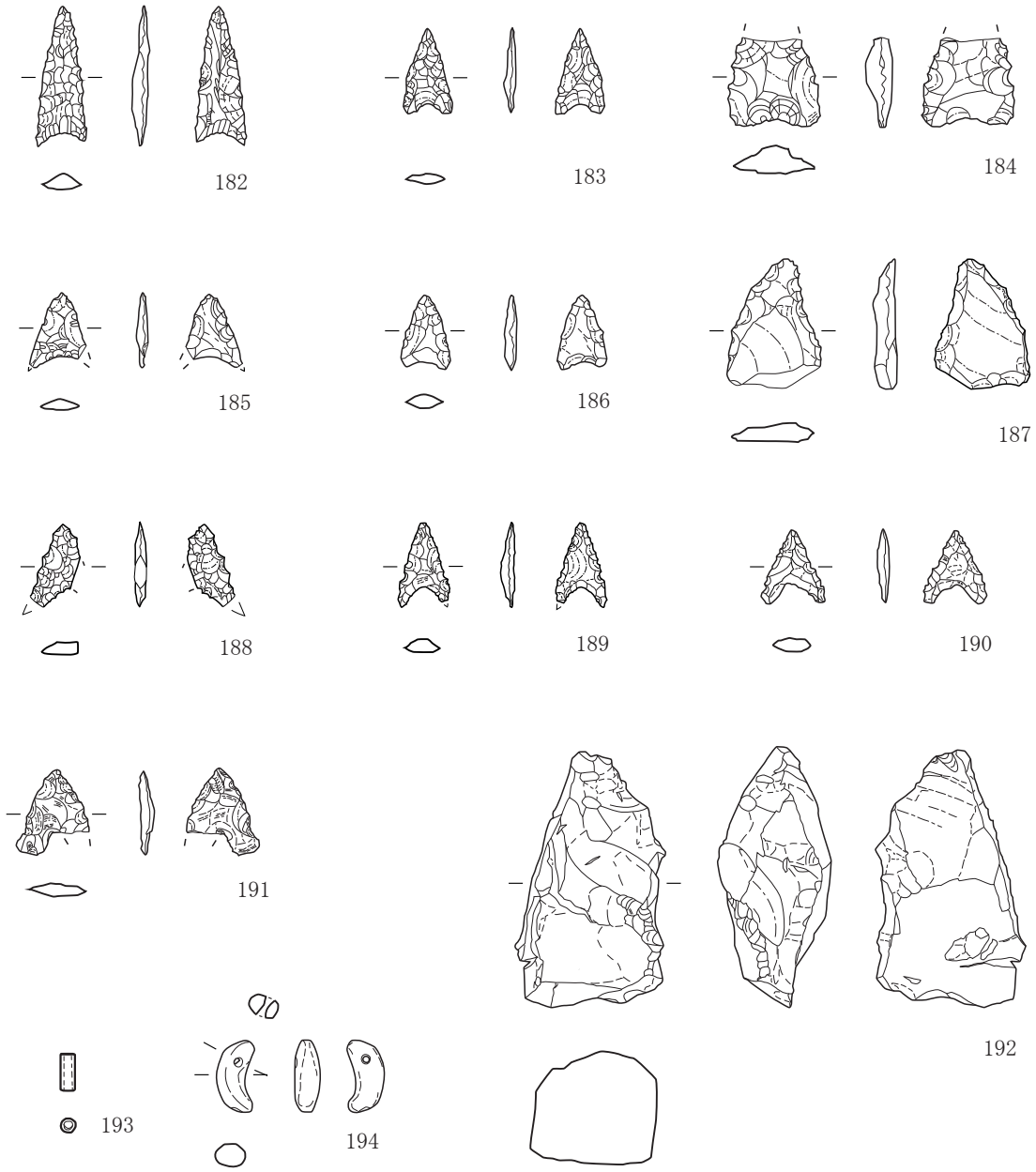
体部が緩やかに立ち上がり、玉縁状の口縁につながる。174 は土師器椀。低い貼り付け高台を持ち、体部は緩やかに立ち上がり、端部がわずかに外反する。底部外面には高台貼り付け後に施した「×」形のヘラ記号あり。177 は土師器椀。にぶい黄橙色の色調を呈す。貼り付け高台から体部は真っ直ぐ伸びる。178 は土師器椀。内外面ともに煤が付着している。175 は SP ６出土の土師器皿。褐色の色調を呈し、底部糸切り。器形に歪みあり。176 は包含層から出土した高台付皿。橙色の色調を呈する。底部回転ヘラ切り後ナデ。179 は包含層から出土した柱状高台付皿の底部。底部糸切り後ナデ。にぶい橙色の色調を呈す。180 は SP ５から出土した瓦器椀。灰色の色調を呈す。181 は包含層から出土した土師器椀の底部。貼り付け高台の形は三角形。黄橙色系の色調を呈する。

［２］石器・石製品・土製品（第 30・31 図　図版 34）

182 ～ 191 まで打製石鏃。187 を除き、全て凹基無茎式。182 ～ 188 は SI １とその周辺出土。182・183・188 は姫島産黒曜石製で、182 は他と比べて鋭角の二等辺三角形状を呈する。184・186・187 は安山岩製であり、187 は未製品またはスクレーパーか。185 は砂質片岩製。189 は SK28 出土、190 は SP10 出土で、共に安山岩製。191 は姫島産黒曜石製。

192 は SK ２出土の黒曜石石核。多孔で質はあまりよくない。灰黒色を呈し、姫島産や腰岳産のものではないとみられる。193 は SI １出土の管玉。１区出土の 124 同様、弥生時代中期のもので、124 より緑がかった色調を呈する。194 は土製勾玉。１区出土の 126 と法量が近似する。

195 は磨製太型蛤刃石斧で、器面の風化が著しく、加工面を全く残していない。安山岩製か。196 は SI １出土の砥石。使用面は上面と両側面の３面で、左側面には太い擦痕が見られる。安山岩または流紋岩製。



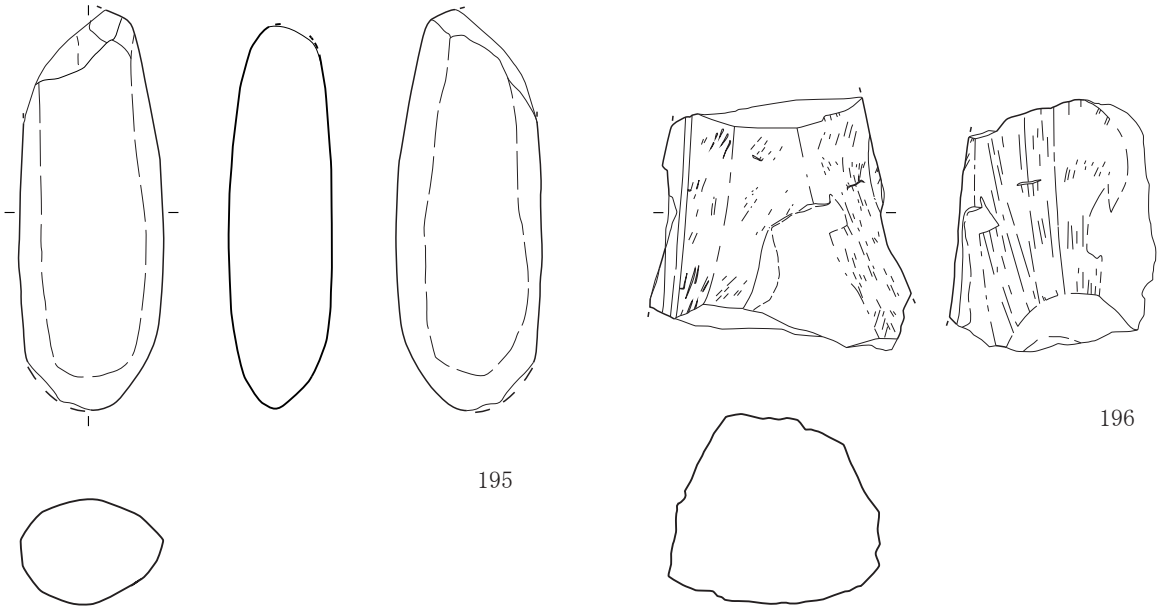
182 ～ 188・193：SI1　189：SK28　190：SP10　191・194：遺物包含層　192：SK2

0　(1/2)　5cm

第 30 図　２区出土遺物実測図（５）

第８表　２区出土土器・土製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm) 口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)	胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
132	26	30	SI1	弥生土器	壺	-	[2.6]	-	やや精良	良	にぶい赤褐色　5YR5/4 にぶい褐色　7.5YR5/3	ハケ目 ハケ目、ヘラミガキ、指頭圧痕	口縁端部羽状文その下に指頭圧痕
133	26	30	SI1 P4	弥生土器	甕	-	[1.0]	-	精良	良	にぶい赤褐色　5YR5/4 にぶい赤褐色　5YR5/3	ナデ、ハケ目、ミガキ ナデ、ハケ目	
134	26	30	SI1	弥生土器	甕	-	[2.1]	-	精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい赤褐色　5YR5/4	ハケ目 ナデ、ハケ目	



195：遺構面直上　196：SI1

0　(1/3)　10cm

第 31 図　２区出土遺物実測図（６）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm) 口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)	胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
135	26	30	SI1	弥生土器	鉢	-	[3.2]	-	やや精良	良	にぶい赤褐色　5YR5/4 にぶい褐色　7.5YR5/4	ハケ目、ヘラミガキ ヨコナデ、連続指頭圧痕	内面にスス付着
136	26	30	SI1	弥生土器	甕	-	[2.3]	-	やや精良	やや良	にぶい橙色　7.5YR7/3 にぶい褐色　7.5YR6/3	ハケ目後ミガキ ハケ目	口縁内面赤色顔料
137	26	30	SI1	弥生土器	甕	-	[2.2]	-	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/3 灰褐色　7.5YR6/2	ハケ目、ミガキ ハケ目	刻目、刻目突帯
138	26	30	SI1	弥生土器	高杯	-	[2.3]	-	やや精良	良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい橙色　7.5YR7/3	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ	外面にスス付着
139	26	30	SI1 P14	弥生土器	甕	(27.0)	[12.9]	-	やや粗	不良	橙色　7.5YR6/6 にぶい黄橙色　10YR7/4	ナデ、口縁部ハケ目後ナデ 縦方向のハケ目後ミガキ	外面一部に黒斑、刻目
140	26	30	SI1	弥生土器	甕	-	[2.6]	6.7	やや精良	やや良	黒褐色　10YR3/2 にぶい赤褐色　2.5YR4/3	ハケ目、ヘラケズリ？ ハケ目	底部上げ底
141	26	30	SI1	弥生土器	甕	-	[3.9]	(6.2)	やや精良	やや良	灰褐色　5YR5/2 褐灰色　5YR5/1	調整不明後指オサエ 調整不明後ナデ	
142	26	30	SI1 P14	弥生土器	壺	-	[10.3]	6.8	粗	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	ハケ目後ナデ、指オサエ ハケ目後ミガキ	弥生中期、外面ほぼ摩滅
143	26	30	SK4	縄文土器	浅鉢	-	[3.2]	-	やや精良	やや良	暗褐色　10YR3/4 暗褐色　10YR3/4	ミガキ？ ミガキ	黒色磨研土器（方形浅鉢の可能性）、内面沈線１条
144	26	30	SK9	弥生土器	甕	-	残存のみ [4.7]	7.1	精良	不良	黒色　5YR1.7/1 にぶい橙色　5YR6/4	ハケ目、ヘラミガキ、指頭圧痕 ナデ、ヘラミガキ、ハケ目	全体的に磨かれ 丁寧なつくり
145	26	30	SK7	弥生土器	甕	-	3.8	(5.8)	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい褐色　7.5YR5/3	ナデ、指オサエ ナデ後ヘラミガキ	外面黒斑
146	26	31	SK9	弥生土器	壺	-	[9.2]	(12.2)	やや精良	不良	黒色　5YR1.7/1 にぶい橙色　7.5YR7/4	ヘラケズリ、ハケ目 ナデ、ハケ目、ヘラミガキ？、指頭痕	

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調（内） （外）	主な調整（内） （外）	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
147	26	30	SK26	弥生土器	甕	-	[5.9]	-	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 黒褐色　2.5Y3/2	ミガキ、上端ナデ 不明	鋭いヘラ状工具による沈線 10 条
148	26	30	SK26	弥生土器	甕	-	[5.1]	-	やや粗	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 にぶい黄橙色　10YR6/3	ミガキ ハケ目、沈線以上ハケ目後ナデ	沈線・刺突は貝殻によるものか？
149	26	31	SK26	弥生土器	甕	(16.4)	[11.6]	-	やや精良	良	灰褐色　5YR5/2 にぶい赤褐色　2.5YR5/3	ヘラケズリ、ヘラミガキ、指オサエ ナデ、ハケ目、ヘラミガキ、指オサエ	
150	26	30	SK26	弥生土器	甕	-	[3.3]	-	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 褐色　7.5YR4/3	ヨコナデ、ミガキか？ ヨコナデ、ナデ	
151	26	30	SK20	弥生土器	甕	-	[1.9]	-	やや精良	不良	明褐色　7.5YR5/8 にぶい黄橙色　10YR6/4	口縁内面一部ヨコナデ、他不明 不明	口唇部上端にヘラ状工具による刻目
152	27	31	SK26	弥生土器	甕	(21.4)	[7.4]	-	精良	やや良	にぶい橙色　7.5YR7/3 灰褐色　7.5YR6/2	ヘラケズリ、指オサエ ハケ目、ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	内外面に黒斑
153	27	31	SK13	弥生土器	壺	(20.8)	[1.7]	-	やや精良	やや良	にぶい黄褐色　10YR4/3 黄褐色　10YR5/6	端部付近ヨコナデ、他不明 ヨコナデ	赤色顔料塗布痕 口縁上部斜格子文 口唇部山形文
154	27	31	SK17	弥生土器	高杯	(16.3)	[17.8]	-	やや粗	良	にぶい赤褐色　5YR5/4 にぶい橙色　5YR6/4	杯：ナデ後ミガキ 脚：工具のナデ 口縁：ナデ後ミガキ	口縁部対角線上２ヶ所に穿孔２個ずつ
155	27	31	SK27	弥生土器	壺	(20.4)	[4.6]	-	やや粗	やや良	明黄褐色　10YR6/6 黒色　2.5Y2/1	ミガキ、上端部ヨコナデ ヨコナデ	外面黒斑か？、上面にヘラ描き斜格子文？
156	27	31	SK27	弥生土器	高杯	(18.8)	[4.0]	-	精良	良	明赤褐色　2.5YR5/6 にぶい赤褐色　2.5YR4/3	指ナデ、ヘラナデ、指オサエ ナデ、ナデ後ハケ目	
157	27	31	SK17	弥生土器	高杯	-	[3.2]	(12.3)	やや粗	やや良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい黄橙色　10YR6/4	ナデ ハケ目後ナデ	弥生中期
158	27	31	SK27	弥生土器	壺	-	[6.1]	-	やや粗	不良	にぶい褐色　7.5YR6/3 にぶい褐色　7.5YR5/4	ハケ目？後ナデ 器面剥落のため不明	雲母、胴部外面にヘラ状工具による沈線５条
159	27	31	SK28	弥生土器	甕	-	[7.7]	-	やや粗	やや良	にぶい褐色　7.5YR5/4 にぶい橙色　7.5YR6/4	ハケ目後ミガキ ハケ目後ナデ	刺突文
160	27	31	SK28	縄文土器	浅鉢	-	[3.7]	-	やや粗	不良	灰黄色　2.5Y6/2 灰黄褐色　10YR5/2	ミガキ？ 条痕？	内外面とも口縁直下に沈線１条
161	27	31	SK28	弥生土器	甕	-	[4.7]	-	やや粗	やや良	灰黄褐色　10YR6/2 にぶい黄橙色　10YR6/3	ナデ、ミガキ ハケ目、沈線６条、刺突文	口唇部沈線１条に縦方向の刻目状沈線
162	27	32	SK28	土師器	甕	(15.2)	[12.2]	-	やや粗	やや良	橙色　7.5YR7/6 橙色　7.5YR6/8	ケズリ後ナデ ハケ目後ミガキ	外面にスス付着
163	27	32	SK28	土師器	壺	(19.8)	[8.5]	-	やや精良	良	にぶい橙色　5YR6/4 にぶい橙色　5YR6/4	ハケ目、ナデ ヘラケズリ、ヘラミガキ	
164	27	31	SK28	土師器	椀	(13.7)	4.5	-	やや精良	やや良	にぶい橙色　7.5YR7/4 橙色　7.5YR7/6	横ナデ、指オサエ 横ナデ、指オサエ	器面剥落、内面にミガキ？
165	28	32	SP9	弥生土器	壺	(36.6)	[4.6]	-	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/3 にぶい橙色　7.5YR7/4	ヨコナデ ナデ、ヨコナデ、粗い山形文	内面にＭ字状の突帯、黒斑あり
166	28	32	SP1	弥生土器	高杯	14.5	11.8	(脚) 6.8	やや精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 にぶい赤褐色　5YR5/4	ハケ目後ミガキ ハケ目後ミガキ	口縁部対角線上２ヶ所に穿孔２個ずつ
167	28	32	SP3	弥生土器	甕	(21.5)	[4.7]	-	やや精良	やや良	にぶい黄橙色　10YR6/3 黒褐色　2.5Y3/1	ミガキ？ 口縁部ヨコナデ、以下不明	跳ね上げ口縁
168	28	32	遺物包含層	縄文土器	深鉢	-	[4.5]	-	やや粗	やや良	暗褐色　7.5YR3/4 赤褐色　5YR4/8	調整不明 調整不明	縄文土器深鉢頸部、外面ヘラ描き沈線による施文
169	28	32	遺物包含層	弥生土器	甕	-	[9.5]	-	やや精良	良	黒褐色　10YR3/2 暗赤褐色　2.5YR3/4	ハケ目、ミガキ？、指頭圧痕 ハケ目、連続指頭圧痕	刻目（刺突文） 粘土帯接合痕明瞭
170	28	32	遺物包含層	弥生土器	甕	-	[3.2]	-	やや精良	やや良	にぶい橙色　7.5YR7/4 暗赤褐色　5YR3/4	ヨコナデ、ハケ目後ヘラミガキ ハケ目、ナデ	口縁近くに刻目
171	28	32	表面採集	須恵器	杯蓋	-	[2.0]	-	精良	良	灰白色　N7/0 灰白色　N7/0	回転ナデ 回転ナデ	

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調（内） （外）	主な調整（内） （外）	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
172	28	32	遺物 包含層	土師器	壺	-	[2.1]	-	精良	良	にぶい橙色　7.5YR6/4 灰褐色　7.5YR5/2	ナデ、ハケ目 ナデ、指オサエ	外面に赤色顔料塗布、斜格子文
173	29	33	SK16	白磁	椀	15.5	6.5	6.0	精良	良	灰白色　7.5Y7/2 灰白色　7.5Y7/2	回転ナデ後施釉 回転ナデ後上部施釉	口縁部歪み 施釉無部(灰白色7.5Y7/1)
174	29	33	SK16	土師器	椀	(15.0)	4.6	6.3	精良	良	灰白色　10YR8/2 浅黄橙色　7.5YR8/4	回転ナデ後ミガキ 回転ナデ後ミガキ	底部高台裏にヘラ記号？ 十字あり
175	29	33	SP6	土師器	皿	7.6	1.7	5.0	精良	良	褐色　7.5YR4/3 褐灰色　7.5YR6/1	回転ナデ、回転ヘラ ナデ、指オサエ 回転ナデ	底部糸切り 器形の歪み
176	29	33	遺物 包含層	土師器	高台付皿	-	[2.5]	4.0	精良	良	橙色　2.5YR6/8 橙色　2.5YR6/8	ハケ目、ナデ ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ
177	29	33	SK16	土師器	椀	-	[5.4]	(7.6)	精良	良	にぶい黄橙色　10YR7/2 にぶい黄橙色　10YR7/3	回転ナデ、ミガキ 回転ナデ	貼り付け高台
178	29	33	SK16	土師器	椀	(15.2)	[2.5]	-	精良	やや良	灰褐色　7.5YR5/2 灰褐色　7.5YR6/2	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	内外面にスス付着
179	29	33	遺物 包含層	土師器	柱状高台付皿	-	[4.0]	7.3	精良	良	にぶい橙色　7.5YR7/4 橙色　5YR6/6	ナデ ナデ	底部糸切り後ナデ
180	29	33	SP5	瓦器	椀	(15.4)	[3.8]	-	精良	やや良	灰色　N4/0 灰色　N4/0	ミガキ？ ミガキ？	
181	29	33	遺物 包含層	土師器	椀	-	[2.3]	(5.6)	精良	良	にぶい黄橙色　10YR7/2 浅黄橙色　10YR8/3	ナデ ナデ	底部切り離し不明 貼り付け高台
194	30	34	遺物 包含層	土製品	勾玉	長さ 2.0	幅 0.8	厚さ 0.6	精良	良	にぶい赤褐色　5YR5/4	穿孔、器面摩滅	重さ 0.8g

第９表　２区出土石器・石製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考
					長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
182	30	34	SI1	打製石鏃	3.9	1.3	0.4	1.8	黒曜石	凹基無茎式、姫島産石材
183	30	34	SI1	打製石鏃	2.4	1.4	0.3	0.8	黒曜石	凹基無茎式、姫島産石材
184	30	34	SI1	打製石鏃	最長 2.5	最幅 2.5	最厚 0.7	4.2	安山岩？	凹基無茎式
185	30	34	SI1 P1	打製石鏃	最長 2.1	最幅 1.4	最厚 0.3	0.8	砂質片岩	凹基無茎式
186	30	34	SI1	打製石鏃	2.1	1.4	0.3	0.9	安山岩？	凹基無茎式
187	30	34	SI1 P3	打製石鏃	最長 3.6	最幅 2.7	最厚 0.5	5.6	安山岩？	未製品
188	30	34	SI1	打製石鏃	最長 2.3	最幅 1.0	最厚 0.3	0.8	黒曜石	凹基無茎式、姫島産石材
189	30	34	SK28	打製石鏃	2.3	最長 1.4	0.3	0.7	安山岩？	凹基無茎式
190	30	34	SP10	打製石鏃	2.1	1.8	0.3	0.7	安山岩？	
191	30	34	遺物包含層	打製石鏃	2.3	[2.2]	0.3	1.3	黒曜石	姫島産石材
192	30	34	SK2	石核	7.2	4.2	3.2	82.9	黒曜石	表面風化、打撃点不明瞭、灰黒色（含気泡） 全面に剥離の痕跡？
193	30	34	SI1	管玉	最大径 0.4	孔径 0.3	器高 1.0	0.2	石材不明	弥生中期 内外面：暗緑灰色　7.5GY4/1
195	31	34	遺構面 直上	磨製石斧	15.8	5.7	4.0	480	安山岩？	2 ～ 5mm の輝石を含む 全面風化
196	31	34	SI1	砥石	最長 10.0	最幅 10.3	最厚 7.5	690	安山岩もしくは流紋岩	左側面は他三面より太い擦痕

Ⅳ　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

見用遺跡（山口県熊毛郡田布施町麻郷奥所在）では、弥生時代の竪穴建物や平安時代後半～鎌倉時代の集落跡が検出されている。本分析調査では、遺構出土炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施し、年代観や用材に関する情報を得る。

2　試料

試料は、2 区 SI 1 より出土した炭化材 32（①）、炭化材 B（②）、炭化材 C（③）、炭化材 D（④）の 4 点と、1 区 SE1 の中層（⑤）、下層（⑥）より出土した炭化材 2 点の、計 6 点である。

3　分析方法

（1）樹種同定

炭化材試料は、全体を観察した後適量を切り出し、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作成し、電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

（2）放射性炭素年代測定

適量を切り出した炭化材の周囲を削って付着物を除去し、分析用試料とする。このとき削り取った残渣で炭化材同定を実施する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX- Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。δ ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試

料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。

測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.3（Bronk,2009）、較正曲線はIntcal13（Reimer et al.,2013）である。

4　結果

（1）樹種同定

結果を第10表に示す。1点(⑤)が針葉樹のマツ属複維管束亜属、5点が広葉樹のクリに同定された。

2区SI 1の炭化材32(①)は半割で、約11年輪あり、樹種はクリである。2区SI 1の炭化材B(②)は、ミカン割りで約13年輪あり、樹種はクリである。2区SI 1の炭化材C（③）はミカン割りで約10年輪あり、樹種はクリである。2区SI 1の炭化材D（④）はミカン割りで約6年輪あり、樹種はクリである。1区SE1の中層（⑤）は細片で樹種はマツ属複維管束亜属である。1区SE1の下層（⑥）は細片で樹種はクリである。以下、解剖学的特徴を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織をみると、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

（2）放射性炭素年代測定

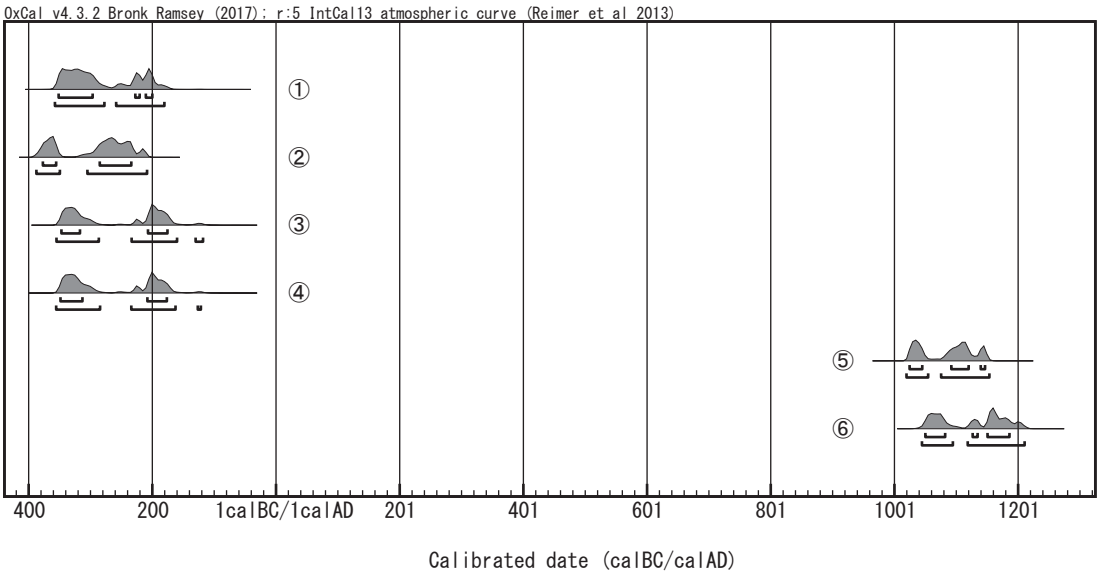
結果を第10表に示す。SI 1の4点は外側の約3年輪分を分析用試料として用いる。SE1の2点は細片のため、適量を割って分析に用いる。保存状態が良く、定法で処理を行い、年代測定に必要な炭素量が回収できた。同位体補正を行った測定値は、2区SI 1の炭化材32（①）が2185±20BP、2区SI 1の炭化材B（②）が2245±20BP、2区SI 1の炭化材C（③）が2165±20BP、2区SI 1の炭化材D（④）が2165±20BP、1区SE1の中層（⑤）が960±20BP、1区SE1の下層（⑥）が895±206BPである。

暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、その後訂正された半減期（ Cの半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13（Reimer et al.,2013）を用いる。2σの値は、2区SI 1の炭化材32（①）がcalBC358～181、2区SI 1の炭化材B（②）がcalBC388～209、2区SI 1の炭化材C（③）がcalBC356

第 10 表　放射性炭素年代測定・樹種同定結果

試料名	樹種	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ 13C (‰)	暦年較正年代					Code No.	
						年代値			確率 %		
① 2 区 SI1 炭化材 32	クリ	AAA (1M)	2185 ± 20 (2185 ± 20)	-26.19 ± 0.42	σ	cal BC 352 - cal BC 297	2301 - 2246 calBP		53.0	YU-10735	pal-12415
						cal BC 228 - cal BC 221	2177 - 2170 calBP		5.6		
						cal BC 211 - cal BC 201	2160 - 2150 calBP		9.6		
					2 σ	cal BC 358 - cal BC 278	2307 - 2227 calBP		60.3		
						cal BC 259 - cal BC 181	2208 - 2130 calBP		35.1		
② 2 区 SI1 炭化材 B	クリ	AAA (1M)	2245 ± 20 (2246 ± 20)	-27.83 ± 0.37	σ	cal BC 378 - cal BC 356	2327 - 2305 calBP		21.4	YU-10736	pal-12416
						cal BC 286 - cal BC 235	2235 - 2184 calBP		46.8		
					2 σ	cal BC 388 - cal BC 350	2337 - 2299 calBP		29.6		
						cal BC 306 - cal BC 209	2255 - 2158 calBP		65.8		
③ 2 区 SI1 炭化材 C	クリ	AAA (1M)	2165 ± 20 (2163 ± 20)	-26.15 ± 0.34	σ	cal BC 348 - cal BC 318	2297 - 2267 calBP		33.6	YU-10737	pal-12417
						cal BC 208 - cal BC 176	2157 - 2125 calBP		34.6		
					2 σ	cal BC 356 - cal BC 287	2305 - 2236 calBP		47.6		
						cal BC 234 - cal BC 161	2183 - 2110 calBP		46.5		
						cal BC 131 - cal BC 119	2080 - 2068 calBP		1.3		
④ 2 区 SI1 炭化材 D	クリ	AAA (1M)	2165 ± 20 (2166 ± 20)	-27.71 ± 0.34	σ	cal BC 349 - cal BC 314	2298 - 2263 calBP		37.7	YU-10738	pal-12418
						cal BC 209 - cal BC 177	2158 - 2126 calBP		30.5		
					2 σ	cal BC 356 - cal BC 285	2305 - 2234 calBP		51.5		
						cal BC 235 - cal BC 163	2184 - 2112 calBP		43.5		
						cal BC 127 - cal BC 122	2076 - 2071 calBP		0.4		
⑤ 1 区 SE1 中層	マツ属 複維管束亜属	AAA (1M)	960 ± 20 (962 ± 20)	-27.04 ± 0.26	σ	cal AD 1025 - cal AD 1046	925 - 905 calBP		27.6	YU-10739	pal-12419
						cal AD 1093 - cal AD 1121	858 - 830 calBP		33.4		
						cal AD 1140 - cal AD 1147	810 - 803 calBP		7.2		
					2 σ	cal AD 1020 - cal AD 1055	930 - 895 calBP		33.9		
						cal AD 1076 - cal AD 1154	874 - 796 calBP		61.5		
⑥ 1 区 SE1 下層	クリ	AAA (1M)	895 ± 20 (893 ± 20)	-26.44 ± 0.30	σ	cal AD 1051 - cal AD 1083	900 - 868 calBP		30.5	YU-10740	pal-12420
						cal AD 1127 - cal AD 1135	823 - 815 calBP		4.9		
						cal AD 1151 - cal AD 1187	799 - 764 calBP		32.7		
					2 σ	cal AD 1045 - cal AD 1095	905 - 855 calBP		38.2		
						cal AD 1119 - cal AD 1211	831 - 739 calBP		57.2		

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2)BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68.2% が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。
5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2 を使用
6) 暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
7) 較正データーセットは、Intcal13 を使用。
8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
9) 統計的に真の値が入る確率は、σが 68.2%、2 σが 95.4% である



第 32 図　暦年較正結果

～ 119、2 区 SI 1 の炭化材 D（④）が calBC356 ～ 122、1 区 SE1 の中層（⑤）は calAD1020 ～ 1154、1 区 SE1 の下層（⑥）は calAD1045 ～ 1211 である。

5　考察

2 区 SI 1 より出土した炭化材 4 点は、いずれもクリに同定され、紀元前 3 ～ 4 世紀の年代観を示した。

クリは高木になる二次林要素の落葉広葉樹であり、重硬で水湿に強く、建築材として良材である。また、種実が食用になり、萌芽による更新が容易なため、人里近くの里山林を構成する主要な樹種の一つである。このことから、当時の遺跡周辺にクリなどの二次林からなる落葉広葉樹林（いわゆる里山林）が存在し、そこからクリ材を得ていた可能性がある。伊東・山田編（2012）の出土木製品用材データベースをみると、県内では弥生時代において炭化したクリの竪穴建物構築材が出土した例はみあたらないが、広島県では寺山遺跡など複数の事例がある。

一方、1 区 SE1 の下層より出土した炭化材はクリ、中層より出土した炭化材はマツ属複維管束亜属に同定され、いずれも 11 ～ 12 世紀頃の年代観を示した。

マツ属複維管束亜属は高木になる常緑針葉樹であり、本地域にはクロマツとアカマツの 2 種と、両種の自然雑種が分布する。クロマツは、日当たりのよい海岸の砂浜や岩上などに生育する。アカマツは、山麓から高所（ブナ帯以下）の尾根筋や岩山などの乾燥した痩せ地に生育し、植生破壊が進んだ場所に先駆的に侵入して二次林を構成することから、人里近くに多い樹木である。当時の遺跡周辺の二次林より、燃料材等として利用したものと考えられる。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

林　昭三 ,1991, 日本産木材顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

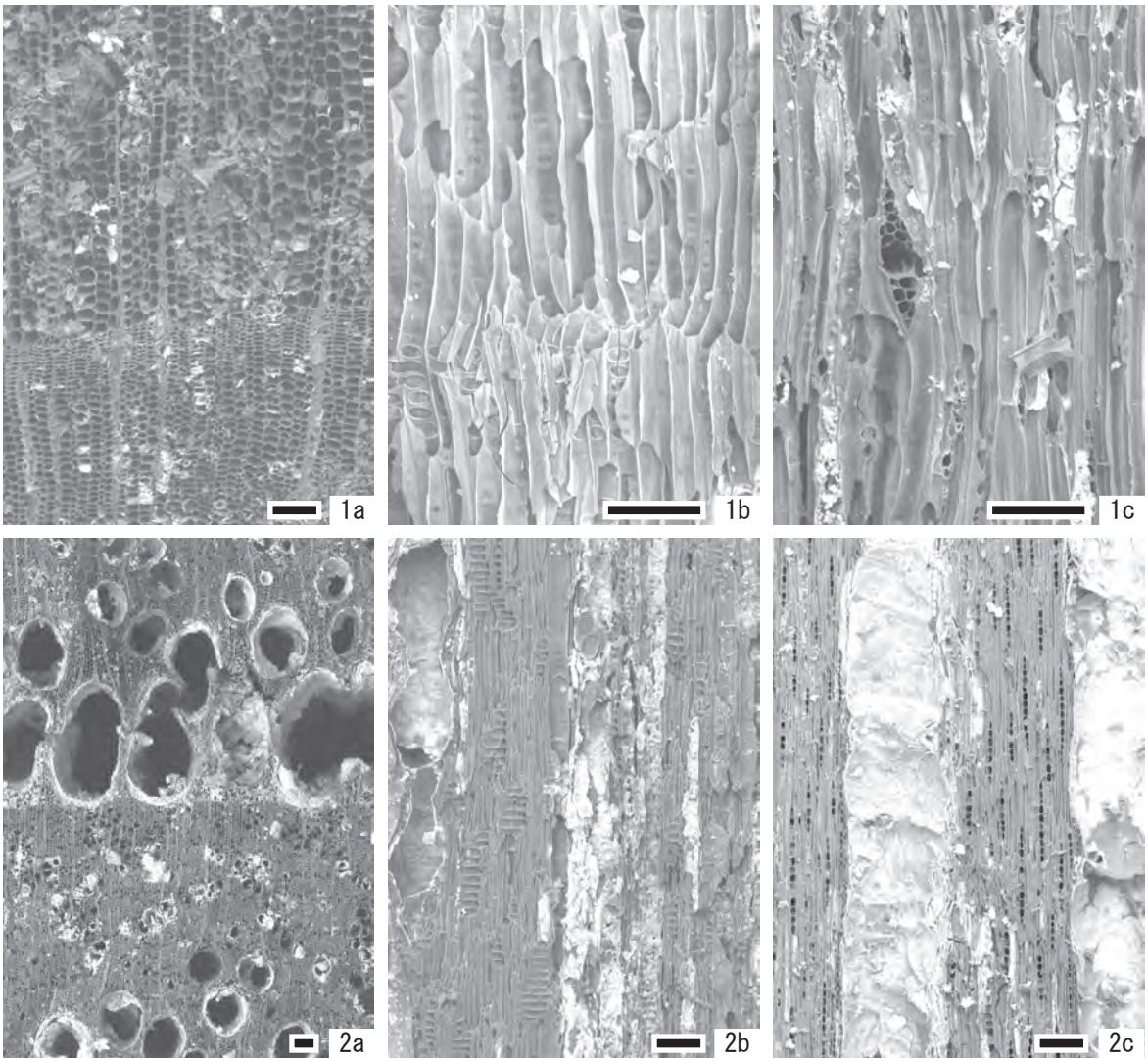
伊東隆夫・山田昌久（編）,2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.
Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

炭化材



1. マツ属複維管束亜属（⑤ 1区SE1中層）
2. クリ（② 2区SI1 炭化材B）

a:木口　b:柾目　c:板目
スケールは100μm

第 33 図　炭化材顕微鏡写真

Ⅴ　総　括

見用遺跡では、4,107㎡の調査を実施した。調査区は里道をはさんで南北に１・２区に分かれ、縄文時代後期から弥生時代中期、古墳時代から平安時代、中世に至る多くの遺構・遺物を検出した。ここでは、それらの調査成果をまとめ、得られた成果について述べてみたい。

遺構は弥生時代の竪穴建物、土坑、柱穴、古墳時代から中世以降の掘立柱建物、柵列、井戸、溝、土坑、柱穴が検出された。

遺物は縄文時代後期の土器･石器類から、弥生土器･石器、古墳時代から平安時代の土師器、須恵器、輸入陶器、中世の土師器、瓦器、輸入陶磁器、鉄製品など数多く出土している。

なかでも、弥生時代中期の竪穴建物１棟と土坑が検出されたことにより、本遺跡が弥生時代中期の集落の一部であることが明らかとなった。また、平安時代末～鎌倉時代前半を中心とする掘立柱建物 15 棟、柵列６条、井戸１基が検出されている。完形の白磁椀を出土した土坑や、井戸からは多量の土師器皿や杯・椀、青磁椀、瓦器の椀・皿、鉄刀子や鉄滓などが出土し、儀礼に伴う一括廃棄的な遺構と推定される。

ここでは、弥生時代の集落と、平安時代末～鎌倉時代前半の集落について概観してみたい。

弥生時代の竪穴建物

弥生時代の遺構は、１区で土坑１基、２区で竪穴建物１棟、土坑１基、柱穴１個を検出し、遺物は遺構・包含層からの出土が中心である。竪穴建物、土坑、柱穴は出土遺物からいずれも弥生時代中期前半で、それらの遺構・遺物から、遺跡が集落域であることがわかった。

竪穴建物は推定径 7.4 ｍを測る楕円形の大型竪穴建物で、床面の南側に放射状の炭化材の分布がみられることから、焼失家屋であったことが推定される。主柱穴は５本検出され、竪穴建物の全容は調査区外へ到るため明らかではないが、８本主柱穴の竪穴建物と想定される。中央部には炉跡が検出されず、調査区外に位置していた可能性もある。やや大型の竪穴建物のため、居住を目的としない建物であった可能性もある。

竪穴建物出土の炭化材４点については、放射性炭素年代測定、樹種同定分析を行った（詳細はⅣ章参照）。放射性炭素年代測定の結果、紀元前４から３世紀という数値が得られた。竪穴建物は弥生時代中期に相当するという分析結果で、出土遺物から推定する遺構の想定年代よりもやや古めの年代を示しているが、伐採年代であることを考慮すると、おおむね一致する結果となった。樹種同定で、４点はクリに同定され、竪穴建物の建築材としては一般的なものと考えられる。

出土した弥生土器については、おおむね中期前半のものが主体となり、後期の土器がわずかにみられる。また、竪穴建物、土坑や柱穴から出土した土器にはいわゆる須玖式、北部九州の系譜となる土器が一定量みられることから、瀬戸内海地域の交流ルートが想定される。

また、弥生時代中期前半の集落域については、中・近世の水田開発による削平の影響で残されていない可能性もあるが、さらに遺跡周辺に居住遺構が展開しているものと想定される。

同時代の８本主柱穴の焼失竪穴建物と推定される大型のものでは、広島県東広島市の西本６号遺跡のSI10a・bなどが知られている（広島県埋蔵文化財調査センター 1997）。283点の炭化材の樹種同定を行っており、クリ128点、ハリギリ33点、ノグルミ33点など、クリが全体の45％を占めており、同時期の主要建築材であったと想定される。

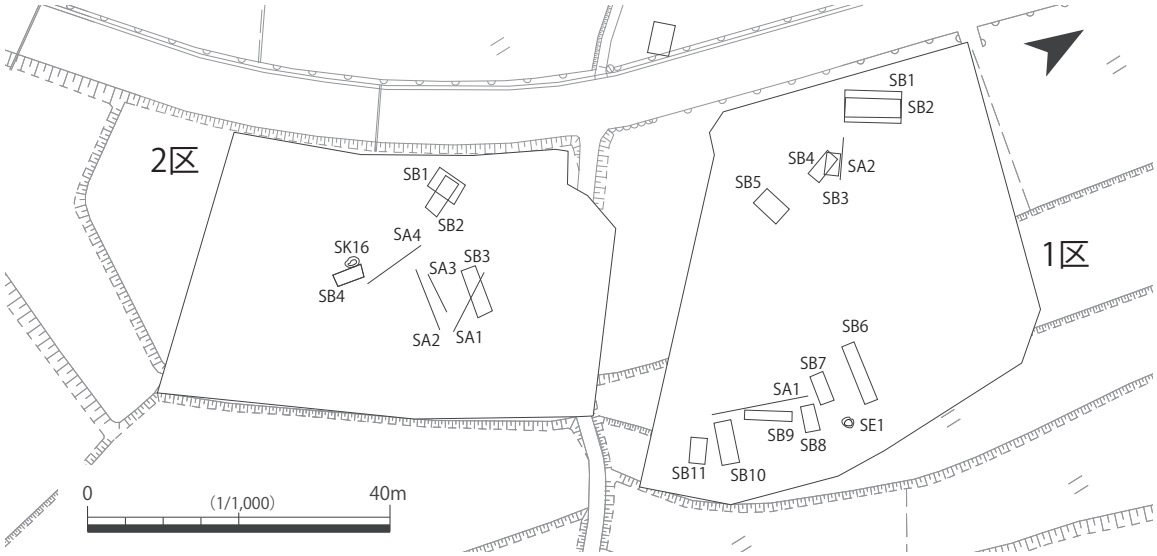
平安時代末～鎌倉時代前半の集落

１・２区あわせて、15棟の掘立柱建物、柵列６条、溝８条、井戸１基、土坑54基、柱穴約834個が調査された。平安時代後半から鎌倉時代の遺物が中心となり、室町時代の遺物は少なく、遺構はいずれも平安時代後期～鎌倉時代前半を中心とすると考えられる。

掘立柱建物、柵列の軸向きや出土遺物から２時期以上に分けられ、重複もみられることから建て替えつつ存続していたことが推定される。一例を挙げれば、１区SB １～３とSB ４・５は近接して存在するが、両者の軸向きは大きく異なり、時期が異なるものと想定される。２区の掘立柱建物、柵列の軸向きについても同様のことが言える。

２区中央部では、SK17から白磁椀と土師器椀が出土している。白磁椀は完形で、正位に土坑上面の中央部から出土しており、底部に埋納されたような出土状況ではないが、完形のため、何らかの埋納行為の一端と想定される。

１区下段中央部の東端で検出された井戸SE1（以下SE1と省略）からは、多くの土器が出土した。230個体以上の土師器皿、30個体以上の杯、椀や青磁椀、瓦器椀・皿、鉄刀子や鉄滓などは、井戸上層に意図的に投棄されたと考えられる。それらの土師器と、同安窯産の青磁椀、瓦器などの年代観から、井戸の埋められた時期は平安時代末～鎌倉時代前半、12世紀後半～13世紀前半と考えられる。見用遺跡の井戸から出土した炭化材２点については、放射性炭素年代測定、樹種同定分析を行った（詳細はⅣ章参照）。その結果、^{14}C年代は、11～12世紀という数値が得られた。出土遺物から推定する遺構の想定年代よりもやや古めの年代を示すが、伐採年代を考慮すると、おおむね一致する。



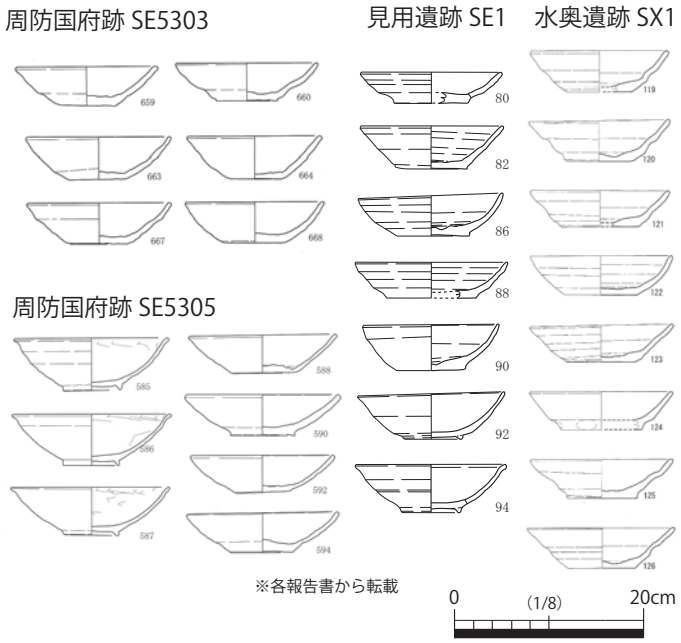
第34図　見用遺跡の中世遺構配置図

樹種同定では、マツ属とクリという結果が得られた。マツ属は燃料材の可能性も考えられる。

SE1 の出土遺物と、周辺遺跡の様相も踏まえて、年代観について考えてみたい。近隣の同時代の遺跡としては水奥遺跡（山口県埋蔵文化財センター 2014・井上 2015）が知られる。水奥遺跡は田布施町大字波野に所在し、田布施川の対岸、上流約３km に位置し、848㎡が調査されている。遺跡は標高約 40m、谷に面した小丘陵上に立地し、掘立柱建物２棟、土坑６基、溝３条、性格不明遺構７基、柱穴約 70 個が調査されている。性格不明遺構としている、長軸約 3.3m、短軸約 1.2m の長楕円形の SX 1（以下 SX1 と省略）から、土師器杯や皿が多量に投棄された状況で出土している。その他、鉄製刀子なども出土していることから、何らかの儀礼行為後、一括廃棄された土坑と推定され、出土陶磁器の年代観から、おおよそ 12 世紀後半～ 13 世紀前半に比定される遺構とされている。また、埋土から採取した炭化物を AMS 分析して、暦年較正年代で 11 ～ 12 世紀の年代が得られている。SE1 との遺物組成の違いとしては、SE1 では龍泉窯系の青磁は出土しておらず、瓦質土器等も出土していないことから、SX1 と同様に 12 世紀後半～ 13 世紀前半に位置付けられるが、SX1 よりも古いものと考えておきたい。

両遺跡は約３km と近接しており、田布施川流域の遺跡として捉えられる。両者の土器の様相は土師器の法量などを比較しても近似している（第 35 図）。また、椀などは周防国府周辺からの搬入品と考えられるものも含まれるが、杯・皿には多量の金雲母が含まれた、作りの粗い在地産と考えられるものが多くみられる点なども共通する。

さらに、近年周防国府跡周辺では、11 ～ 14 世紀土器の編年研究（防府市教育委員会 2015 ほか）が進められており、それらの成果を踏まえ、SE1 との法量比較を試みたい。ここでは、特徴的な土師器の皿・杯・椀の法量について概観する。周防国府で 12 世紀後半に位置づけられる資料 SE5303・5305、田布施川流域の 12 世紀後半～ 13 世紀前半と推定される水奥遺跡 SX1 と、見用



		皿			杯			椀		
		口径	器高	底径	口径	器高	底径	口径	器高	底径
SE5303	平均	85.8	17.5	46.1	144.7	42.1	59.5	155.0	56.3	57.0
	中央値	84.0	17.5	46.0	146.0	42.5	60.0	157.0	57.5	58.8
	範囲	62.0	18.5	31.0	18.5	6.5	14.0	18.0	10.0	18.5
	最小	74.0	13.5	35.0	134.0	38.0	52.0	144.0	50.0	46.0
	最大	136.0	32.0	66.0	152.5	44.5	66.0	162.0	60.0	64.5
	個体数	35	35	35	11	11	11	4	4	4
SE5305		口径	器高	底径	口径	器高	底径	口径	器高	底径
	平均	80.5	16.5	41.8	151.4	40.5	63.3	163.8	48.7	61.2
	中央値	80.8	16.8	40.0	152.0	40.0	63.0	164.0	51.0	60.0
	範囲	8.0	6.5	14.0	15.0	4.0	10.0	13.0	15.0	11.0
	最小	76.0	12.5	38.0	143.0	39.0	59.0	159.0	40.0	57.0
	最大	84.0	19.0	52.0	158.0	43.0	69.0	172.0	55.0	68.0
	個体数	12	12	12	7	7	7	5	5	5
SE 1		口径	器高	底径	口径	器高	底径	口径	器高	底径
	平均	81.8	16.3	59.0	149.4	42.7	77.8	156.5	50.5	60.5
	中央値	81.0	16.0	58.0	151.0	44.3	75.5	156.5	50.5	60.5
	範囲	13.0	11.0	28.0	25.0	15.0	22.0	3.0	1.0	3.0
	最小	75.0	12.0	50.0	135.0	34.0	72.0	155.0	50.0	59.0
	最大	88.0	23.0	78.0	160.0	49.0	94.0	158.0	51.0	62.0
	個体数	65	65	65	10	10	10	2	2	2
SX1		口径	器高	底径	口径	器高	底径	口径	器高	底径
	平均	83.9	15.6	62.0	142.3	40.4	72.9	161.3	51.0	64.7
	中央値	84.0	16.0	62.0	145.0	40.5	73.0	162.0	51.0	64.0
	範囲	21.0	14.0	26.0	30.0	8.0	20.0	6.0	2.0	2.0
	最小	74.0	10.0	50.0	124.0	36.0	64.0	158.0	50.0	64.0
	最大	95.0	24.0	76.0	154.0	44.0	84.0	164.0	52.0	66.0
	個体数	105	105	105	16	16	16	3	3	3

第 35 図　見用遺跡と周防国府・水奥遺跡の出土土器比較図

遺跡 SE1 の３つを比較する。年代順としては、SE5303、SE5305、SE1、SX1 としておきたい。一番新しいと考える SX1 については、龍泉窯系の青磁や東播系須恵器、瓦質土器などが出土することから、12 世紀後半から 13 世紀代前半と推定している。

資料はいずれも報告書掲載のもので、口径・器高・底径の明確なものを利用した（第 35 図）。数量は、SE5303 の皿 35 点、杯 11 点、椀４点、合計 50 点、SE5305 の皿 12 点、杯７点、椀５点、合計 24 点、見用遺跡 SE1 の皿 65 点、杯 10 点、椀２点、合計 77 点、水奥遺跡 SX1 の皿 105 点、杯 16 点、椀３点、合計 124 点、総合計 275 点を使用した。

３遺跡４遺構の器種別の点数にもばらつきがあり、数量差もあるが、ここでは中央値を参考に、特徴的な点をみていきたい。皿の各法量の中央値では、SE5303 の口径 84.0㎜・器高 17.5㎜・底径 46.0㎜（以下、口・高・底と省略）、SE5305 の口 80.8㎜・高 16.8㎜・底 40.0㎜、SE1 の口 81.0㎜・高 16.0㎜・底 58.0㎜、SX1 の口 84.0㎜・高 16.0㎜・底 62.0㎜である。器高は小型化し、底径は大型化する。杯の中央値は、SE5303 の口 146.0㎜・高 42.5㎜・底 60.0㎜、SE5305 の口 152.0㎜・高 40.0㎜・底 63.0㎜、SE1 の口 151.0㎜・高 44.3㎜・底 75.5㎜、SX1 の口 145.0㎜・高 40.5㎜・底 73.0㎜で、底径については大型化する。椀の中央値は、SE5303 の口 157.0㎜・高 57.5㎜・底 58.8㎜、SE5305 の口 164.0㎜・高 51.0㎜・底 60.0㎜、SE1 の口 156.5㎜・高 50.5㎜・底 60.5㎜、SX1 の口 162.0㎜・高 51.0㎜・底 64.0㎜である。器高は小型化し、底径は大型化する。

いずれも数量が少なく、椀などは４遺跡で合計 14 点のため、資料の追加を行って詳細な編年を構築する必要があるが、現時点で皿の器高は小型化し、底径は大型化するなどといった傾向が明らかである。椀の口径については、SE5303 と SE1 が小型で、SE5305 と SX1 が大型でばらつきが認められる。これは、椀類は周防国府周辺で生産されたものが搬入された可能性があり、生産地（SE5303・5305）と消費地（SE1・SX1）との時間的なずれとして捉えられる可能性があり、今後も資料の増加を待って検討を加えていきたい。

周防国府周辺と水奥遺跡との法量比較や、土師器皿・杯・椀、同安窯系の青磁椀や瓦器椀・皿などの様相から、見用遺跡 SE1 出土土師器の年代は、12 世紀後半から 13 世紀初頭と推定される。儀礼に伴う一括廃棄などと想定されることから、田布施川流域の平安時代末～鎌倉時代前期の指標となりうる、良好な一括資料が得られたといえよう。

引用・参考文献

井上広之　2015 「周防東部における回転台土師器供膳具形態と底部切り離し法の変容」『陶塤』第 28 号　山口県埋蔵文化財センター

田布施町史編纂委員会　1990 『田布施町史』

奈良文化財研究所　2008 『日本各地・各時代の焼失竪穴建物跡』 本文・図版編　別冊データ編

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1997 『西本６号遺跡』 本文・図版編

防府市教育委員会　2015 『周防国府跡発掘調査報告４』

防府市教育委員会　2017 『周防国府跡発掘調査報告６』

防府市教育委員会　2019 『周防国府跡発掘調査報告８』

山口県　2000 『山口県史　資料編　考古１』

公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター・田布施町教育委員会　2014 『堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡・水奥遺跡・西河内遺跡・中屋Ｂ遺跡』

図　版

遺跡遠景（南東上空から）

図版２

遺跡遠景（北西上空から）

遺跡遠景（南上空から）

遺跡遠景（北東から）

調査区全景（東上空から）

図版４

調査区全景（東から）

１区全景（北から）

１区全景（東上空から）

１区掘立柱建物・柵列全景（東上空から）

図版６

１区 SK ６完掘（東から）

１区 SK ６土器出土状況（東から）

1 区 SK ６土層断面（南東から）

1 区 SK ８完掘（北西から）

1 区 SK22 完掘（西から）

1 区 SK13 土層断面（東から）

1 区 SK22 土器出土状況（南東から）

図版８

１区 SE1 上面土器出土状況（南東から）

１区 SE1 上面土器出土状況（西から）

１区 SE1 土層断面（上層・南東から）

１区 SE1 完掘（南東から）

1 区 SP16 土器出土状況（東から）

1 区 SP28 土器出土状況（北から）

1 区 SP26 土器出土状況（東から）

1 区 SP33 土器出土状況（東から）

西壁南側断面（東から）

北壁断面（南から）

西壁北側断面（東から）

南壁断面（北から）

図版 11

図版 12

1 区出土遺物（1）

1 区出土遺物（2）

図版 14

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

1 区出土遺物（3）

1区出土遺物（4）

図版 16

79

80

82

84

85

83

88

87

86

89

90

1 区出土遺物（5）

1 区出土遺物（6）

図版 18

106

108

107

112

113

115

116

118

119

109

110

114

117

120

122

104

111

105

121

1 区出土遺物（7）

1 区出土遺物（8）

図版 20

２区全景（東上空から）

２区掘立柱建物・柵列全景（東上空から）

２区全景（南から）

２区 SI1 全景（東上空から）

図版 22

2 区 SI1 完掘（東から）

2 区 SI1 炭化材出土状況（東から）

２区 SI1 炭化材出土状況（部分・東から）

２区 SI1 炭化材出土状況（部分・北東から）

図版 24

２区 SI1 炭化材出土状況（部分・南から）

２区 SI1P14 土器出土状況（北西から）

2 区 SI1P2 完掘（南から）

2 区 SI1P9 完掘（北から）

2 区 SI1P8 完掘（北西から）

2 区 SI1P15 完掘（西から）

図版 26

2区 SK17 土器出土状況（北西から）

2区 SK17 完掘（東から）

2区 SK17 土器出土状況（南から）

2区 SK17 土器出土状況（東から）

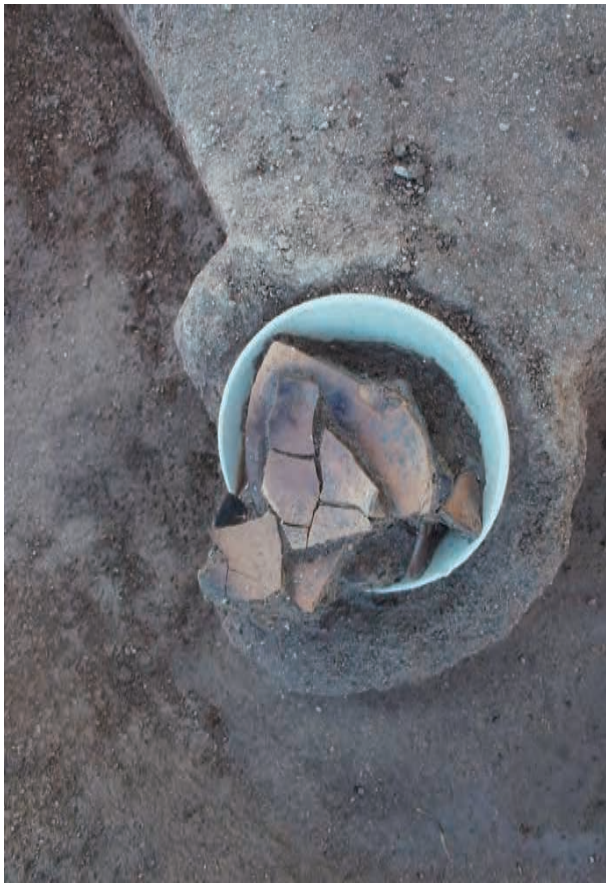
2 区 SP1 土器出土状況（南から）

2 区 SK28 土器出土状況（北東から）

2 区 SP1 土器出土状況（西から）

2 区 SK28 土器出土状況（南東から）

図版 28



2区 SK16 土器出土状況（北から）

2区 SK16 白磁出土状況（北から）

2区 SK16 完掘（西から）

2区 SK16 土器出土状況（北東から）

２区 SP ４土器出土状況（南東から）

２区南壁断面（北から）

２区 SP ６土器出土状況（北西から）

２区西壁断面（東から）

図版 30

132

133

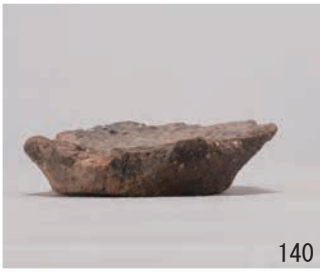
134

135

136

138

137


140

139

141

145

143

142

147

148

144

150

151

２区出土遺物（１）

146

149

152

153

155

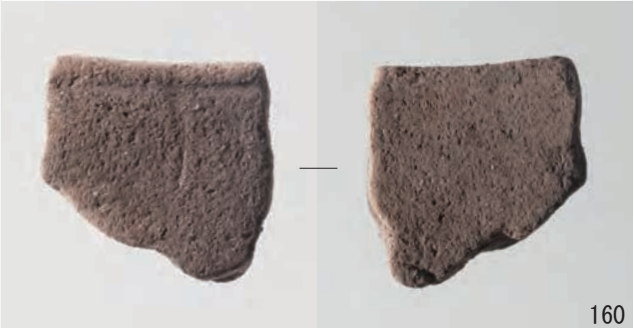
156

161

154

158

157


160

159

164

2区出土遺物（2）

図版 32

２区出土遺物（３）

２区出土遺物（４）

図版 34

２区出土遺物（５）

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	みよういせき	
書　　名	見用遺跡	
副　書　名		
巻　　次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	田布施町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 107 集	第９集
編集著者名	宮下孝優　石井龍彦　磯村義信　岩﨑麻衣子	荒蒔周平
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	田布施町教育委員会
所在地	〒 753-0073	〒 742-1592
	山口県山口市春日町３番 22 号	山口県熊毛郡田布施町大字下田布施3430−1
	TEL 083-923-1060	TEL 0820-52-5813
発行年月日	西暦 2020 年３月 19 日（令和２年３月 19 日）	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな所 在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査 原因
みよういせき 見用遺跡	やまぐちけんくまげぐん 山口県熊毛郡 たぶせちょう 田布施町 おごうおく 麻郷奥	35343		33° 56′ 23″	132° 02′ 18″	20190531 〜 20191122	4,107㎡	ほ場 整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
見用遺跡	集　落	弥生 〜 中世	竪穴建物１棟、掘立柱建物 15 棟、柵列６条、溝８条、土坑 54 基、井戸１基、柱穴約 834 個	縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦器、石製品、土製品、鉄製品	弥生時代中期前半の竪穴建物１棟、平安時代末〜鎌倉時代前半の掘立柱建物 15 棟、柵列６条、井戸１基など、弥生時代中期前半から中世に至る集落跡

要　約

見用遺跡は、弥生時代の竪穴建物・土坑、古墳時代から中世以降の掘立柱建物、柵列、井戸、溝、土坑、柱穴の幅広い時代の遺構が検出された。遺物は縄文時代後期の土器・石器類から、弥生土器・石器、古墳時代から奈良・平安時代の土師器、須恵器、輸入陶器、中世の土師器、瓦器、輸入陶磁器、鉄製品など、数多く出土している。

弥生時代中期前半の竪穴建物１棟は火災による炭化材の出土が認められた。平安時代末〜鎌倉時代前半の井戸からは、230 個体以上の土師器皿や杯・椀、青磁・白磁の破片、瓦器の椀・皿、鉄刀子や鉄滓などが出土しており、儀礼に伴う一括廃棄と想定される。

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第107集
田布施町埋蔵文化財調査報告　第９集

見用遺跡

2020年３月19日

編集・発行　公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号
田布施町教育委員会
〒742-1592　山口県熊毛郡田布施町大字下田布施
3430番１号

印　　刷　瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0927　山口県下関市長府扇町９番50号